

## 第七章 神社・寺院・その他

### 第一節 神社

#### 總説

長洲町では、駅通り、腹赤新町などの貝塚や、各地から石器、土器が出土したことによって、早くから人が住んでいたことはわかるが、人の名前が知られるのは、景行天皇が初めてといわれる。

その後、平安時代の承平三年（九三三）に、腹赤の童子に託宣あつげがあつて、腹赤の深田浦の地に、名石宮が創建されたのが、長洲町の神社の始まりである。

第七章 神社・寺院・その他

律令時代以降、平安朝にかけて、中央からの命をうけた土地の豪族、または下向した、国司、郡司は、租、庸、調等の政務の外、神社、仏閣の管理もその任務であった。したがって中央の指示により、国家安穩祈願や、その他による社寺の創建などにも携たずさわった。平将門たいらのまかど平定祈願のためといわれる、高浜の二宮八幡宮

の創建などはそれである。

平安朝も末期になると、世の乱れとともに、土地の豪族が勢力をのばして、その氏神としての社や、持仏堂なども勧請されてくるようになった。

中世になると、鎌倉幕府の政策によって、それまで公家や大社寺等の所有であった莊園の管理に、地頭が加わり、神社や寺院は地頭の保護のもとに、その信仰はひろまっていた。

鎌倉時代から南北朝にかけて、みえしゆ名主層が著しく成長し、自治的な村落である「惣村」が成立しはじめ、戦国時代にかけて広く発展して、みちしゆ名主による、氏神、持仏堂の建立が行われた。

室町時代の末期以降、現在の大字や区になっている旧村が、多数出現してくるので、村人の氏神に対する信仰とともに、鎮守の社が建てられてきた。

天神と天満宮 長洲町には、二十社余の神社があるが、その中で一番多いのが、天満宮（天神）の八社で、その外、社祠もなく祀られている天神さんが数ヶ所ある。

そこで、これらの天満宮を、社毎に説明する煩雑をさけ、まとめて「天神 天満宮」のことにふれてみた。

菅原道真公を祀る天満宮は、文筆の神、学問の神として、一般に深く信仰され、全国の神社の中でも、八幡宮とともに、数多く祀られている神社である。

菅原道真公（以下略して菅公）は、無実の罪で大宰府に流され、藤原氏に怨みを抱いて死んだといわれ、その後、京都地方には、疫病、火災、雷災、が非常に多く、世の人々は菅公の霊が京都に現れ、災害をもた

らし、藤原時平一族を死に追いやつたと信じられた。

その菅公の霊を鎮めるために、京都の北野と、大宰府の菅公の墓所に、天満宮が祀られて、平安朝末期以降、それが各地に勧請され天神や天満宮と称された。しかし、天神といえは、天満宮の菅原天神と思いがちであるが、実は天満宮は「天神」の一形態なのである。

神は人の要請により「天」から降<sup>くだ</sup>り、人の祈りに応<sup>こた</sup>えては、また「天」に帰る。その降下される所が、「依代<sup>よりしろ</sup>」（神籬<sup>ひもろぎ</sup>）であり、「磐座<sup>いわくら</sup>」である。それは大木であったり、大石であったりする。昔の天神信仰の基は、天の神に対する畏れが強くはたらいっているという。特に雷は神が怒って、とどろき鳴る、すなわち神の鳴りであり、天から降る神火であると信じられていたのである。

菅公の死後、その靈魂が天上にのぼり雷神となり、彼を陥しいれた者達を、横死させたり雷死させたりしたと考えられた。

貞観五年（八六三）五月の御霊會（『三代実録』）等にもみる御霊信仰（怨みを残して死んだ人の崇<sup>たご</sup>を鎮める信仰）と、菅公の怨霊が考えあわされ、いわゆる御霊の一つとなって、社会的畏怖<sup>いふ</sup>の対象となったのである（高取正男著『民間信仰史の研究』法蔵館）それは菅公の死後、京都七条の女や、近江の国、比良の神主の息子に託宣があり、世間の人々の間に広まっていった。

それらの託宣により朝廷では、これを鎮めるため、延長元年（九二三）位を流罪前の従二位右大臣に復位させた。没後二十一年のことである。

その後天慶五年（九四二）北野天満宮が創建されて、火雷天神、天満自在天、などと贈名され、大宰府

においては、菅公の門人で京都から従つて来た、味酒安行あじのやすきが、菅公の没後二年にして、菅公を祀るため、墓所に廟社を建てたのが始まりで、没後四十年にして神に祀られた。それ以来崇りも鎮まり天神信仰がひろまったという。

降つて鎌倉時代、承久年間（一一九〇—一九七）以降『北野天神縁起絵巻』がつぎつぎに作製されたといわれる。この絵巻物は、神仏混淆と、当時の末世思想、地獄極楽思想等が相俟あいまつて、菅公の化現を主題にしたものである。

平安時代の天満宮は、もっぱら怨恨の神、風雨火水や雷の支配神であつて、罪惡の罰すべきものを懲らすという、荒神の意味に信じられたが、鎌倉時代の中頃より末期にかけて、冤罪えんざいを救う神として利生を示し、いかなる所願も成就するという、慈悲救済の神となり、後生ごしちも助ける神となった。（『荏柄天神縁起』）現世的な神から、来世的な神にも変つたのであるが、一方では依然、怨恨の神であり、悪人懲罰の火雷風雨神とする信仰も絶えなかつた。

詩歌、文筆の神としての菅公は、北野、大宰府両天満宮が、ともに菅原氏の氏神であり、菅公の子孫は儒家として重く用いられていたので、文筆に携わる人々は競つて参拝祈願して、その上達を願つたといわれている。

南北朝以降も、慈悲救済、雷火雨風の神としての信仰と、詩歌、文筆の神として敬まわれた。

近世江戸時代になると、寺小屋での教育のなかで、菅公の忠誠心、学徳、文筆等による人間像を、子弟教育の拠りどころとして、天満宮を学問の神と祀りあげ、毎月二十五日には寺小屋の門下生一同が、天満宮（天

神さん)へお参りするところが多かったという。

海沿いの長洲町一帯は、特別雷の多い所ではないが、多年の間には、各地に落雷があつたであろうし、また落雷による死人も出た。塩田には雨は無用であるが、灌漑用水の乏しい所であり、夏の渇水期には、神仏に祈願する外はなく、雨乞が村毎に行われた。清源寺の松野幹雄氏蔵『松野又蔵商事日誌』には、数多くの雨乞の記事が見え、とくに明治二十六年(一八九三)に八回、翌二十七年に六回、清源寺天満宮への降雨祈願や、雨乞の行事が行われて、二十七年には鍋村(岱明町)からも雨乞の行列が来た。と記録してある。

以上のように天満宮は学問文筆、慈悲救済の神であり、風雨火水、特に祈雨の神として敬まわれ信仰されてきたものである。

神社と石造物 次に神社に奉納されている、石造物について簡単に述べると

- ・鳥居についてはその起源は古く、神に供えた鶏のとまり木から始まるともいわれている。また、インドのストッパー(塔婆)の外に建つ石造の門から発生したという説もある。

いずれにしても神域を表示して、禍事、罪穢などを祓い清める役目をしている。わが国の神社建築の中で、日本独特の簡素な形を完成して、一般の人にも親しまれてきた石造物の一つである。

- ・狛犬は高麗犬とも書く、当地では「やま犬」と呼ばれている。起源は中国の漢の時代に始まる(『日本石仏事典』) 日本では奈良時代から見られ、平安時代から鎌倉時代には、木彫の狛犬が、神社仏閣に現れ、その遺品の現存するものも一、二ではないといわれる。初期の作風からみて内殿にあつたものが、時代の降るにつれ、殿外に置かれるようになったものと推測される。

殿内にあるものとしては、長洲町では、小形の古い型のものが、四王子宮に一对あり、一先宮に現在の狛犬の形に似た土焼きの、高さ十五cmぐらいのものが一对納められている。

狛犬は通常一对のもので、口を開く「阿形」と口を閉じる「吽形」がある。どちらが雄でどちらが雌かは、よく問題になるところであるが本来は両方で一体のもので、呼吸の「吐」「吸」を表現するため二体にしたとの説もあるが、吽形が子を抱く姿に彫られているのも見うける。高い台座に、両前足を直立させ、胸を張り目をみはる姿は、雄渾で、その魁偉な風貌は、いかにも靈力を備えていると思われ、守護の役目を果たしてくれる頼もしい石造物である。

・石灯籠は、仏前に供える灯明台として造られたものであり、その源流は中国という。

平安時代から神社にも建てられ、室町時代になると、社前または堂前の左右に配するようになったという。江戸時代には常夜灯としても用いられ、神社の参道や入口に建てられ、参詣者に親しまれる石造物である。

長洲町の奉納石灯籠は一・二を除いて殆ど四角形になっている。

ここに集録した奉納石造物は、昭和二十年までのもので、以後の石造物は割愛した。また奉納者氏名は、明治以降のものは記載していない。

また記載の神社名は、熊本県神社誌による。

傍点「ママ」は資料に記載されてある通りの文字や文である。

名石神社

二座一宮

上沖洲

女石神社

祭神

名石神社 景行天皇

女石神社 御刀媛みほろひめ（美波迦斯毗売）

例祭日 十月十二日十三日

創建 承平三年八月十三日

社殿 本殿 切妻流造一七平方米

幣殿 一六平方米

拝殿 入母屋流造、四八平方米

女石神社 拝殿 二二平方米

社宝 日本刀 二口 銘同田貫宗広作及無銘

社記 神道裁許状 古記録

社記

肥後國玉名郡庄代庄腹赤邑之内沖洲。

神社二座

陸社一座

## 名石大明神大足彥忍代別尊

大足彥天皇誅球磨噲還幸乃時八代沖仁見知火曰火國因是火前火後乃國名赴留夫與利泊御船於玉杵名邑仁以鈎釣魚是則腹赤乃爾陪奈理茲腹赤濱止云

又御船左右游魚多之棹人吉備國朝勝見以鈎釣之多有耽獲即獻 天皇勅曰耽獻之魚此為何魚朝勝見奏申末解其名止似鱒魚耳磨御覽曰俗見多物即云爾陪佐爾令耽獻魚甚此多有可謂爾陪魚謂爾陪魚此緣也

天皇十八年夏四月壬申自海路泊於葦北小嶋而進食時召山部阿弭古之祖小左今進冷水適是時嶋中無水不知耽為則仰之于天神地祇忽寒泉從崖傍涌出乃酌以獻焉故号其嶋曰水嶋也其泉猶令在水嶋崖也同年五月壬辰朔從葦北發船到火國於是日沒也夜冥不知著岸遙視火光 天皇詔扶抄者曰直指火處因指火往之即得著岸

天皇問其火光處日何謂邑也國人對日是八代縣豐村亦尋其火是誰人之火也然不得主茲知非人火故名其國曰火國是謂知火之筑紫此緣也

## 沖社一座

## 女石大明神美波迦斯毗賣

景行天皇廿三年秋八月御刀媛腹赤濱仁鎮座宮柱廣敷立高天原千木高知氏天乃御蔭日乃御蔭止定奉天經歷幾乃年乎賜矣御妃御刀媛日向國與利天皇乃行幸尋天自船追來留到腹赤濱仁還幸乃由於聞食天海濱仁御裳乎浸而哭泣流涕焉其淚隨是名天謂長渚濱止歌然後欲入海仁時老公止老婆止阿利吾是國神止名乃留御刀媛告曰吾袖乃中仁瑞寶瓊阿利天皇日向仁志天吾仁竊仁授麻津利而祝口深秘清潔元心於慎而奉祭崇陸社

汝等清慎而奉祭崇齊止言記而遂海底仁隱沒須海中仁化為石海原手光須奉祭崇沖社止矣朱雀院御宇秋八月玉

名郡腹赤邑家兒甫三歲神明憑曰我者是人皇第十二代景行天皇妃也令女石大明神顯也 庄國內人民我於禮祀者國家豐饒風雨順和五穀能成得万病則者布瑠部以言祈禱滄海齋船之出入無障礙見居悉村野痘疹安恭一一無遂念願無不成就于時國民驚神地清女美豆乃御舍於大敷立錦乃益覆曰乃繩曳張奉遷神爾靈廟故朝清夕波羅伊捧幣帛諱意奉留允感應日々感而祭庭無怠懈矣

後奈良院御宇亨祿年中猶草創昔社家拜御正射之御箱奉安鎮有時社家妻女妄奉拜開御宮寔以不善破古例其夜自御神殿火出而乘神器燒失雖然御正躰之箱乍焯避此洲崎依謂焯洲此緣也

後水尾院元和元年 神託御神夢教欄宜濱乃南海上一洲見多利爲仁彼洲尔定神地奉安置矣

大足彥忍代別尊仁第三子也母曰日葉洲媛命丹波道主之女也年女一立爲皇太子八十一歲即位大歲在率末立播磨稻日即姬爲皇后十三年於日向國有佳人日御刀媛即爲妃五十八年春幸近江國居志賀三歲是謂高穴穗宮治天下六十年崩時年百四十年以城幣二年冬十一月葬倭國山邊上陵矣

壬辰之秋祠官古莊氏不遠千里而就予請其舊記之書写然予兆其人雖固辭 不己書以

夜于其求善以色見白雲万里矣

正徳二年重陽後十日

神山産土從五位下賀茂縣主重舊

(名石神社宮司 古庄繁樹写)

由緒

大足彥おあつひこの天皇(景行天皇)は、球磨くま磨ま嶺せを誅して帰都の途中、この浜にお着あきになられた時、御船の左右

に腹の赤い魚多く、之を釣り、天皇に奉った。この魚を御覧になった天皇は、爾部魚と名づけられた。

景行天皇行幸五年後（一説に七年）、即ち天皇二〇年八月、妃御刀媛が、日向国から、天皇を尋ねて御着きになったが、すでに御帰りの後と知らされ、非常に悲しまれ、所の老公老母に、「我が袖の中に瑞瑗（玉）あり、帝、日向にて潜かに我に授け給う。宜しく是を陸社と崇祀るべし。」、と言訖つて遂に海底に隠没、石となられた。その時お供の侍女二人がともに海中に入り石に化したという。

その後、人皇第六一代朱雀天皇の承平三年（九三三）（一説に二年）八月、腹赤邑の民家の三才の童子に、「我ハ是人皇第一二代景行帝妃御刀媛也 今女石大明神ト現ズ」と託宣があり、神地を清め社を建て、陸の社を名石大明神として、瑞瑗を納めた御宮を神殿に奉祀し、沖の御正体（磐）を女石大明神と号して、陸と沖の二社が出現したものである。

第一〇五代後奈良天皇の享祿三年（一五三〇）のある時、社家の妻女が、御神体の御宮を明けて奉拝した。其の夜、神殿より出火、社殿悉く灰燼と思われた時、御神体の宮は、焯となって、沖の洲崎に難を避けられた。社殿は再建され、神社は旧に復したが、元和元年（一六一五）（古庄文書には元和三年）託宣により、上沖洲の現在地を宮地と定めて遷座された（以上『肥後国誌』より）

寛政四年（一七九二）閏四月一日午後七時過ぎに来襲した大津波により、当社の社殿も流失した。『両肥大変録』には、その後のことを次のように書いてある。

前略―扱此村の氏神、名石宮の御宮所不残打崩して、御座等もましまさず、社主も流失して、其の後尋ぬべきよすがもなく日を送りけるに、此の村の人に常々信仰厚かりける人あり。或夜更に及び流失の跡見

渡し居るに、遙の泥中に異なる一つの光物を見る。此の人怪むといへども二三夜も如是いたしける。余人も是を見れども恐れて行く者なし。然共此の人少し心付く事ありて、其の夜の明くるを待ち、右の光ありし所に行きて、泥を少し除ければ、下に十二面の神鏡次第に重り覆ひ、其の下に神体は泥にも穢れ給わず、ありありと現れ給えり。此の人驚きながら歎喜の涙を流し、則ち腹赤村庄屋宅へ御供奉いたし、其の後沖之洲村へ仮宮をしつらへて、遷座し奉る。(以下略)

その後、両神社の社殿は、陸社の南側に沖社が、同規模で、並んで再建された。

昭和九年七月十九日、落雷のため、両社とも焼失して、陸社だけは再建されていたが、日立造船進出後、名石浜埋立に伴ない、沖社の御正体も、陸社の南側に移転奉り、拝殿も新築されている。

神社の記録によれば、藩主細川家代々の信仰は厚く、文政十一年(一八二八)十月には、藩主斉護公の御社参があり、社司に御目見得仰付られ、その外、六代宗孝公の御社参や、五代宜紀公の代参の人など、度々の参詣があつたようである。

御刀媛が入水せられたと伝えられる海岸を、後年姫ヶ浦と呼ぶようになり、明治三十七、八年戦役記念に松を植樹して、腹赤の名勝地となっていたが、昭和初年の頃、史学者で玉名中学校(現玉名高校)の教諭であつた中川斉先生はこの地を訪れて、漢詩、七言絶句一首を賦しておられる。

腹赤懐古  
中川斉月

釣貢紅魚慰旅心

山光水色浴王臨

可憐皇媛沈濱海

腹赤古原歛慨深

尚この名石神社は、旧村社であり、神饌幣帛料供進指定社であった。

### 神社行事

#### 例大祭

古記録によれば、両神社の祭礼は八月十三日と二十三の両日であったが、文政十二年には、郡代宛に、古からの申伝えもありと、八月十三日から二十三日まで、「続市等御免」の願書が出されている。それによれば、昔は肥後の国は申すに及ばず、三池の領内からも参詣人があったが、寛政の大変以来海辺続きの村々は、家屋の流失等で、遠方からの参詣人も減る一方であり、去る両度の大風（文政十一年）で、社殿の破損も大きいので、差急ぎ修復致し度く、続市の許しを賜り度いということである。

それから、天保十三年（一八四二）には、歌舞伎芝居興行の許可願が出されている。

#### 乍恐奉願覚

一、歌舞伎芝居株十ヲ

但陸社神殿拝殿甚痛損居候ニ付

修覆料為助成本行芝居株御免

被仰付被下候様奉願候（後略）

とあり願書の中には、天保六年と同九年に芝居が許可になっているので、今年も晴天十日。十芝居の興行

御免の御許を御願いの旨、しるされている。これが名石宮芝居の始まりであろう。明治から大正にかけては、特別の場合を除いて、毎年芝居が続いていた（松野又藏商事日誌）。昭和になっても戦前は、旅役者による芝居が、度々興行され、「女沢正」などが、見物人を喜ばせたとの古老の話である。

現在の例大祭は十月十二日十三日である。

#### 鯛換

当社の鯛換の起源である「はらかの贄」は、景行天皇の故事により、聖武天皇の天平一五年（七四三）以来 朝廷へ献上されたものであるといわれる。

腹赤の贄は、単なる朝廷への貢上品ではなく、贄のなかの贄、いや、總ての食品のシンボルとして、朝廷での儀式のなかで最も重要な役割を演じたのである。

一月元日、宮中で、四方拜の儀式、及び、朝拜の儀式があり、その後豊楽院で元旦の節会がある。

その節会に先立って、御曆、氷の様、腹赤の贄が献上される。

御曆は七曜の曆といい、その年の七曜、二十七宿（二十八宿）干支、納音、十二直、二十四気、七十五候などが詳しく記入された具註曆であるうえに、日、月、五星の位置・運行なども記載した一種の天文曆で、最高の曆であった。したがって、この曆を奉ることが、新年の行事のなかでも最も重要な儀式であったのである。

氷の様とは、氷室に保存した旧年の氷の、厚、薄を奏して、その年の豊、凶を占うものである

新年の晴れがましい行事のなかでも、クライマックスともいえる御曆を奉る儀式で、豊凶を占う、天然

現象のシンボルとしての水、そして天の恵みの賜物で、収穫物の代表としての、腹赤魚が、めでたい年を象徴するために、加えて奉られたと考えられる（田辺哲夫著『腹赤の贄』から要約）

それでは、腹赤の贄はいつ頃まで献上されていたのであろうか。

寿永三年（一一八四）の正月を、讃岐の八（屋）島で迎えた、安徳天皇と平家一門のことを『平家物語』巻の九の始めに。

前略……主上わたらせ給へども、節会も行われず、四方拜もなし、鱧も奏せず吉野の国栖も参らず……以下略

と屋島での味気ない寂しい正月の様子と、腹赤の贄の終焉を物語っている。『平家物語』は軍記物語であるので、確実とはいえないが、以後腹赤の贄のことは、史書にも出てこない。

ところで、腹赤の贄とはどんな魚であったのか、腹の赤い魚というところから 腹赤の爾部と命名され、腹赤（鱧）の地名も生れたが、ニベという魚は当地にはいないという、あかぐちではないかとの説もあるが、腹の赤い魚で、めでたいといえは、まづ鯛が連想される。

江戸時代、肥後藩から後水尾上皇へ献上の魚も鯛であり、明治五年の熊本行幸に際して、腹赤村の古庄源次郎が献上したのも鯛であり、昭和六年の大演習の時献上したのも鯛であった。

以上の事例をふまえての、鯛換の行事であろうか、昭和三十一年に建設の、鯛換記念碑に  
当社鯛換式ハ中古頽廢シタルモ明治二十三年再興セラレ

とあるから、かなり古くから鯛換の行事が行われていたものと思われる。

鯛換の行事は、番号のはいった札を買い、当り籤と、金の鯛、その他の賞品とを取替える一種の富籤のよ  
うなものである。

この行事は第二次大戦で中断していたが、戦後復活している。

#### 輪わく潜くり神事

当社では夏の土用入りの日。輪潜り神事が行われる。芽輪ちのわく潜り、夏越なごしの祓ともいわれ、芒すすき等で作った大きな輪を境内に設け、御祓の後、宮司が先ず潜り、続いて参詣者を潜らせてこれによって穢れを落し酷暑の息災を願うといわれる。

この神事は延喜式にも記載されている神事というが、陰暦の一年を前後に分け、前半の終り六月晦みそか日に、半年の罪穢を祓う神事で、夏な(名)越ごしの祓、水無月みなづきの祓で、一二月の祓を年越の祓というが、陽暦になつてから、それぞれの神社で日を定めて挙行されている。

#### 名石宮神楽

長洲町指定無形文化財である名石宮神楽は、明治一八年、玉名市の玉名大神宮(遙拝宮)から伝えられたものといわれるが、境内に神楽の記念碑が建ち、一〇〇年余も守り続けてきた人達の氏名が刻まれている。舞人は小学校及び中学校に在学中の少年達である。

舞の曲は十曲で、清源寺神楽と同じものという。詳しくは清源寺神楽参照のこと。

#### 境内さいし祭祀神

・猿田彦大神 凝灰岩 自然石 高二・五m幅七〇cm台石に、上沖洲青年の宿主及び宿子六名の氏名が刻ん

である

- 石祠 凝灰岩 間口七〇cm 奥行六〇cm 軒高七〇cm  
幣を祠る

この外に、いぼ石さんと称して、いぼを治すという逆修碑があるが、信仰石造物の部に記載。  
奉納石造物

- 鳥居 明神形 凝灰岩 豎額の名石宮の外文字は見えない。境内の外の道路上にある。
- 鳥居 コンクリート製

- 石灯籠 一對 凝灰岩 全高二・九七m 笠上に狛犬あり

明治四十三年十月十三日

当村氏子 奉納者名

石工住所 氏名

- 石灯籠 一對 凝灰岩 高さ四・一m

昭和十四年五月吉日建設

腹赤村大字清源寺 奉納者名

昭和四年七月長男日出男海中に溺レシ際一命ヲ助カリシハ神明ノ御加護ニヨル茲ニ記念ノタメ獻灯ス矣  
• 狛犬 一對の内呵形失、台座のみ残る、これは昭和九年の火災のためなくなったという。花こう岩、体高

七七cm 体長九〇cm

左側台座（台座だけ）

安政五年□□十二月吉辰

□村幸七 古庄嘉右衛門

世話人 清源寺 慶作 沖洲 □右衛門 問屋利平次 庄□ 林□ 九平 猪之吉

右側 吽形の台座

吉田丈之助 高瀬 油屋儀一郎 防州□□□浦 吉祥丸虎吉 宝栄丸平左衛門

明福丸安左衛門 □□丸甚左衛門

明神丸嘉平 金吉丸与吉 □栄丸清藏 筑後手鎌 諸吉・孫助 沖洲 喜平エ太 次エ門

発起人 清四郎 藤五郎 折地 弥兵三 清源寺 □□□□ 儀一郎 倉助

『玉名郡誌』によると、作者は肥前国塩田の住人で猪之吉という人であったと記してある。

・狛犬 一對 花こう岩 体高五八cm 体長六四cm

奉納 熊本 奉納者名

熊本石工 氏名

・狛犬 一對 凝灰岩 体高九〇cm 体長九六cm

奉納 昭和十四年五月吉日

奉納者夫婦の氏名 石工 住所氏名

・石碑 碑高一・六m 前横共幅四五cm 台石高二九cm 基壇七〇cm 凝灰岩

名石宮創立一千年季祭之碑

昭和三年四月一日建設

社掌 氏子總代 九人の氏名を刻入

・石碑 凝灰岩 全高三・九m

神樂創立五十年記念碑

明治十八年三月当神社社掌古庄常丸氏子總代他関係人当神社に神樂ナキヲ憂ヒ神樂組織ヲ發起シ玉名郡玉名村神樂師匠福田幸次郎氏を招キ同月伝習ヲ終へ爾來石本才藏幹旋ノ元ニ伝習繼承シ來ツテ茲ニ五十年ヲ閱シ昭和八年四月四日神樂創立五十年祭並ニ死者慰靈祭ヲ機トシ記念碑ヲ建設ス

氏子總代、社掌、神樂組織関係人、記念碑建設主催者等 二一人の氏名を刻入 外に

初代 一〇人

二代 一五人

三代 一〇人

四代 一三人

五代 一三人

六代 一九人

八代 十八人

後援者 二人

以上の氏名が刻入されている。

・石碑 花こう岩 自然石 高一・三七m

幅七〇cm 台石高二一cm 基壇高六三cm

滄海變所不能免而神威赫々守護黎民焉社殿 乎千秋存焉是以崇敬益加焉按家譜六世喜次郎翁者腹赤村沖洲岡村家之出也六政二年來繼承我広瀬家翁為人誠実温諄不求衣食華美闔鄉至今猶欽其德夙富敬神之念撰祠之隣田拳其取穫充獻燈費而後裔亦繼其遺志不懈以至今日矣嗚呼神德悠遠長擁護我家運是深所以尊崇不能措也今茲寄宅地壹百八拾貳坪永為神祠之財欲充祭案之一端以足表現祖先遺志乎茲勤貞珉以傳不朽云爾

大正十年歲在戊午七月

廣瀬久門

この碑は、腹赤新町の岡村家から、玉名市川島の広瀬家に養子に行かれた、喜次郎という人の子孫、広瀬久門という人が、先祖信仰の名石宮に、宅地一八〇余坪を寄進されたのを、記念して建てられたものである。

・記念碑 花こう自然石、高一・四五m、台石 高七〇cm 基壇石垣 高一・二m

名石神宮鎮座一千年記念碑

昭和十三年四月建設

当社鎮座千十年季祭二際シ

櫻樹ヲ神社裏塘ニ植工

記念碑ヲ建設



名石神社



姫ヶ浦沖にあった時の女石神社御正体

社掌 氏子總代七人の氏名を刻む

・石塔 花こう岩 高七八cm 前幅三三cm

笠は他からの移補

明治廿八年二月軍族マツ從野戰砲兵第六聯隊  
門司港至旅順口進水師營冬十一月軫威海  
衛在七個月干此矢偶於詖地得敵艦砲彈而  
還時明治廿九年六月是爲紀念砲彈獻納神

清源寺村 奉納者名

戰前、当神社の境内には、機雷、魚雷、  
砲彈等が、奉納され展置してあったが、そ  
の中の砲彈を獻納された時のものであろう。

十二石神社 腹赤新町

祭神 御刀媛の侍女十二柱

例祭日 十月十三日

創建 不明

社殿 ナシ



十二石神社

由緒

名石神社の境外摂社である

景行天皇御発軀後、御後を慕って来られた御刀媛は、嘆き悲しみのあまり、入水して磐いわとなられ、侍女十二人も、ともに後を追う海に身を沈めて、石と化なったという。

その後、加藤清正の行末塘の干拓に続く度々の干拓で、海であった腹赤台地と沖之洲の間が、塩田に利用されるようになり、神石が点々と現れてきたので、畏れ多いと一ヶ所に集め奉祠したのがこの十二石神社である。

今では、コンクリート柱と鉄棒で、玉垣を作り、内側に金網を張っている。

奉納石造物

・鳥居 明神形 凝灰岩

奉寄進 大正十一年五月吉日

奉納者名

・石灯籠 一对 凝灰岩 全高一・五五m

嘉永二巳酉年九月吉祥日

当村氏子中

• 石灯籠 一本 凝灰岩 火袋失

弘化二年乙巳三月吉日 宮崎彦九郎

• 狛犬 一對 凝灰岩 体高七五cm 体長八五cm

奉納 大正十一年九月十二日

奉納者世話人八人の氏名を刻入

• 石柱 一對 幟立用 高六〇cm

奉寄：<sup>卍</sup> 文久三歳亥三月吉祥日

関源五左：<sup>卍</sup> 岡村庄；岡村太：下部土中

世話人 清作 宇太郎 石工 伝八

• 記念碑

遷座五十年記念

昭和十一年十月二十一日建設

氏子中

世話人 寄附者 二二人の氏名刻入

高浜八幡宮 (二宮八幡)

祭神 應神天皇 住吉明神、天照大神

例祭日 十月十一日

創建

天慶年間

社殿

本殿 入母屋流造二七平方 m 幣殿 一二平方 m 拝殿 入母屋平家三〇平方 m

倉庫 一八平方 m

縁起書（棟札）その一

奉再興大日本国鎮西路肥之後州玉名郡高浜二宮宝殿一宇

夫当社二宮者野原八幡宮之三所也垂迹者住吉大明神本地奉尋者東方淨瑠璃世界教主也我此名号一經吾耳衆病殲除身心安穩之誓願廣大可仰可信然所御宝殿及破懷故企再興成遷宮神躰增本地垂迹之威光哀愍納受加無畏之守護仰願当国大守細川侍從綱利公御武運長久而御子孫繁栄国家安泰殊者氏子中息災延命五穀成就家門昌栄所求成弁如意満足吉如件

干時元禄三庚午天 十一月吉日

野原山 靈驗寺常住祐全

当社 祢宣 浜崎五郎衛門尉

庄屋 橋本七左衛門

大工

組頭 次兵衛

古庄三郎兵衛尉藤原光英

兵左衛門

寺田新左衛門尉藤原直光

次右衛門

水野利兵衛尉藤原正祐

八介

三郎兵衛

次郎兵衛

縁起書（棟札）その二

聖主天中天 奉再興南閭浮提大日本国肥之

迦陵頻伽聲 後州玉名郡高浜二宮宝殿一字

哀愍衆生者 岨宝曆第七龍集丁丑極月吉旦

我等今敬禮 野原山靈驗寺現住 大阿闍梨法印快瑞識

原夫当社二宮者朱雀帝御宇天慶年中平將門反逆繇追討祈願而合祭住吉明神安置海辺之高浜以為本社野原八

幡宮三所同一體也本地者東方淨瑠璃世界教主藥師如來矣經曰我名号一經其耳衆病悉除身心安樂無盡願海廣

大円満人人無二但信而可仰可尊焉

星霜時移垂垂宝殿大破今茲宝曆第七季冬之日再興既成乃奉安神體以倍增本地垂迹之威光矣所冀宝曆遐長天祚

永久大樹尊君保国安民福延萬世本國大守常守尊榮鎮保邦内持風調雨順五穀豐稔氏子檀越罪障消除福壽增長

家運追日盛子孫歷世榮心中求願應念成辨也祝至禱

高浜邑庄屋 藤七

頭百姓

大郎左衛門 源七

文七



高浜八幡宮

縁起書 其三

当八幡二宮氏子一同謹テ詞殿ヲ遷シ奉ラン事ヲ議ス此議専ラ詞殿ヲシテ倍々莊嚴ナラシメント欲スルノ意ニ基ク也 然レドモ奉遷詞殿ノ事宜シク神教ヲ要ス乃社掌ヲシテ神教ヲ請ハシム幸ニシテ遷詞ノ事神意ニ適フノ託宜ヲ拝受スル事ヲ得タリ 依テ社掌村長氏子總代連著シ奉遷詞殿願書ヲ提出シテ其許可ヲ受ク 於是周旋人一同相会シ奉遷工事ニ関スル請般ノ協定ヲナス 協定ナルヤ直ニ工ヲ起ス時ニ大正七年一月二十日ニシテ爾來繼續工事ニ努メ漸同年五月十日ニ至リテ工全ク成ル此間実二百十一日也

五右衛門 文次郎 善兵衛

新左衛門 勘兵衛 文右衛門

勘五郎 四郎左衛門 勘七

因 邑 邑 邑 邑 邑

同 野原邑 空助

小工 清源寺邑 伊三次

甚藏

清右衛門

平原村 半藏

野口村 吉助

掃除人 浜崎五衛門

- 一、社内西方高地ノ繁茂セル樹木ヲ伐採シ新ニ神殿安置ノ位置ヲ設ク
- 一、神殿ヲ現神殿ノ位置ヨリ現形ノ仮新設セル安置ノ位置ニ奉遷ス
- 一、拝殿ヲ五階段石上ノ殿跡ヨリ現形ノ仮旧神殿跡ニ奉遷ス
- 一、神殿前ノ石垣及ビ其兩側ノ石階段ヲ新ニ築設ス
- 一、神殿ヲ饒ラス玉垣ヲ改修ス
- 一、神殿ノ屋根ヲ修覆ス

大正七年五月吉日

社掌

村長

氏子總代

由緒

この縁起書の書写配列は全部 四王子宮宮司 松田破魔男氏による  
 旧村社であり、神饌幣帛料供進指定社であった。

勧請は、縁起(その二)にあるように、人皇六一代朱雀天皇の承平七年(九三七)平将門に追討の官符が出され、天慶二年(九三九)将門は、常陸(茨城)下野(しもつけ)(栃木)上野(こうづけ)(群馬)の国衙を襲い、新皇と称したので、追討祈禱の命が下り、八幡宮を勧請したといわれる。一説には平将門追討祈願のため、肥後の国司、尾藤小卿肥後守隆房が、肥後の国に七社を建立したその一社ともいわれる。

その後宝治年間（一二四七—四八）に、小代氏が下向してからは、野原八幡宮を鎮守本社、高浜二宮、井手三宮、蔵満四宮を鎮守撰社として崇敬。当社には祭祀料田一町歩修理田四反歩を寄進し、野原八幡宮の神宮寺、靈驗寺の所管とした。

この神社の祭神は、應神天皇、住吉大明神、天照大神である。

應神天皇は、人皇第一四代仲哀天皇の第四皇子、誉田別命（はんだわけのみこと）といひ、母神功皇后の胎内にあつて、新羅（しらぎ）に行かれ、帰国後生まれられたので、胎中天皇の称があり、一五代目の天皇になられた。八幡宮の主祭神である。天照大神、天皇家の御先祖であり、我が国では最も崇敬せられる神である。八幡宮の祭神は、應神天皇、神功皇后、住吉明神（仲哀天皇、武内宿祢を祀る社もある）の三神を祀るところが多いが、相殿に天照大神を祀るのはめずらしい、この地にあつたといわれる伊勢信仰からであろうか。

住吉明神は、表筒男命（うむつつかのみこと）、中筒男命、底筒男命（そこつかのみこと）の三神で、海上守護の神である。この三神は伊邪那岐命（いさなぎのみこと）が、筑紫の日向の橋の小門（おと）の阿波岐原（あわき）に、禊祓（みそぎ）い給いし時に、その水の表面、中、底に、生（な）りませる神である。

#### ・縁起書その一

元禄三年（一六九〇）社殿改築の際、書き遺されたものであるが、もとは棟札と思われる。

夫当社二宮は野原八幡宮之三所也。垂迹は住吉大明神、本地を尋奉れば浄瑠璃世界の教主なり、とあるの  
で、こゝでは野原八幡宮の相殿住吉明神が主祭神であるが、住吉明神は垂迹（すいじやく）で仮の姿であり、本地は東方浄瑠璃世界の教主、即ち東方浄土の教主薬師如来という、神仏習合の考え方である。後は信仰の功德と、藩主の繁栄、氏子の息災延命、五穀成就を祈願したものである。

## • 縁起書その二

宝暦七年（一七五七）の冬、社殿が改築された時の記録である。

「聖主天中天（たうまうちん） 迦陵頻伽（がらうびんが）聲」の聖主は東方浄土の教主薬師如來のこと、薬師如來は、みずみずしく、若々しく、光り輝いておられ、浄土の鳥迦陵頻伽は、この世では見られない美しい鳥で、鳴く聲は仏の声のようだと いわれる、「哀愍衆生者（あいみんしゆじや） 我等今敬礼」とは、私は衆生を哀んで求いの手をさしのべておられる、我等は仏を敬い尊び禮拜する。ということである。

また南閻浮提（なんえんぶだい）とは、須弥山（しゆみせん）をめぐる四州の一つで、須弥山南方海上にある大陸、即現在の人間世界のことである。

野原山靈驗寺現住、大阿闍梨（だあじり）、法印快瑞謹識、と当時の社僧が威を揮っていたことがわかる。大阿闍梨は、祈禱その他の修法の時、導師を勤める高德の僧で、法印とは法印大和尚（だいかうしやう）の略称、また山伏の異称である。

天慶年中、平将門反逆追討のため海辺の高浜の地に、海の神住吉大明神を勧請したが、本地は、薬師如來で、星霜時移つて社殿が荒廢したので、宝暦七年の冬十二月に再興したということである。

## • 縁起書その三

大正七年に神殿を現形のまま、西方高地の現在の場所に奉遷、拝殿も現形のまま神殿跡に移動、幣殿の改修がなされている。

昭和五十一年に拝殿が改築された。

## 境内祭祀神及石祠



奉納鱧口

・天満大自在天 石像 砂岩

石祠は崩れて後方にある、その一片に

奉勸請 天満自在天

享保□□□□ 時正二十九日

横に屋根石があり切妻造

・石祠 切妻流造 間口四六cm 奥行三八cm 軒高四四cm 凝灰岩

石像 荒神 総髪座像、像高三五糎

・石祠 寄棟造 間口七九cm 奥行四七cm 軒高三三cm 凝灰岩

奥壁に

阿蘇大明神

天照大神宮

春日大明神

と刻り、右壁に

奉勸請 願主 当村庄屋 橋本七右衛門

橋本孫七郎

清右衛門

七三郎

甚助

享保六年辛丑二月

浜崎太郎右衛門

氏子中

・石祠 切妻流造 間口六三 cm 奥行四四 cm 軒高五二 cm 凝灰石

神像 石造 宝珠形の持物

行事

むかしの二宮八幡宮の祭では、花火と楽がが有名であったという。菜切川と境内との中間にある畑から、嵐火が飛び賑かで近郷からの見物人も多かったと聞く。

現在は、以前分村した荒尾高浜との合同で両区長、氏子總代が出席して、

祈年祭 二月十七日

例大祭 十月十一日

新穀感謝祭 十一月二十三日

を行うだけである

奉納金工物

・金銅製鰐口 横直経二四 cm

二宮大明神御宝前 敬

奉寄進鰐口 白

九州肥後国玉名郡小代野原荘高浜村

皆寛永廿癸未曆八月吉日

庄屋本田助右衛門

寛永二十年は西曆一六四三年である、盗難の恐れもあるのでこの鰐口は、建浜区の、区長さんが保管している。

### 境内奉納石造物

・鳥居 明神形 凝灰岩

奉獻 御大典記念 昭和三年四月吉日

豎額 徳永淡水書

布嘶渡航者十二人の奉納である

この鳥居の他に鳥居があったが、昭和六十年の台風で倒壊し、その跡にコンクリートの鳥居が建っている。

・石灯籠 一对 全高一・五m 凝灰岩 宝珠失

二宮八幡宮 明和三丙戌四月吉祥日

高浜村善太郎

火袋の下の中台と、竿石下に 請花と反花が付いている。神社の奉納物としては珍しいものであるが、こ

れも神仏習合、社僧支配の名残りであろうか。笠上の宝珠が失われているのはおしい。

● 石灯籠 一基 凝灰岩 全高一・二m

宝珠失

奉寄進 二宮八幡宮

文化四年 十一月吉日 浜村 和七

一対であつたらしく、片方に台石が残る

● 石灯籠 一対、凝灰岩 高サ三・一m

奉獻 大正七年三月吉日

当村三人の奉納である

● 石灯籠 一対 凝灰岩 高サ三・二m

獻燈 大正五年十月吉日 氏子中

● 狛犬 一対 花こう岩 体高八三cm 体長八〇cm

御即位記念 大正四年 氏子中

● 御手洗 自然石

大正七年吉辰

奉納者 五人と立浜氏子中

● 石柱 高サ 左五八cm 右五〇cm



奉納石灯籠



奉納罎口縮図

奉寄進 文政四年九月十二日

平木栄助 三十二才

世話人 石取寄 氏子中

### 四王子神社

長洲宮ノ町

祭神 日本武尊外三神（景行天皇の四王子）

例祭日 五月十五・六日 十月十五日、六日

創建 永暦元年九月十五日

社殿 権現造 本殿四二・三平方m 幣殿三〇平方m 拝殿四八平方m

由緒

『肥後国誌』によれば

社記云、二條院永暦元年九月十五日筑前国御笠郡四王子嶽ヨリ長洲へ来現依レ之今ノ社地ニ奉遷宮長洲町の産神也社司前々ヨリ社内空地ニ在居シ下社人ハ町並年貢地ニ居レリ云々、当社の産子従前々水魔ノ難ナシ又蟒ノ食ウコトナシ惣ジテ蛇蝎適々社前ニ来ルコトアレバ動クコトヲ得ズ里俗之ヲ見聞スル者甚異事ナリトス川守蟒ノ符アリ

又、長洲の馬場家に伝えられた同家の先祖馬場十助という人の、安永年間（一七七二―一八〇）の覚書（馬場文書）の旧事記には

四王子宮は景行天皇の王子四人を祀り奉りしなり、右宮之正月元朝に鏡餅三ツ先祖より毎年上げ来り。是をよりどころにして御神体四人にて在けるにや、近代拝せし人なければ不審、但し御神体は三体在スよし申伝へなり。

## 加筆

一説には筑前の国しおうじの嶽より御来臨まき在ませしと申伝へなり。大宰府より半里程北に白王子村あり御笠郡の内なり。此の村の氏神の額に白王子宮とあり。以下略

以上のことから氏子は、四王子宮の神は、筑前四王寺嶽から来現されたものという。

この四王寺嶽は、通称大野山で、古代大宰府防衛の拠点であつて、山全体が古代朝鮮式の山城である。この大野城の仏法守護の寺が、四王寺であることから、四王寺嶽と呼ぶ。四王寺の謂は、天智天皇二年（六六三）白村江の戦で大敗し、新羅の来襲をおそれて、これを調伏よちやく（祈り伏せること）のため、宝亀五年（七七四）四天王を祀つた。それで四王院また四王寺と呼ぶ。この四王寺嶽の最高峯王城山（後大城山と改む）に王城大明神が祀られていたという。

王城大明神は、天智天皇四年（六六五）大野城築城に際して、現在地、太宰府市通古賀に遷座されたとされるが、今でも四王寺嶽の鎮守神である。太宰府天満宮文化研究所蔵の、『王城神社縁起書』によれば、祭神の神名も書いてあり、蝮退除むとの神という。同研究所の話では、四王寺嶽には王城神社の外に社はなかつたとのことである。

当四王子神社では永暦元年の来現から年を経て、社殿遷座の議が起り、社司が弓を引いて放つた矢が立つ



た現在の地に遷座されたという説がつよい。

宝暦九年（一七五九）、長洲町在住の細川藩士松尾氏が、四王子宮の敷地免租の許を得て、社殿を改築され、九曜の紋を戴いて奉納されたという。（『長洲物語』 清住尊義著）

またこのお宮は、蝮（ひらくち）退除の神としても有名である。鹿本郡鹿央町霜野北谷の日吉山王宮に「ヒラクチ神さん」という石祠があり、土地の人は、長洲の「シオジンさん」の分霊だという。また先年発刊された植木町史には、ヒラクチ神の石祠が各地に点在しているが、「長洲四王子宮の分霊で、筑前四王寺嶽ー長洲ー植木へと波及したものと考えられる」と書いてあるし、北部町史にも蝮神のことが書いてある。玉名

市梅林地区などでは、毎年五月の長洲祭に、近所の分も頼まれた人達は何人も守砂を戴きに来ると聞く。

この蝮退除の信仰は、前記、王城神社の縁起書に

此の御神毒蛇の難を守らせ給えり、蝮蛇を恐る、人信心あるべきことなり、此の村中に蝮棲まさる□村老といへども其形を詳にせじ 他所の人毒蛇の難に逢し時、ふかく此御神を信ずる時ハ、靈験殊に新たかなり。

以下略（挿絵蝮退除の記事参照）

とあるが、現在の王城神社には、その法は伝わっていない。少数の古老が、話として伝えるぐらいである、天満宮文化研究所の話によると、王城神社蝮蛇退除の修法を伝えていたものは、神仏習合の頃、王城神社を所管



四王子神社

していた、宝満山の修験道「井本坊」であったということである。  
また、この四王子神社の氏子は、猪を口にするをかく禁じられていた。今はどうかわからないが、昔は「しし」という言葉も禁句であったと聞く。

境内祭祀神

・八雲社（祇園社） 摂社間口三・六m 奥行三m 切妻流造

祭神 須佐之男命 宇氣持神

祭日 六月十五日 七月二十五・六日

・諏訪社 摂社

祭神 建名方命

祭日 五月十五日、十月十五日

・松尾社 摂社

祭神 大山咋命

祭日 五月十五日 十月十五日

・五社神社 摂社

祭神 伊邪那美命、天照皇大神 経津主命 表津々男命 建磐龍命

祭日 五月十五日 六月十五日

・若一王子社 摂社

祭神 若比留売神 武甕槌神 表津々男命

祭日 五月十五日 十月十五日

• 地神社 撰社

祭神 猿田彦大神

祭日 五月十五日 十月十五日

• 菅原神社 撰社 上今町より遷座

祭神 菅原道真

祭日 八月二十五日

• 菅原神社 石祠 間口五五cm 奥行四三cm 基壇一・三m 寄棟造唐破風軒

石祠裏に左の記刻がある

奉勧請天満大自在天神

干時享保五龍集庚子弥生丑日

肥後国玉名郡増永村尾部住人

願主 猿渡弥市滋栄

祭日 八月二五日

行事

当宮には幾多の行事があるが、その中でも主なものは、破魔弓祭に続くばかり、春秋二回の例大祭・夏

越祭、祇園祭がある。

・破魔弓祭・的ばかい

一月十五日行われる神事、破魔弓祭と的ばかいの起源は、当宮遷座の際に始まったものといわれる。浜の岩屋に御来現の際との説もあるが、前記『馬場文書』旧事記のはじめに、

長須之人の住みはじめしは、扇崎村より、宗海・道了・道甫と申す入道三人、永暦元年八月廿三日移りはじめしとなり

とあるので、三人が住みついて一月にも満たない時、外に多くの人が居たとは考えられない。後年御遷座に際して、宮司が放った弓の矢が立った所を、神地と定めて、鍬之進が土を盛り、注連之進が注連縄を張り、御奉祀申上げ、御神体を安置して運んだ円座を、氏子の人達が、祭神の御神徳、御加護を戴き、除災、延命、招福の御利益を得ようと奪い合ったのが始まりという。

この神事は熱田神宮や福岡県の志賀海神社の歩射祭。また各地で行われる破魔打や破魔弓祭と同じ悪魔を払う破魔打の行事と、円座を奪い合ったという的ばかいとの二つの行事が、神事として行われる。

破魔打（破魔弓祭）は、人皇第三十六代孝徳天皇（六四五―五四）の御代の正月、宮廷で、蚩尤（中国古伝説の人物で濃霧を起して黄帝を苦しめたが指南車という人に敗れ殺された）の眼に擬した的を射て、その年の厄を払ったのが始めともいうが他に説もある。（『日本年中行事辞典』）

的ばかいは、長洲町指定無形文化財となっている。

的ばかいはその前日、氏子の磯町の人達によって作られる。以前は上磯町の吉川家に伝わる伝統の技

術であったが、当主勝喜氏の子供に男子がなく、老齢になられたので、吉川勝喜氏を指導者にして、磯町に保存会が出来た。

的の材料は藁と麻である。先づ藁は藁槌や杵で打ち、藁の草丈を一本とする小縄を、三千本ぐらい細かい用意する。初め一六本の縄で最初の目を作り、これに小縄を差込み組み入れ、渦巻型に捻りながら厚味をとり、固く引緊め、木槌で叩き固めつつ、次第に輪の形を大きくする。形が崩れたり弛まないために、麻の紐で結びを加えてゆく。厚味一〇数cm、輪の直径六〇cmぐらいまで編み重ね、下げ緒をつけて完成する。重さは六kg前後、出来上った的は、上磯町区長宅の神前で一夜を明かす。

一月十五日的ばかいの当日は、大明神洲崎神社での納めの儀式、的の献納祭がある。この神事は松田宮司の創案で、昭和四二年頃から始められたという。式が終ると、宮司を先頭に的は保存会長に奉持され、四王子宮に着き、神前に納められ、神饌が供えられる。

破魔打の神事は、神殿前の板張で行われる。長さ約三米の青竹に紙で作った的的ばかいの的をつけて、南の欄干に立て、北側の欄干を背に宮司が、檜の白木の弓で青篠竹の矢を三本、紙的を射る。射る時、矢を放す度に、エイ、ヤア、オオと三声掛声をかける。これは悪魔退散、災厄消除、家内安全を祈念するもので、的を射ることを討つといい、悪魔を討つのであり、討つのは悪魔としての紙的である。

神事に使用される弓は、檜の若木の真直なもので、皮をむいて麻紐の弦が張ってある。この弓は二張作られるが一張は神事の後、紙的、矢等とともに、的ばかいの人達に投与される。

午後一時、藁的が投与されて始まる的ばかいは、酷寒の中、力水を浴びては、裸男の集団から炎のように

湯気をたちのぼらせ、カメラのフラッシュを浴びながら、見物人が近寄り、逃げまどう中を境内一円暴れ廻り、その後海へ押出して終るのである。

的ばかいの終った的は、拝殿で町内各地に切り分けられる。各区ではこれを細くほぐして、小さく割った青竹に挟んで各戸に御守として配られる。

二組作られた神事の弓矢の内、投与されて後に残った弓矢、紙的、藁的をつけた青竹は、幣殿で小さく割られて、各役員、区長に御守として配られる。

• 的替

始まった年代はわからないが、的ばかいの当日、的替という行事があった。番号のついた木札を買い、境内に集まった人々が、誰彼となく交換しあい、時間になると世話方が、当選番号を発表する。昭和初年頃までは最高の当り籤に、銀製の矢がもらえたという。清源寺天満宮の牛替、名石神社の鯛替と同じ様式の一つの富籤であった。銀矢は長さ一七種、太さ三耗の純銀製で、現在のその中の一つを宮ノ町の福田タマさんが所蔵している。

• 輪潜り神事

当四王子神社の輪潜り神事は 六月三〇日に行なわれる。この神事には町内や近村からも参集して、茅の輪を潜り穢を落して、炎暑の息災を願う。神事は名石神社の項で説明のとおりである。

• 祇園さん祭り

当社の撰社八雲神社の祭りである、祇園会は清和天皇の貞観一一年（八六九）に疫病が大流行した際、こ

れを鎮めるために神泉苑で行われた、祇園御霊会が始まり（『民間信仰辞典』）といわれ、京都八坂神社の祇園祭、博多の祇園山笠、大牟田の大蛇山等、豪華な祭りも多いが、この祇園祭りは全国に分布しているといふ。

当社の祭りは、七月第四日曜日に、町内を御輿の渡御があり、所々に止まっては、無病息災を願う人々が御輿を潜って、身を清めていたが、二〇年ぐらい前から一時中断していたのを、四・五年前より長洲夏祭に参加復活し、四王子神社から港までの御輿の渡御があり、人々は御輿を潜って身を清め息災延命を祈るようになった。

#### ・例大祭（長洲祭）

五月一五・六日、一〇月十五・六日の当社の祭りは、長洲祭りと呼ばれ親しまれてきたが、現在では豊富な物資と、輸送力の増大で、昔の長洲祭りのおもかげはそのかけらもない。

むかしの長洲祭りの商人は、博多、久留米、熊本、八代地方から二・三日前から来て、境内はもとより各町に各種の露店を出した、寝具、真座こざ等から、菓子・玩具、特に農具は昔からの名物で、犁すきや鋤、鎌などから梯子、陸尺ろくじち、藁槌に至るまで、農家に必要なもので無いものはなかった。これを求める人達も遠く植木や山鹿、南関、県外からも来て、熊本県第一の商市であったといわれる。

#### 境内奉納石造物

神殿前の狛犬、一對、土焼、三〇cm余で、社前等にある石造狛犬の、原形ではないかといわれている。前脚を立て腰を落した蹲座の形をとる。これに似たものが、佐賀地方で見かけるといふから、佐賀の方から渡



的ばかいの、的、四王子宮へ向かう

ってきたのかもしれない。

・鳥居 明神形 花こう岩

奉再建

氏子中

享保十七龍集壬子九月中浣

・石灯笼 一對 全高三・七五m 火袋高サ七五cm 中台幅一・二m 竿石の代りに石垣を積む 凝灰岩

奉獻 氏子中 とだけで外の刻字は風化のため読み取れない

・石灯笼 一對 花こう岩 丸形 高二・二m奉納 昭和十二年五月十五日 長洲町奉納者氏名

・狛犬 一對 花こう岩

体長八七cm 体高九〇cm

奉納 昭和十年三月 熊本市 奉納者氏名

石工住所氏名

・狛犬 一對 凝灰岩 体長九〇cm 体高八八cm

奉納 昭和十三年九月吉日 奉納者氏名

・狛犬 一基 吽形 天草砂岩 体長体高共七〇cm 前脚右方失

社前の石垣塀上にあるが、剝落がひどい

・石柱 天草砂岩 全高二・二六m 剝落がひどい

天保十二年丑一以下剝落



四王子宮発祥之地

と刻んである。

浦野□郎□衛門

・記念碑 自然石 全高一・九m 台石花こう岩 円筒形 高八六cm 直

径一m

当社七百五十年記念

大正三年四月（寄附者、金額略）

・記念碑 自然石 碑石高一・八m 台石円筒形コンクリート製 高二・

三m

当社八百年祭記念碑

他に 玉垣内幣殿下に、石灯籠の竿石があり

辛巳年 次右衛門常成

洲崎神社

二座一宮 町内大明神

浮島神社

祭神

洲崎神社 上筒男命 中筒男命

浮島神社 中筒男命



洲崎・浮島神社

例祭日 一月十五日 五月十六日 八月十六日 十月九日 十月十六日

創立年月 不詳

社殿 本殿一〇米方m 幣殿一三平方m 拝殿二二平方m 幣殿より奥は石垣上本殿に石祠に二社を

祀る（石祠は計測不能）

由緒

両神社は四王子神社の境外摂社である。一説にこの神社は、御遷座前の四王子神社の宮地であったともいわれる。御遷座後、海の守神である住吉の、上筒男命、中筒男命を、両神社の祭神としてお祭りしたものと

い

わ  
れる。  
漁業を<sup>舟</sup>生業とする人の多かったこの町の人達は、新造の漁船を卸すときは、この社の前の浜辺で、船の舷を揺って参詣したということである。

### 行事

当社の祭は、一年に五回もある。祭の神饌は精進料理と聞く。その品々

は、

牛蒡の叩き

茄子のひこずり

栗（粟）？飯

煮染<sup>にしめ</sup>

甘酒 甘酒は三三本の小竹筒に入れ（かけぐりと云う）て供える。

境内奉納石造物

・鳥居 洲崎神社 神明形 擬灰岩

奉献 昭和三年四月十五日再建

氏子中

・記念碑 自然石 碑高一・三 m 巾七〇 m

昭和十六年九月吉日建之

碑文は風化のために読めないところが多い。

永方神社（一先宮）

祭神

猿田彦神

天鈿女命あめのうすめ

健磐龍命

事代主命ことしろぬし

例祭日

十月二日

創建

慶安二年四月二十四日

社殿

本殿 入母屋流造一三・五平方 m

幣殿 一一平方 m

拝殿 三八・五平方 m

神像

猿田彦神

木像

立像

像高五六 cm

（冠まで）

健磐龍命

木像

立像

像高五六 cm

（冠まで）



永方神社（一先宮）

天鈿女命 木像 立像 像高四五cm（女神像）  
事代主命 木像 立像 像高四五cm（女神像に造る）

猿田彦神像の後下には

慶安二年四月二十四日

施主 永方村 勝右衛門

敬白

健磐龍命像の後下には

慶安二年四月二十四日 施主 だけが判読できる

天鈿女命 事代主命像の後下には

慶安二年四月二十四日

施主 □□□ ———方

敬白

由緒

慶安二年（一六四九）四月二十四日に、創建の社と伝えられるから、創建と同時に神像も奉納されたものである。現在は永方、葛輪、赤田の三区により奉祀されている。永方神社というよりも、一先宮、一先さんとして親しまれる神社で、寛文年間（一六六一―七二）に書かれた『国郡一統志』

(北島雪山著)には市崎大明神『肥後国誌』には一才大明神と書いてある。一先を、市崎、一才と間違えたものである。戦前は村社で、神饌幣帛料供進指定社であった。

祭神 猿田彦神 は神話、天孫降臨の際、天八衢あやむちで、天孫の御出を待つて、筑紫の日向の高千穂の峰に先導され、自分は天鈿女命あめのつゆのみことに送られて、伊勢の五十鈴川の川上におちつかれ、後代、道案内の神と崇敬せられる神である。

天鈿女命は、天照大神が、天の岩屋に隠れ給うた時、戸外で歌舞をなして、御出現のきっかけをつくられた神であり、後で猿田彦神と夫婦になられた神である。

健甕龍命たけいわたりのみことは、元官幣大社、阿蘇神社の主神であり、神武天皇の御子、神八井耳命の御子即ち神武天皇の孫神である。

事代主神は、出雲神話に現れる国津神で、大国主命の子神という、父神とともに出雲の国の経営に加わり、国譲りの際には、国土の献上を、大国主命に進言された神である。

以上の神々を祀るこの神社には、社記や伝承もない。

野原八幡宮の祭の記録である祭事簿に『建長六年甲寅、官方大行事、三郎火寸、小行事、永方弥三郎』の一文があるので、鎌倉初期頃には、成立していた「永方村」と思われる。一先宮は慶安二年の創建であるから、豪族も居た古い村で、四五〇年以上も鎮守の社がなかったのか、と疑問がわいてくる。

神社の周囲一帯が、密柑畑になる以前、社の南方二一三〇mの所に、「阿蘇さん」と呼ばれる森があり、森の木を切れば祟りたたりがあるといわれていた。また赤田には、いづもりさんの森が少し残っている。阿蘇さん

即健磐龍命であり、いづもりさんは、出雲さんの訛であろうか、事代主命を祀ったものである。この二柱の神が、当時の氏神ではなかったかと思われる。

慶安二年の一先宮創建に際して、猿田彦神、天鈿女命を主祭神とし、阿蘇さんの健磐龍命、いづもりさんの事代主命を相殿としたものと思われる。

また野原八幡宮の方から一先宮まで、等間隔に、小高く盛り上った、旗（幡）塚という所が、十ヶ所ぐらい有ったが、何であったか、何のために有ったのかわからないし、今は場所も分らない。（徳永喜作氏談）（明治二十年生）との話もあるので、むかしは野原八幡宮と、何等かの関係があつたのかも知れない。

明治の、日清・日露の戦役の頃からか、武運長久祈願の神社として崇敬され、第二次大戦の頃は、遠く福岡、佐賀、長崎などからも武運長久祈願の日章旗が奉納されていて、奉納の日章旗はそれ等もふくめて、幣殿にぎっしり詰り、やっと参拝の通路があるだけ、それでも入りきれずに、拝殿の半分以上に納めてあり、古い物から取替えられていたという。

話によると、戦場で隊にはぐれたり、斥候せつこうや連絡などに出て帰路が分らなくなり、困っている兵隊に、白髪の人が見え、道や隊の場所を教えて、名を尋ねると、「一先」と答えて消えた。という話が伝わり、武運長久祈願の参拝者が多かったということである。

### 行事

祈年祭

二月十八日

例大祭

十月二日

## 新穀感謝祭 十一月二十四日

祈年祭 新穀感謝祭は、都合により一日おくれるが、三区長、氏子総代等十人程で行う。例大祭は、永方葛輪、赤田の三区を六組に分け、その年の祭組（座組）が全員で前日から準備し、三区長、氏子総代、祭組の参列で執り行われる。式後簡単な直会なまらいで終る。

むかしは秋の彼岸籠こもりの時、祭組の中から籤で当屋を決め、当屋の家で煮焚その他をするが、女には一切手を触れさせなかつた。

むかしの一先宮は、老松が繁り社の右前方の谷（グランドの北端）に土俵が築かれ、松の走根が階段となつて天然の棧敷さじきとなり、三方から見物できる相撲場で、祭の日には、力自慢の宮相撲取が各所から集まり、大変な賑であつたといわれる。戦後は一時青年相撲で賑つた。

この神社には、伝統の花火と楽がくがあつたが、大正初年頃、楽が奏されたのが最後で、今はそれを知る人も少ない。

以前当社の例大祭は 十一月二日であつた、その季節は稲の収納しひの時期で 祭のため農家は仕事がおくれ、参拝者も少ないと、例大祭変更届が何回も続けて、県知事宛に出されている。それはこの神社が村社で、神饌幣帛料供進指定社であつたため、それに対し、大正八年九月三十日付の、玉名郡役所の通達が残つてゐる。

## 永方神社例祭変更の件

貴村永方神社ヨリ標記ノ件変更申請来り

候處例祭日変更ハ最深キ縁故ナキ限り許可不相成趣旨ニ有之単に農繁ニ依ル変更ノ如キハ到底許可不相成儀ト存候条依命書類及返戻候條可然御取計相成度候也

玉名郡役所印

六栄村長殿

因<sup>よ</sup>に大正二年の幣帛料は金七円であつた。例祭日が十月二日になつたのは、昭和十年以降との話である。

境内祭祀神

・社日神 自然石 高一・一m 幅四〇cm

・石祠 入母屋造 凝灰岩

社内奉納物

神前の狛犬は、像高一五・五cm 像長一五cmと小形で、首毛の紋様も面白く、創建当時のものかも知れない。

境内奉納石造物

・鳥居 明神形 天草砂岩

大正五年丙辰一月吉日 永方区氏子中

・鳥居 明神形 凝灰岩

大正四年三月十八日 葛輪区青年氏子中

• 石灯籠 一对 凝灰岩 全高二・二m 擬宝珠失

奉寄進 文化四年七月吉日 葛輪□□ 浦田定助

• 石灯籠 一对 凝灰岩 全高二・一m 擬宝珠失

奉寄進 文政五年八月吉日

幾右エ門 松右エ門 庄右エ門 利三右エ門

• 狛犬 一对 凝灰岩 体高八八cm 体長八〇cm

奉納 明治四十四年十月上旬建設

永方青年団 三十人の氏名を刻む

• 狛犬 一对 凝灰岩 体高・長共七〇cm

奉納 昭和九年四月吉日

奉納者氏名

• 御手洗 天草砂岩

□明元年辛丑□月吉日 忠蔵

手洗の縁が砥石代用かちに使用され変形 □明元年の□は 研減されて見えないが 天明の天の字であろう

天明ならば 一七八一年である

• 記念碑 凝灰岩 自然石 全高二・八m

御即位記念 吉村一知謹書

葛輪青年会 会長以下四五名の氏名を刻む

・鳥居建設記念碑 花こう岩 自然石 全高三・五m

大正五年一月 永方本村氏子中

・石碑 凝灰岩 中央高七六cm 左右七〇cm

前幅三三cm 横幅二七cm 台座高一五cm

前面 原田先生□□□

右面

先生通称又八父曰理兵衛君住合志郡田島村文政十一年築地吉平為其子及郷里童蒙迎而師事之前後門人凡百余人天保六年藩命為時習館句読師同七年丙申十二月四日病歿年五十□葬熊本流長院後吉平子恒右衛門等思慕不惜為建此実慶應元年乙丑七月也

左面 法謚強義勇居士

と彫つてある。合志郡田島村とは、現在の菊池郡泗水町田島のことで後年藩校時習館の句読師に取立てられたとあるが、当地には何の話も残っていない。原田先生の塾は、永方信定等の東南、通称「南」という所であったというが、明治五年の学制発布で、同塾が永方小学校になったといわれる。六栄小学校の前身である。

梅田菅原神社

梅田

祭神 菅原道真

例祭日 九月二十五日

創建 約八百年前

社殿

神殿はなく、神籬ひもと(神の座)を石垣、玉垣で囲む。外石垣(多少高低)高さ一・三m、周囲四八m、外石垣盛土の中央南寄りに、高九三cm 両横、後共に五mの内石垣及び石玉垣があり、内石垣中央に、両横、後に二・八mの石玉垣がある。外石垣内に藤の大株六株と 楠、榎があり、内石垣

内に椿、玉垣内にタブの若木がある。

拜殿 入母屋造 二二四平方m

由緒

この社の勧請は、約八百年以前と『熊本県神社誌』に書かれている。

元清里村長 島田一馬氏宅に保存されている 明和四年(一七六七)の

文書には

覚

一天神

石躰二而堂御座無候  
但社地御藪貳拾五歩



梅田菅原神社

一葉師堂

壹間 壹葺  
貳間半

但社地御藪壹畝六歩

一観音堂

壹間 壹葺  
九尺

但社地御藪壹拾貳歩

一十一面観音堂

九尺 壹葺  
貳間

但社地空地二而御座候

右者梅田村從前ニ有來候社堂 宝曆六年御改之節書上置申候 右社堂床之儀宝曆八年地引合被仰付候節吟

味仕候処 明白ニ相成地方じかた之銘目ニ違申候 則地引合帳面前右之通ニ御座候 以上

明和四年十月

梅田村庄屋

紋右衛門

荒尾寿右衛門殿

この文書は、島田家の先祖で、梅田の庄屋であった、紋右衛門という人が、天神、薬師、観音など、諸堂の敷地が、宝曆六年（一七五六）御改の節と、同八年地引合じひきあひの時の、地方銘目の違を通達したものである。更に島田氏の手記で「梅田村の氏子のすべてが、御神躰は立木と思ひこんでいるが、之によって石躰であることが判明する」と書いてあるし、境内の観音堂にもこの事が書いてある。

明治以降に書かれたと思われる縁起書に、

当社ハ太宰府天満宮ヲ勸請トス 里老言伝 神託ニヨリ立木ヲ以ッテ神体トシ奉祀ス 惣テノ社木ニ玉藤

トテ 古来有名ノ藤蔓アリ 花時ノ風景最モ美ナリ―以下略―

以上のことを総合すれば、初めは立木を御身体と奉祀したものが、何等かの理由により石躰となり、それも失われて、現在の様式になったものであろう。縁起書の玉藤は、長洲町指定文化財の天然記念物として保存の手が加えられている。

### 行事

当社の宮守、三島孝之氏が保存される、祭組取極書には

#### 梅田菅原神社祭組の事

此の祭組と言うは、梅田居住の氏子因縁を以つて、味噌舂組、俵組、豊組、勢組、の四組に組分をなし、各組は籤にて、次の座前を定める。此の座前に當つた氏子は、梅田村総持という。座前の氏子は毎年秋期例大祭に於て、組内氏子全部集合して、神社の清掃、社殿裝飾（注連飾等）、御神酒、神饌の供え等して、式後参拜者に分与する、終つた後、次座前の抽籤を行う。祭の費用は祭田耕作の代償と見なし、座前負担の慣とする。

座前抽籤は、祭田耕作の権利と共に、豫め拋棄することが出来る。―以下略―

例大祭は九月二十五日であるが、昔は正月に貝殻を採集して、玉垣内に敷きつめ、五日に「どんどや」を行つていたが、今はその行事の二ツともない。

#### 境内石造奉納物

・鳥居 明神形、凝灰岩

奉寄進 昭和九年三月吉祥日

寄進者氏名 石工住所氏名

・石灯籠 一对 凝灰岩 全高一・八m

火袋失 安政□□□□□□ 氏子中

・石灯籠 一对 凝灰岩 全高二・六二m

奉寄進 昭和九年三月吉日

寄進者 父子二氏名

・狛犬 一对 凝灰岩 体高六八cm 体長八〇cm

奉獻 昭和九年三月吉日

改築委員 八名の氏名 石工住所氏名

・石造神牛 凝灰岩 体高六八cm 体長一二七cm

明治四十年五月建設 日露戦役従軍者九名

折地菅原神社 折地

祭神 菅原道真

例祭日 九月二十五日

創建 元久元年

社殿 本殿 入母屋流造七・五平方m 幣殿四・五平方m 拝殿 一二平方m

棟札

前朱雀 左青龍 享保二十年乙卯年

豊葦原水穂国肥之後州玉名郡折地村天満宮一座

後玄武 右白虎 十一月朔日

夫当社天満宮者元久元年依太宰府勸請此折地村清神地平端街舎宮柱太敷

立毎年祭礼九月二十五日無怠奉祭然処龍造寺之乱世天正九年乃比社頭悉

為炎上因之浸神体雨露氏子難雖小社造立猶今又一字建立得志意趣者

当国大守細川越中守宗孝公御武運長久国家安全風雨順和五穀能成

当村老若男女氏子繁昌耕作田滿願主家内安泰心中祈念一一如意成就

常盤堅盤幸賜奉祭神社也

元久元年甲子依享保二十乙卯年迄五百三十二年二成ル

庄屋 宮崎彦左衛門

社守 古沢甚之丞

大工 清源寺村 源七 向野村 藤七 野原村 ○助

棟札裏面



折地菅原神社

案者

古沢駿河守安清 上秋丸、古沢氏五人、下秋丸、古沢氏二人、四郎丸、宮崎氏九人。

天真名井清潔元水降 西秋丸三人、天神免三人、松尾九人、野畑五人。

筆者

一条清記信晴 小路、中島氏五人。東、宮崎氏五人、松浦、宮崎氏六人。

頼合氏子五十四人

右の氏子案者筆者入れて五十四人は、皆それぞれ名前が書いてあるが略した。

由緒

棟札により、元久元年（一二〇四）に大宰府天満宮から分霊、勧請されたことがわかる。

棟札上段に、豊葦原……天満宮一座、と書いた両側に、前朱雀、左青龍、後元武、右白虎、と書いてあるのは、中国の四神思想に基づいたもので、天満宮の四方を守る神であり、大和の高松塚古墳等にも見られた都城等にも用いられ、平城京、平安京にも、朱雀門その外これに因む地名が残る。本来は、南朱雀、東青龍、北玄武、西白虎であるが、当社は西向であるので、前後左右としたものであろう。

元久元年という年は、鎌倉二代将軍、源頼家が死んだ年であり、その

十年前の建久四年（一一九三）に、紀国隆（大野国隆）が、大野別符（現岱明町と玉名市の一部、大野庄）の地頭職に補任されており、同じ建久年間に、齋院次官中原親能が、豊後、肥後、筑後の守護職となり、この頃赤崎の古城が築かれたともいわれる。

この社の創建については、『石清水八幡宮文書』に、文永年間から弘安二年（一二六四—七九）にかけて、四郎丸資継という豪族の記録があり、その祖父のこともあるので（中世編、四郎丸資継の項参照）年代からみて資継の祖父あたりの勧請ではないかと考えられる。

その後、天正九年（一五八一）肥前佐賀の龍造寺隆信が侵攻の際、兵火のため炎上、その後村人達は小祠を建て奉祀していたが、享保二〇年（一七三五）現在の社殿が出来ているのは、棟札のとおりである。

### 行事

むかしは九月二五日に 村中が組によって座祭が行われていたが、今は各自で参拝するだけである。一月十五日に豊作祈願の行事があるともきく。

### 境内奉納石造物

・鳥居 明神形 凝灰岩

御即位記念 大正四年一月

願主九人の氏名、世話人一四人の氏名が彫ってある。

・狛犬 一對 凝灰岩 体高 体長共七〇cm

奉納 昭和十三年四月十一日建之

発起人二人 世話人三人の氏名を彫る

・御手洗 凝灰岩

奉納 明治二十三年寅旧八月吉日

奉納者七人の氏名を彫る

・御手洗 凝灰岩

奉納 昭和四年七月吉日

奉納者 夫婦子三人の名を刻入

・板碑 花こう岩 自然石（信仰石造物参照）

### 腹赤菅原神社

祭神 菅原道真

例祭日 九月二十五日

創建 天正二年十月

社殿 本殿 入母屋流造 九・六平方m 幣殿 七・五平方m 拝殿 三二・五平方m

由緒

天正二年（一五七四）創建（『熊本県神社誌』）というだけで、その他のことは分からない。この社は、深田浦の名石宮の影響で、目立たない存在であったのであろうか。『国郡一統志』にも『肥後国誌』にも出てい

ない。

里老の話では、小字下北口の、坂崎氏宅裏の大木を、天神さんと祀っていたが、名石宮の沖洲遷座に伴い、氏神として祀られたともいわれている。本殿は明治以前の建築、拝殿は、昭和七年に改築されている。

### 行事

#### ・腹赤神楽

長洲町指定無形文化財である。

この神楽は明治二十年（一八八七）玉名市富尾から伝えられたものといわれ、正月、五月、九月の二十五日に奉納されるが、初剣に始まり、二剣、幣の二剣、小神楽、四剣 弓ゆま 歌神楽、剣弓、櫛、と続き、そして有名な鬼神の舞となる。

すべての灯火は消されて、真暗闇の中に、唯一つ蠟燭ろうそくの光だけで舞われる。魁偉な鬼神（大国主命の荒魂）の面と、真紅の神衣、手に持つ神矛ほこの光が、蠟燭の光に映えて神々しい。舞が進み、やがて神主（舞の中で）と問答になり、神矛を幣と取替えて、大国主命の荒魂は、和霊にぎたまとなり、国家安全、風雨順和、五穀豊穰、氏子安全を誓って鬼神の舞は終る。この後、地堅の舞で神楽は終る。

#### ・腹赤がくの楽と花火

当社に奉納の楽も、長洲町の無形文化財に指定されている。むかしは、永方一先宮、高浜二宮八幡宮、遠くは荒尾市平山、玉名市の築地などで奏上されていたが今はない。ここでも花火はなくなっているが、楽だけは残っている。今では県下でも少ないものの一つであろう。むかし、祭の夜は、楽と花火が一体となって



腹赤菅原神社

樂が鳥居をくぐると、メ太鼓十人は參道の左右に五人づつ向いあう。太鼓と太鼓の間隔は三m余、左右とも、五人は同じ柄模様の揃の浴衣で、右が縞柄であれば、左は花模様と、左右違う模様で角帯締めて、頭は長鉢巻を横で結び、紅の袴はかまをあやにかけて余りを長く垂らし、手甲、白足袋、草履ぞうりばき、左右の腰から前に伸ばした捧二本、その先にメ太鼓を付け、木槿もぎぎの小枝を二―三本束ねたものを両手に持ち、笛数人、三味線数人の、曲の調子に合わせ、掛声あげて太鼓を打つ、そして横歩きしながら少しづつ進む。

された。それは毎年ではなく、豊作が続くとか、祝事がある年に限られたようである。

花火、樂の奉納が決まると、若者達は、樂の練習、花火の火薬、色火剤の調合の手伝いと、忙しい日が続く、晝間ひるまは田畑や塩田で働いて、夜の作業である。

祭の日、花火方は、境内の花火小屋から、単火ちうひの網を張ったり、仕掛花火の準備をする

この小屋は花火方以外、一切出入禁止で、他村の者が中を覗きでもしたら、袋叩きにされても文句も云えない不文律があった。

夕方暗くなりかけると、合図の打上げ花火が勢よく響く、樂方は宿を出て、樂を奏し始める。

五穀豊穰の御神灯を先頭に、メ太鼓十丁十人、後に、笛、三味線と続いて、道行の曲を奏しながら神社に向う。

鳥居をくぐり体制が整うと、奏楽の曲が変わる。曲が変わるのを合図に、単火が走り仕掛花火に点火される。楽が進んで石段まで来るとまた曲が変わり、違う仕掛花火に点火される。拝殿前、社殿一周、と曲が変わるたびに、違う花火が次々に打上げられる。

拝殿では、神楽が奉納されている。五穀豊穣、氏子安全、神への感謝と祈念、村人たちの精一杯の気持の表れであった。

楽の曲には、十全、十全崩し、親王、親王崩し、それに道行などがある。

花火は昭和七年、拝殿改築の際、催されたのが最後である。

・うそ替

昔、祭の日にうそ替が行われた。番号のついた札を買い、後で当選番号が発表されて、賞品が渡される。大宰府天満宮と同じようなものである。

境内奉納石造物

・鳥居 明神形 凝灰岩 記年、記名はない

・石灯籠 一对 凝灰岩 高サ一・五二m

奉寄進 文政九年丙戌九月

持木淳民 元徳 両助 同尉吉

・石灯籠 一对 凝灰岩 高サ二・六m

奉寄進 征獨記念

大正四年戦役出征軍人

寄進者 戦死者一人を含む十八人の氏名と世話人を刻入

この石灯笼は、擬宝珠の代りに砲弾形の石になっている。戦争の記念だからであろう。

・御手洗

奉納 明治十五年壬午千秋日

・狛犬 一對 凝灰岩 体高八四 cm 体長九七 cm

奉獻 明治三十七八年戦役記念

寄進者十七人の氏名を刻む

・石柱 幟立用 一對 凝灰岩 高サ一・五 m 前後幅二八 cm 横幅二四 cm

奉寄進 明治二巳四月吉日

寄進者 馬場床、茂三良小屋、甚右エ門小屋、徳左エ門小屋、以上を石柱の上部に並べて彫り、下に小屋  
子と思われる三十人の名を彫る（まだ姓がなく名だけである）

・記念碑 凝灰岩 自然石 碑高一・五二 m 全高三・七四 m

御神楽奏始五十季記念

・境内の宝篋印塔は信仰石造物参照

清源寺菅原神社

祭神 菅原道真

例祭日 九月二十五日

創建 不明

社殿 本殿 入母屋流造一六平方m 幣殿 一二平方m 拝殿 二五・二平方m  
由緒

清源寺の天神さん、と村人やその他からの尊崇をあつめている神社である。勧請の年については、昔からあったとのことだけで、古いことはわかっておらず、『肥後国誌』や『玉名郡誌』にも出ていない。腹赤天満宮と同じく、名石官の存在が大きく、名石宮を崇敬していたのが、上沖洲、下沖洲の人口増加に伴い、昔からあった天満宮を、改めて清源寺村の鎮守として祀ったと考えられる。

里老の話では、本殿は藩政時代の建築であるが、昭和九年の名石宮の火災の際、名石宮から火の玉が飛んできて、本殿横に落ちたが、大きな灰の塊かたまりであったので、名石宮が当社に避難されたと、噂されたというのである。

昭和二年四月に拝殿が改築されている。

行事

清源寺神楽

長洲町の無形文化財に指定されている。毎月二十五日には、拝殿で奉納される。明治十八年（一八八五）玉名市の玉名大神宮から、名石宮に伝わり、翌年清源寺に伝えられたものという。百年の歴史がある。



奉納者 陸海軍人各一人氏名

・石灯籠 一对 全高三m 竿石は天草砂岩で円柱、別石凝灰岩で梅鉢の紋、灯袋台以上凝灰岩で六角、宝珠付

時維 大正二稔 十月吉祥日

奉納者 宿主、宿子二十一人の氏名 石工の住所氏名を刻む。

・石灯籠 一对 凝灰岩 高サ二・九m

奉獻 大正十一年九月二十日

奉納者 発起人十七人 替同者十七人の氏名 石工 住所氏名を刻入

・石灯籠 一对 凝灰岩 高サ三・五五m

笠上に狛犬

奉獻 昭和二年四月中浣

天満宮社殿改築記念トシテ建灯ス

長崎市船蔵町 氏名

当清源寺 氏名

・狛犬 一对 凝灰岩 体高八〇cm 体長七八cm 吽形子を抱く

奉寄進 昭和九年一月建之

寄進者 発起人十一人 賛同者十人の氏名を刻入

・狛犬 一對 凝灰岩 体長体高共七十二cm 吽形子を抱く

奉獻 明治二十三歳五月吉辰

伊勢御蔭參同行中

奉納者 当村男女三十人の氏名 石工氏名を刻入する

中世、元亀四年(一五七三) 鮪はな中光 同行三人 と般若寺に落書した(中世編般若寺の落書参照) 先人から続いた 伊勢信仰の名残が 御蔭参りになって明治中期頃まであったことが伺い知られる。

・石造神牛(寝牛) 凝灰岩

奉獻 台座上部欠失 癸丑 一月上流(大正二年)

海外渡航記念 当村氏子 十二人の氏名

・記念碑 凝灰岩 全高三・七m

菅公一千年祀(正面)

明治三十有五年三月二十四日当社祭典

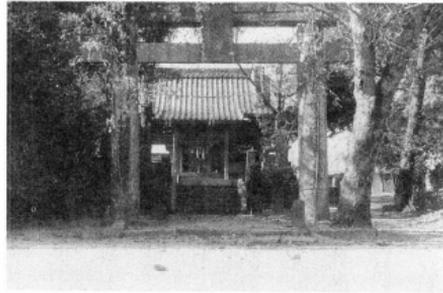
古式依而為紀念寄附床地壹畝廿歩(右面)

壯年 三十人の氏名(左面)

舎員 三十二人の氏名を刻る(背面)

・記念碑 花こう岩 自然石 碑高二・一m 全高三・六m

拝殿改築と境内拡張の記念に、昭和十一年四月十八日、建てられたものである。



宮崎御祖神社

宮崎御祖神社 (中央神社)

祭神 天御中主神 神功皇后

例祭日 十月一日

創建 不詳

社殿 本殿 入母屋流造四・五平方 m

幣殿 八平方 m

拝殿 平屋建二四平方 m

神像

男神像 天御中主命 座像 像高二八 cm

尊像下に墨書

□月吉日□

明暦元年乙未

願□長□

大永三載癸未春

□主大神罹兵火之厄焚却

尊容爰仍清源納□



下に

国守 細川越中守宜紀公

当領主 長岡内膳正

郡司 橋谷市藏 畠田久左衛門

肥御国玉名郡野原庄宮崎村 大願主

邑長 宮崎□□重治

同 宮崎利兵衛忠盛

宮司 総兵衛信行

宮崎村組長 仁作作介

大工 小野村加左衛門

□光 久四郎

宮崎村喜兵衛

小工 二人

由緒

祭神 「天御中主神」あめのみなかぬしのかみ

は我が国最古の歴史書といわれる『古事記』に「天地の初発の時、高天原に成りませる神のみ名は、天御中主神、次に高御産巢日神たかみけのひのかみ、次に神産巢日神かみむすひのかみ、この三柱の神はみな独神なりまして、御身をかくしたまいき」とある。神話の天地開闢の際、最初に現れ給うた、宇宙根元神である。

相殿 神功皇后は、仲哀天皇の皇后で、応神天皇の母君であり、武内宿祢を従えての三韓への渡御は有名な話である。八幡三神の中の一神である。

右の二神を祀るこの社は、もと当地にあつたといわれる。清源寺（『肥後国誌』）の鎮守社として建てられたものと思われる。

男神像の墨書、大永三載癸未春、□主大神罹兵火之厄焚却、尊容爰仍清源納□の文字「清源」は、大野庄（現岱明町、玉名市の一部）の最初の地頭職、建久四年（一一九三）四月に補任された。大野国隆の入道しての法名 清源のそれであろう。

小代氏の野原庄地頭職補任は、宝治元年（一二四七）、入国はそれよりおくれるので、六十年ちかく大野の方が早く、その間に大野が、この辺まで勢力を拡げていたのであろうか。

社の西隣、光正寺境内にある五輪塔の地輪（地輪のみ）二個には、見事な葉研彫の梵字とともに、その一個の梵字<sup>ア</sup>の右上に、□和四年乙卯四月十三日、左下に沙弥全□と彫つてあるが、□和四年乙卯とは正和四年（一二二五）、鎌倉時代末期で、後<sup>あと</sup>十五年で南北朝になる年である。

本地垂迹、神仏一体のその時代、社と寺が同所に建立されるのは当り前で、寺のためには 神社は地主権<sup>ズ</sup>現であり 鎮守神であり、神社のためには寺は神宮寺であり別当寺である。

また大永三載癸未春 □主大神罹兵火之厄焚却 とあるのは、大永三年（一五二三）春 肥後菊池家の最後の当主 菊池武包が 豊後の大友氏に追われて 小代氏を頼り、小代氏は 武包<sup>たけかね</sup>を 小代山の筒ヶ岳城に匿<sup>かく</sup>まった。大友は阿蘇惟豊に討手を命じ、惟豊の侍大将甲斐宗運等が小代氏を攻撃した。大永三年三月のこ

ことである。その戦でこの社も罹災したものであろう。清源寺は鎌倉末期か南北朝初期に清源寺村大女の地に移転後、正平二年（二三四七）菊池武尚が、高瀬に移転したものとされる。

以上の事から考えて、当社は鎌倉中期頃までの創建で、大永三年に罹災、その後棟札通り

天正十五年（一五八七）下総守藤原親泰、即ち小代親泰の援助を受けて再建されたが、年月とともに老朽したので、享保五年（二七二〇）九月改築されたものである

男神像は、天正十五年の再建の際、新造されたものと思われ、墨書の痕跡が外にも残っているし、一部の字が読めないのは、明暦元年（一六五五）の再彩色のためであろう。明暦元年乙未と大永三載癸未春以下とは筆跡が異なる。



男神像下の墨書

女神像は、造像の時代が少し下がるのではないかとと思われる。

#### 行事

例祭日 十月一日 座祭

彼岸籠り 春秋の彼岸

総籠り 夏田植後

また昔から、盆と八朔には、幣殿、拝殿に提灯を掛け連ねて灯す習慣があったが、ある年の盆に、当番の若者が、懶けたか、遊びに夢中で忘れたか、提灯を灯さなかった。ところがその直後、拝殿横の大楠に、落雷があったという話がある。大楠は大人四人で抱き回す程の大木であつ

たが、戦時中に伐られた、伐った人は、何か不幸があったと聞く。

境内奉納石造物

・鳥居 明神形 凝灰岩

奉納 明治二十四年四月 当村氏子中

・石灯笼 一対 凝灰岩 全高二m

奉寄進 大正八年一月吉日 寄進者名

・狛犬 一対 凝灰岩 体高七三cm 体長七五cm

征露記念 明治三十七八年戦役出征軍人奉納者十一人(内一人戦死者)の氏名 石工氏名

・石柱 一本 上部折損 凝灰岩 高サ一m余

寄進 子六月吉祥日宮崎村出目村氏子中

・石柱 一対 砂岩

奉寄進 文政十年丁亥七月 東側

中央大神宮 文政十年丁亥七月 西側

向野神社(七社宮)

祭神 伊邪那岐命 天照大神 健磐龍命 中筒男命 應神天皇 武内宿祢 菅原道真

例祭日 春秋彼岸入の日 十二月二十九日

創建 天正五年

社殿 本殿 入母屋流造一三二平方米、幣殿 六平方m 拝殿 二二平方m

神像

神像七体 木像彩色 前列四体座像 男神像のみ 後列三体 中央女神立像 右女神座像 左老男神座像  
後列中央女神像と左老男神の座板に 左の墨書がある

延宝七年十月吉日

施主 宮崎藤原重吉敬白

未年 向野村住作之者也

右七体の神像のそれぞれの御神名はわからないが、祭神七柱の内

伊邪那岐命は 神代七代の神の中で、伊邪那美命と夫婦神、萬物創造の神で、天照大神の親神である。

天照大神は、天皇家の先祖神で、伊勢の内宮に祀る神である。この大神は伊邪那岐が、筑紫の日向の橘の小門の阿波岐原に禊祓い給いて、左の御目を洗い給うた時に生りませる神である。

建磐龍命は 阿蘇神社（阿蘇郡一ノ宮町元官幣大社）の祭神で、神武天皇の孫神である。

中筒男命は、大阪府の住吉大社の祭神三柱（表筒男命、中筒男命 底筒男命）の中の一柱で、海上安全の神である。（二宮八幡宮参照）

應神天皇は 八幡宮の主祭神である。（二宮八幡宮参照）

武内宿祢 神功皇后（息長帯姫命）に従い三韓に行き 帰っては応神天皇の皇政を援けた。また景行、成



向野神社

務、仲哀 応神 仁徳の五朝、二四四年間朝廷に仕えたという、伝説上の人物でもある。

菅原道真 大宰府天満宮その他、全国天満宮の祭神で 学問の神と敬まれる。

由緒

由緒（半紙に墨書したもの）

天正五年十月勸請

明治六年村社二定ム

社殿間数 三間 二間

社殿 一間五合 二間

境内坪数 二九八坪

例祭日 十二月二十九日

管轄神社序迺九里

年紀 三八三年 昭和三十二年調

以上の由緒書によると  
のほずである。

向野の村に歌いつがれた子守唄に、「向野お寺は誰が建てた、八幡長者の娘が建てた（以下略）」という歌

詞があると聞く、八幡長者と呼ばれた豪族の、持仏堂としての光鎮寺ならば、鎮守神として七社宮が建てられたものと考えられる。神社前を「寺」・「寺屋敷」と呼ぶから、宮崎の中央神社同様、神仏混淆の、鎮守神と神宮寺の関係にあったのと思われる。

神社前の阿弥陀堂内の板碑は、天文十五年（一五四六）の刻記のある逆修碑であるが、開基の行尊大徳の供養もしてあるから、光鎮寺、七社宮とも、創建年代は天正五年よりも、六・七〇年溯り、永正頃（一五〇四—二〇）とも考えられる。

神像の内、女神像外一体の神像の座板に、延宝七年（一六七九）十月の墨書は、神像が新造されたか、再彩色の時のものである。

明治二十一年に社殿の改築がなされている。

#### 行事

現在は、春秋彼岸入りの日が例祭日というが、『熊本県神社誌』には四月十八日とあり、座祭規約によれば十二月二十九日、山、村中、安保の三組に分かれて順番に、本座、客座となつて、座祭が行なわれていたようである。古老の話によると戦前までは十二月三十一日に座祭が行われていたともいう。

#### 境内祀祠

石祠 寄棟造 間口三三 cm 奥行二七 cm 軒高五〇 cm 凝灰岩

自然石を祀る

石祠 寄棟造 間口五六 cm 奥行二七 cm 軒高四八 cm 凝岩

古幣古御札を納める。

境内奉納石造物

鳥居 明神形 凝灰岩

奉納 明治四十年十月吉祥日建之

向野区 氏子中

石灯笼 一对 凝灰岩 高さ二・二八 m

奉納者 年代 不明

狛犬 一对 凝灰岩 体高八三 cm 体長九〇 cm

奉納 日露戦役記念

当区氏子中

この狛犬は 左阿形が鳥居の内側、右吽形が鳥居の外側にある 珍しいことであるが、道路拡張のためと  
いう。

御手洗 凝灰岩

奉納 大正二年九月吉日

向野区 奉納者六人氏名

石柱 一对 幟立用<sup>のぼり</sup> 凝灰岩 高さ一・二 m

奉納 明治四十四年四月一日

上京記念 当村氏子 氏名

石柱 一對 幟立用 凝灰岩 高サ一・三 m

奉納 明治四十五年三月十三日

奉納者二人 氏名

平原神社 (巖島神社)

祭神 市杵島姫命 大国主命



平原神社

例祭日 十月十一日

創建 大永五年

社殿 本殿 コンクリートブロック建瓦葺 幣殿 六・四平方 m

拝殿 二四平方 m

由緒

祭神の市杵島姫命は、天照皇大神と素戔嗚命が、天の安川で誓約して、  
剣によりて生みませる五男三女神の中の一女神で、多紀理姫命。多岐津  
姫命とともに 旧官幣大社宗像神社の祭神で、沖津宮(沖ノ島) 中津宮  
(大島) 辺津宮(田島) に、それぞれ奉祀されている海の神であるが  
市杵島姫命は中津宮(大島)の祭神である。

この市杵島姫命を祭祀した、安芸（広島県）の宮島の厳島神社が、平家一門の氏神として高名になり、全国に厳島神社は多い。この宮島の厳島神社から勧請されたのが、万田（荒尾市）宮島大明神であり、万田の宮島大明神から、分霊勧請された神社であるから、以前は宮島大明神、または厳島神社と呼称されていた。

相殿の大国主命は 出雲大社に祀る神である。

村の古老の言い伝えによれば、大永五年（一五二五）時の殿様が、お宮を御寄進下さる、との御沙汰があったが、村中の者が相談して、万田の宮島大明神は海の神様であり、海辺の村としては大歓迎であるが、社料としての荒尾平原の三反の土地は、辞退申し上げようと話が決まった。辞退の理由は、土地の年貢が如何程かわからない。耕作者が居なければ二里余りの道を出作りせねばならない。（社料とは年貢がもらえるところを知らず、耕作権と間違えたいらしい）。そこで三反の土地の代りに、その土地の名前を貰って、平原の地名とともに、社殿を建立した。現在の大字清源寺字平原、町営住宅附近という。その後現在地大字清源寺字大辻一、八〇六番地に遷宮されたが、「これは加藤清正の 平原塘、塩屋塘の築提による開拓のために、移転を余儀なくされたか、民家との離れ過ぎが、その理由かも知れない」とのことである。

明治初年頃までは、野原八幡宮の宮司月田氏に 司祭を依頼していたという。

明治二十年社殿改築、大正十五年拝殿改築、昭和五一年本殿改築

### 行事

一月十一日 初御用日

四月十一日 座祭

十月十一日 例大祭

四月十一日の座祭で当屋が交代する。

境内奉納石造物

鳥居 コンクリート製

石灯籠 一对 凝灰岩 高サ一・九四 m

奉寄進 慶応二年丙寅六月建立之

村庄屋 島田栄左衛門

荒木繁之允

氏子中

石灯籠 一对 凝灰岩 高サ三・八 m (笠上に狛犬)

奉獻 大正十五年九月吉日

奉納者 長崎市 二人の氏名

狛犬 一对 凝灰岩 体高七七 cm 体長九九 cm

奉建立 明治四十年末

奉納者 海外在住の三人 助力 当村二人の氏名を刻む

石柱 幟立用 一对 凝灰岩 高サ一・七 m

奉寄進 弘化第三〇丙午年三月吉日

庄屋 中島清兵エ

白石保助

氏子中

記念碑 花こう岩 自然石 全高二・六m

征露記念

記念碑 凝灰岩 全高三米

鎮座四百年拝殿改築記念

大正十五年十月十一日建設

拝殿改築寄附者名（寄附者略）

村外在住の寄附者四七人の住所と金額が刻記されているが、カナダ、米國（含ハワイ）の在住者の金額が、  
為替の関係でか、二十一円十七錢と端数がついているのも面白い。

同碑には、村人五一人の氏名も刻記されている。

記念碑 凝灰岩 全高三・三m

皇紀二千六百年

境内拡張 記念

奉納者 十六人の氏名を彫入

赤崎管原神社（赤崎天満宮）

祭神 菅原道真

例祭日 三月二十五日 九月二十五日

創建 不詳

社殿 本殿 入母屋流造 九平方m

幣殿 四平方m 拝殿 二二平方m

由緒



赤崎神社

もと、区内の古城に奉祀されていた、という説と、元からここにあつたという説があり、何方とも判断しかねるが、赤崎は鎌倉時代からの村であり、この地にあつた鎮守神であつたと思われる。創立年代の言伝えもないし、『肥後国誌』その他書いたものもない

拝殿は昭和三十九年の改築と聞く。

行事

春秋の例祭日には隣保班九組が回り持ちで、座組を受持ち祭の準備をする。一般の村人は肴の重箱持参で、座祭を行なう。

境内奉納石造物

鳥居 明神形 凝灰岩

奉納 大正四年九月二十四日

赤崎 氏子中

狛犬 一对 凝灰岩 体高六七cm 体長六八cm

奉納 大正十三年三月二十五日建之

奉納者 当区七人の氏名を刻記

石柱 一对 凝灰岩

奉寄進 明治(以下土中)

熊本工兵才六大隊一中(以下土中)

### 塩屋菅原神社

祭神 菅原道真 聖観世音菩薩竝祀

例祭 十月十八日

創建 不詳

社殿 一棟建 三〇平方米

神像及仏像

菅公座像 木像 像高二六cm

聖観音菩薩立像 頭光背 木像 像高五六cm



塩屋菅原神社

先年神像観音像莊嚴彩色の際 観音像に

延宝二甲□天九月九日

玉名郡小代野原庄塩屋村

塩屋村庄屋

藤原利右衛門  
藤原末次

敬白

永方村住人、作主木戸喜兵衛藤原森次（塩屋、竹本益雄氏調査）

という墨書が見付かり外にも年代の下つた墨書がある。また、彩色の際この観音像がもとは十一面観音像であったことが発見された。

由緒

塩屋という村は 加藤清正の菜切塘 塩屋塘、平原塘の築堤後に 出来た村というから、この社もその後創建されたもので、観音像の墨書

からみて、延宝二年（一六七四）頃には、堂か社が出来ていたのであろう。天神さんも同時に祀られていたと思われる。文政九年（一八二六）の関文書『見聞筋内達草稿』の中に

本行塩屋天神之儀間敷床畝等一一見聞仕候處書面之通聊相違無御座勿論右堂及破損候ニ付有之候願之通再建御免被仰付候上ハ尺延又ハ過分之造作等不仕段ハ村役人供依私共手元ニ受□承知申候間如願御免被仰付儀ト奉存此之段見聞候趣以付紙申上候

九月（文政九年）

以上の一文がある。

関  
江副

他所でも観音と天神の併祀は、良く見られるところである。

社殿は、昭和八年に改築されている。

### 境内奉祀神

地神（社日神）花こう岩、自然石、高サ八八cm、いぼ石さんと呼ばれ、いぼを治して下さるといので、他所からのお詣りもあるようである。

### 行事

初祭日 一月十八日

例祭日 十月十八日

十月十八日の祭には、区内の水堀を干して魚を取り、それを肴に村中が 社で座祭があつていた。その際 神官の神籤で、翌年の当屋が決まっていたが、現在座祭はなく個人でお詣りをするという。

### 境内奉納石造物

鳥居 明神形 凝灰岩

奉寄進 大正五年十月吉日建設

寄進者九人の氏名彫入

狛犬 一對 凝灰石 体高八〇cm 体長六三cm

奉納 大正六年二月吉日

奉納者五人の氏名

石灯笼 一對 凝灰岩 全高二・一m

奉納 昭和十一年三月吉日

奉納者三人の氏名

石柱 一對 凝灰岩 幟立用 高サ一・二m

奉納 大正四年 奉納者名

石柱 一對 凝灰岩 幟立用 高サ一・二m

奉納 昭和八年十二月吉日

奉納者 在布哇<sup>ハワ</sup> 氏名

### 鷲巢菅原神社

祭神 菅原道真

例祭日 九月二十五日

創建 不詳

社殿 入母屋造 一九平方m

由緒

この区の先祖達は、承応の頃（一六五二―五四）肥後の国の北西の守備（特に三池街道）のため、この地に土着されたと聞くので、それ以降



鷲巢菅原神社

の勧請と思われる。区の人達は、古くからあったという話だけである。

行事

十月二十五日 村中で座祭を行う。

境内奉納石造物

鳥居 明神形 凝灰岩

奉納 大正六年

奉納者八人 發起人三人の氏名を彫る

石灯籠 一対 凝灰岩 高サ一・五m

天保四巳天 十月吉祥日

服部氏

石灯籠 一対 凝灰岩 高サ一・一m

馬場□□亟

御手洗 凝灰岩

明治十六年六月吉展 氏子中

立野菅原神社

祭神 菅原道真 聖観世音菩薩併祀



立野菅原神社

例祭日 九月二十五日

創建 不詳

社殿 一棟建 二二平方m

由緒

宮崎の小村であったので、宮崎の中央大神宮を氏神としていたが、大正年間に小祠を勧請したのが始まりといわれる。

行事

天神祭りは、九月二十五日に、村中で座祭が行なわれている。

観音さん祭りは以前、村中で、正月 五月 九月の十八日に行なわれていたが、現在婦人会が中心となり

正、五、九月の十八日にちかい日曜日に行われている。

出目の天神さん 永方

祠堂も石体もなく、天神の森だけである。人々から崇<sup>た</sup>る天神さんと、恐れられているが、石灯籠なども奉納されており、昔は厚い信仰に守られた天神さんであったと思われる。

奉納石造物

石灯籠 一基 凝灰岩 高サ一・二m

奉寄進 宝曆八寅歳 三月吉日

永片邑 長五郎

石灯笼 一基 凝灰岩 高サ一 m

天明五己——二十五日

永方村

その外永方に下方しもの天神じんさんがあつたが 神殿くらはは朽果くちはてて 新しい神像じんざうが、前田氏まえだによって祀まつられている。

### 稲荷信仰について

稲荷神社はおもに、倉うら稲魂のみたま神かみを祀まつる。倉稲魂神は食物を主宰し給う神で、その名の通り稲作の神「農耕神」であつたといわれるが、時代の移り変りとともに、商売繁昌の神となり、福の神として信仰される様になつた。

稲荷信仰には、二つの流れがある。倉稲魂神を祀る伏見稲荷系と、仏教の天部の仏だ茶吉き尼に天てんを祀る流れで、愛知県の豊川稲荷は著名である。茶吉尼天は自在の通力をもち、六ヶ月前に人の死を知るといわれる。

倉稲魂神は 伊邪那岐 伊邪那美 二神の御子とも伝え、また素戔嗚命と神大市比売命との間に、生なりませる第三子とも伝えられる。『熊本県神社誌』

京都伏見の稲荷神社は、真言宗寺院、教王護国寺（京都の東寺）の地主権現であるので、真言宗の拡法のため諸国を行脚した、高野こうや聖せい（高野山こうやまの行者）たちによって全国に流布したといわれる。

稲荷神は、狐との結びつきが強いことは周知のことであるが、けんぞく眷族または神使という以外、その理由ははっきりしない。

稲荷神社は赤鳥居が目じるしである。(赤鳥居のない社もあるが)稲荷神に願をかけて、願が成就した時、赤鳥居を奉納するというならわしがある。

稲荷神の神紋であり、眷族が守護する「宝珠」は火焰の玉であり、鳥居が赤く塗られるのは、この火焰を表現したものという。

また稲荷神社には、よく正一位と書かれているが、京都の伏見稲荷神社は、天慶年中に正一位を贈位されている

二月の初午は、どこの稲荷神社でも盛大な祭がある。

### 折地稲荷神社

祭神 倉稻魂神

例祭日 四月八日

創建 元久年中

社殿 入母屋造一棟建 一九平方m

神像 女神像 稲穂を啜えた眷族に騎乗 像高眷族まで二三cm

男神像 女神像と同一であるが 像高二〇cm

外に罹災の時の神像といわれる 焼残りの炭塊二個

棟札

前朱雀 左青龍

豊葺原水穂国肥之後州玉名郡折地村稻荷宮一座

後玄武 右白虎

夫当社稻荷宮者元久年中大職官鎌足大□十八代之末裔小代平内左衛門重俊公折地邑清神地御勸請□端御舍宮柱大敷立毎年発礼九月八日無怠奉祭然処龍造寺之乱世天正九年社頭悉為炎上因之浸神体雨露氏子中□之□造立猶今又一宮建立得志意趣者当国大主細川越中守宗孝公御武運長久国家安全風雨順和五穀能成当村老若男女氏子繫□□作円満願望家内安泰心中祈願一一如意成就常盤監盤□賜奉神社也

元久元年四月ヨリ享保二十□□五百三十二年可然処文化九壬申年五月四日咳<sup>アツ</sup>四時出火当宮御神体悉為炎上十年西五月上旬ヨリ再建取付七月中旬成就九月十日篤日棟上相済

庄屋 宮崎茂助

社守 丙左衛門

大工 赤崎邑 李助

伴 真助

木挽 腹赤邑 惣□□

天下泰平国家安全



折地稻荷神社

文化九年申

上井手 仏師 宮崎嘉一郎

所百姓 宇助

兵治

氏子中

由緒

棟札によれば、元久年中（二二〇四―〇五）に、小代平内左衛門重俊が勧請した、となつてゐるが、小代氏が野原庄の地頭職に補任されるのは、宝治年間（一二四七―四八）であるから、元久年間の勧請には疑問がある。

天正九年（一五八一）龍造寺の兵火に罹災して、享保二十年（一七三五）に再建されているのは、天満宮と同一である。考ふるに、飢饉の続いたといわれる享保年間に、氏子五十戸余の村で、同時に二社の造営といへば、その労苦は大変なものであつたと思われる。

また文化九年（一八一二）五月四日出火して、御神体まで全焼したので、翌文化十年七月再建に取り掛り、同年九月十日に棟上が終わつてゐる。

行事

例祭日 四月八日

当社では他の稲荷社のように初午の行事は盛大に行われない。昔の折地村の祭は、春四月八日が稲荷さん祭で、秋九月二十五日が天神さん祭と、それぞれの組によって、座祭が行われていたが、今は各自が思い思いに参詣するといわれる。

境内石造奉納物

鳥居 明神形 凝灰岩

御即位記念 大正四年一月

奉納者十五人 世話人十一人の氏名刻入

石灯籠 一対 凝灰岩 高サ一・七五m

奉納 大正七年九月吉日

奉納者十五人の氏名刻入

石灯籠 一対 凝灰岩 高サ二m

奉納 昭和十四年九月吉日

奉納者 夫婦子三人の氏名刻入

石造御眷族像 一対 凝灰岩 体高七四cm 体長七四cm

奉納

奉納者二十六人の氏名刻入

石柱 幟立用 一対 高サ一・三m

奉寄進 寄進者八人の氏名刻入

大木浦稻荷神社 腹赤

祭神 倉稻魂神

例祭日 二月初午の日

創建 天保十二年二月

社殿 一棟造平家建 一二二平方米

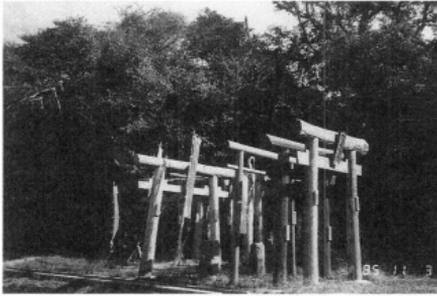
由緒

境内の板に書いた縁起書によれば、天保十三年（一八四二）二月、府本（荒尾市）の荒木孫七という人が、京都の本願寺参りの折、伏見の稻荷大社に参拝して、御分霊を勧請し、同時に眷族も同伴、共にこの地に祭祀したとある。

この眷族を「テボ助」と呼ぶことは、良く人の知るところである。テボ助とは天保年間に祭祀されたことから、その名がついたとも考えられる。

境内石祠及石造奉納物

石祠 凝灰岩 間口二八樞 奥行二四樞 軒高 樞 幣を祀る



大木浦稻荷神社

石祠 右に同形の二祠

石灯籠 一对 凝灰岩 高サ一・五米

奉納 嘉永□年□月 荒水氏

### 三崎神社（稻道の稻荷さん）清源寺

祭神 倉稻魂神

例祭日 四月九日

創建 不詳

社殿 入母屋造平家建 一二平方米

由緒

稻道の稻荷さんと、親しみ呼ばれている社である。大正八・九年頃までは、稻道の堤の塘の県道沿い  
に祠があつたというが、作本好司氏の手記『人生の記』によれば「大正八・九年の清源寺は、不幸にも放火狂  
による出火が八回もあり、徳瀬で焼けたのが八軒で、正月二十五日天満宮の初祭りの朝であつた。三十八戸  
が次々に焼けたが、犯人は本当には判明せず、沈火祈願に稻道に稻荷神社を遷座したところ、それ以来出火  
はなかつた」とあるので、大正九年に現在地に改築遷座されたものである。現在社殿は楠田時義氏の宅地内  
という。赤いコンクリートの鳥居が県道に面している。

行事

四月九日の祭は、区長、区役員、近所の人が集り、座祭りをする。

奉納物

鳥居 明神形 コンクリート製 朱く彩られている

遠見神社 (清正公さん) 清源寺

祭神 加藤清正

例祭日 五月二十三日

創建 不詳

社殿 入母屋流造一棟建 一二平方m 骨建七平方mの土間遊場がある。



遠見神社

由緒

古老の話によれば、清源寺から上沖洲への道「前塘」が決壊して、その築堤補修に手間取り、担当の関應左衛門も困って、日頃信仰の太宰府天満宮に祈願してようやく完成したので、大願成就の御礼に、折地天満宮の向の自分の土地に天満宮の社を建立した。清源寺の前塘には、安政五年（一八五八）に建立された清正公祠があったが、荒廃したのでその再建を思いたち、関應左衛門の子、重蔵氏の申出もあって、應左衛門の建立した天満宮社を貰い

うけ、村中総がかりで、瓦を除けた社をそのまま運搬して、現在地に清正公社として再建したもので、時は明治二十年前後のことであつたという。

この地は藩政時代の遠見御番所の櫓跡といわれ、社の後方には遠見御番所の屋敷跡があるが、当時のものとしては、コンクリートで補修された石垣だけが残っている。

#### 行事

五月二十三日は清正公さん祭りで、むかしは露店が出て、綿菓子、すゝめ、水飴、玩具など、子供たちの楽しみの一つであつた。

境内石造奉納物

鳥居 明神形 凝灰岩

奉納 明治四十年二月吉祥日

氏子中

狛犬 一対 凝灰岩 体高六三 cm 体長七五 cm

奉寄進 大正二年九月下旬

寄進者十五人の内他村の人三人氏名刻入

この狛犬は馬車引組合の寄進と聞く

#### 金毘羅宮

腹赤

祭神 大物主命

例祭日 一月十日 三月十日

創建 不詳

社殿 入母屋造一棟建 一・二平方m 西側に八平方m 継ぎ足す

神像 木像座像高サ二五cm 鳥帽子、直衣

棟札

奉祭祀神代吉祥棟

明治十有九年丙戌十月十日

棟梁 西尾茂三郎

世話人 藤枝芳平



金比羅宮

由緒

西尾平吉

大辻儀平

金比羅信仰は、四国の香川県琴平町の象頭山に祭祀される「金刀比羅宮」が本宮で、明治以前は修験道の道場であった。当時の本尊は、薬師如来の眷族十二神將の中の宮毘羅大將というが、一説では仏法守護の夜叉神王の上首ともいわれる。明治初年の廃仏

毀釈によつて、仏像その他が壊され、現在は、垂迹神であつた大物主命が祭神である。

当社でも、文政年間以前の勧請と思われるから、むかしは金比羅大権現が祀られていて、明治になつて大物主命を祀られたものと思われる。明治の始めに、社を今の小学校の裏に移したが、そこは「否」との託宣おつけで、元通り現在の地に帰られたとの話も残っている。

四国象頭山は、瀬戸内海を航行する船の、目標になる山であるので、金刀比羅宮を海神として崇敬、船乗の信仰は厚い。そしてその海難利生譚は枚挙いびに暇いとひがないという。

金刀比羅宮は、阿波国（徳島県）池田の、箸蔵寺を奥の院とする修験道の道場であり、他所の金刀比羅宮には、天狗を祭神とする所が多い。

### 奉納石造物

御手洗 凝灰岩

文政十年亥八月 辻 □左口 北口 万助

### 古城宮ふるじょうぐう

大字折崎字古城

社はないが、天神を祀つてあつたとの言い伝えがある。今は貝殻が積みあげてあり、五輪塔（空風輪はなく擬宝珠）が二基建っている

当古城のことについては 中世編参照のこと

### 奉納石造物

鳥居 明神形 凝灰岩 堅額に古城宮

明治四十一年十二月吉日

奉納者 外国渡航者及父等三人の氏名を刻入

石柱 凝灰岩 高サ一・一m 幅一八cm角

文政十天□ 九月十九日

城戸主計守末流建之

奉納者は城戸を姓とした十六人の人達である

五輪塔の台座に刻字

再建 嘉永元戌歳七月

当村庄屋 寿右衛門

**宮地嶽神社** 駅通り

祭神 神功皇后 勝村神 勝頼神

狭依姫命 多紀都姫命

創建 大正年間

社殿 一棟建 四平方m

由緒

大正年間に、長洲駅北側の道筋に勧請されたが、昭和十四年に現在地に遷座された。

祭神 神功皇后は三韓へ出御の際、宮地嶽の地に行啓なされ、彼の地の模様を聞召され、航海の安全を祈願されたという。

勝村神 勝頼神は、皇后の供をして渡海し、抜群の功をたてられ、帰還の後、宮地嶽の地を領して祖神となられた。

狭依姫命（市杵島姫命）多紀都姫命の両神は、宗像神社に奉祀する神である。『熊本県神社誌』

#### 奉納石造物

御手洗

奉納 昭和五年十二月

奉納者七人の氏名を刻む

当社の社地は 山満氏（ローソク屋）の寄進によるものである。

## 第二節 寺 院

## 総 説

肥後の国最古の寺院、陳内廢寺（城南町）や、肥後国分寺・国分尼寺（共に熊本市）の二寺、また、玉名市の立願寺廢寺などは、奈良時代またはそれ以前の創建といわれ、下益城郡豊野村の淨水寺、玉名郡玉東町の稻佐廢寺は、平安初期延暦頃（七八二―八〇五）の建立といわれる。

こうした白鳳末から平安初期にかけての仏教文化は、聖德太子（五七四―六二二）以後、仏教を政治の柱としてとりいれ、仏教による国家鎮護という中央政權の政策や、地方豪族の力によるもので、これらの寺は、南都六宗に属する寺院であつた。

その後玉名郡では、天長元年（八二四）に寿福寺（玉名市繁根木）が、延喜四年（九〇四）には、宝成就寺（玉名市高瀬）が建立されている。（『肥後国史』）

寿福寺は天台宗に属し、繁根木八幡宮の裏にある廢寺で八幡宮の神宮寺であり、また真言宗の宝成就寺は嵯峨天皇の勅願寺で、談議所ともいわれる。談議所とは、高野山の碩学が住職となることが通例で、地方の僧侶が高野山に上らずに、学を成すことが出来るように、宗学を教授することが使命であつた。

長和二年（一〇一三）に、岱明町山下に安養寺が創建されているが、安養寺は当初天台宗で、後に禪宗に

なり、又浄土真宗に改宗している。

小代山中に在ったという正法寺は、肥後の国では唯一人「大師号」を贈られた。月輪大師俊苧が建立した寺と伝えられるが、俊苧は建久元年（一一九〇）宋から帰朝して、この正法寺を、台、密、禪、律の四宗兼学の道場としたといわれる。

長洲町では、一二世紀までに建立された寺院の記録は何も残っていない。一三世紀の初期に建立されたと思われる寺院に、折地の阿弥陀寺がある。天正年間の戦火に罹災し、寛永の頃再建されており、初めは天台宗と思われる。阿弥陀寺と前後して、宮崎に清源寺が建ったと推定される。この寺は天台宗であったが、後で大字清源寺に移されたといひ、正平二年（一三四七）玉名市高瀬の禅宗寺院、高瀬山清源寺となった。肥後最初の禅宗寺院は、下益城郡城南町の能仁寺で、弘長二年（一二六二）の創建という。（『肥後国史』）

南北朝以降中世末にかけて、長洲町にも幾多の寺院が有ったことは、『国郡一統志』『肥後国誌』等に書かれているが、その中で現在まで残っている寺で、永方の信定寺等がある。『国郡一統志』には真住寺とあるが、信定寺の誤りではあるまいか。文明十七年（一四八五）の角塔婆が残っている。

古書に記録されている寺は、信定寺、阿弥陀寺の外では

福専寺 年代宗旨不明 一堂に観音、阿弥陀、葛輪

鎮徳寺 年代不明 禅宗 廃跡に観音堂、宮崎

通禅寺 年代不明 禅宗 廃跡に薬師堂、宮崎

廣福寺 年代不明 天台宗 宮崎の南端

光鎮寺 宗旨不明 一堂に阿弥陀を安ず、向野

金剛院 年代不明 真言宗 虚空藏堂、高浜

清泉寺（或記清水寺） 宗旨不明 一堂に阿弥陀を安ず、高浜

龍藏寺 年代宗旨不明 観音堂あり、梅田

正善寺 禪宗 小代の頃には寺領があり観音堂を残す、長洲（以上『肥後国誌』）

以上十一ヶ寺の外、前記の阿弥陀寺、清源寺、信定寺等も含めて、禪宗三ヶ寺、天台宗四ヶ寺、真言宗一ヶ寺、不明六ヶ寺である。

浄土真宗が肥後に入った年代は明らかではないが、一説には天文年間（一五三二―一五四）の終り頃という。然し。天正年間（一五七三―一九一）比叡山や石山本願寺死守の応援に出ていた肥後の僧侶たちが、改宗帰還して扱めたともいわれる。

肥後に侵攻した薩摩の島津義弘は、肥後の一向宗（浄土真宗）を禁圧し、転宗の命に従わない者は成敗する（上井覚兼日記）といっている。

江戸時代の寺院形態に本末制度がある。それは寺院を、本寺と末寺の關係に固定させたもので、本山の下に、本寺、中本寺、直末、孫末があり、本山、本寺は末寺に対して、種々の権利をもって、これを取締つた。寺格や僧階も詳しく制定されたが、これは各宗各様であつて必ずしも一定しない。（『日本仏教のあゆみ』宮坂宥勝 大法輪閣）

寺請制度（檀家制度）は、そこに在存する人の総べてが、いずれかの檀那寺に所屬しなければならぬ制

度である。

寛永十四年（一六三七）の島原の乱後、幕府は、切支丹の取締りを強化して、寛永十七年宗門改役を置いた。この宗門改めには、宗盲人別帳と寺請制がある。宗盲人別帳は現在の戸籍簿に相当するものであり、寺請制は檀信徒または門徒に、寺請証文を発行して、そのまま、または担当の役所から、旅行その他の時の、関所の通行手形を下付した。現在の身分証明書である。

寺請制度は、切支丹禁制の手段として制定されたが、結果的には、寺院活動に制限を加えた。それに寺請制度は家が基本であったため個人の信仰を不可能にして、家の信仰になり、その本質的な構造は、今日に至るまで温存されているといえる。

浄土真宗は、一向宗、門徒宗などと呼ばれていたが、安永三年（一七七四）浄土真宗と呼称することを幕府に願い出たが、増上寺の反対により実現を見ず、明治五年になって浄土真宗の公称が許可された。

明治初年の廃仏毀釈 信教自由、昭和二十年の敗戦、占領軍司令部により、末寺制度がなくなり、現在の寺院制度が確立した。

### 阿弥陀寺 折地

山号 康雲山

宗派 浄土真宗本願寺派

本尊 阿弥陀如来立像

開山 寛永十年

現任職 隈部正見師

由緒

『肥後国誌』の折地村の項に、阿弥陀寺跡、宗旨山号不分明、一説禪跡トモ云、今僅ニ草堂ニ阿弥陀仏ヲ安ズ

また『玉名郡誌』には、天正の頃龍造寺の悪黨大軍にて焼失仕、寛永十年右寺跡を願立、玉名郡山下村安養寺に了加弟子となり一庵を創立す、とある。

折地の地には、四郎丸、秋丸という名主屋敷跡と思われる小字がある。この字名と同じ、四郎丸資繼という豪族が居たことが、石清水八幡宮の古文書にあるが（中世編参照）鎌倉時代の人で相当の勢力を持っていたと考えられている。その豪族が、氏の鎮守神として祀ったのが、天満宮であり、持仏堂として建立されたのが、旧阿弥陀寺と思われる。

神仏混淆ごんりゅうの時代では、神社と仏閣は車の両輪と同じで、神社が鎮守神であれば、寺は神宮寺（別当寺）で、両方で氏族を守るものと考えられていた。折地天満宮の建立は元久元年（二二〇四）（折地天満宮棟札）であるから、持仏堂としての阿弥陀寺ならば、建立は同時か、その前後と思われる。

一説に、旧阿弥陀寺は、小代八郎行平の病氣平癒祈願のため建てられたというが、小代氏の肥後入国は、宝治元年（一二四七）以降であるので、旧阿弥陀寺が、天満宮と同時代の創建とすると、四十年余り後に、小代氏が下向したことになる。

を灯し続けておられる。

なお、当寺には、九曜紋付の位牌。靈感院殿前越州大守羽林徹巖宗印大居士、天明三年乙己十月二十九日歿がある。靈感院殿とは、細川家八代目の藩主、重賢公の戒名であるので、重賢公の偉徳を慕い、当寺でも供養されたものであろう。

本尊阿弥陀如来像は、三世了順の頃、本山から許しを得たもので、康雲作と作者銘が入っている。

### 歴史住職

開基―了加 二世―了喜 三世―了順 四世―了貞 五世―智證 六世―智旭

七世―戒香 八世―智海 九世―学業 十世―至誠 十一世―徳水

十二世―現在職 隈部正見師

### 行事



阿 弥 陀 寺

また旧阿弥陀寺は、肥前の籠造寺隆信が、天正九年（一五八二）の肥後侵攻小代攻略の際、天満宮とともに全焼の災難に見舞われている。それまでの阿弥陀寺は禪宗であったといふ。（「玉名郡誌」）

今の阿弥陀寺は、岱明町山下の安養寺に弟子入りした、了加和尚が開基となり、寛永十年（一六三三）古寺跡に一寺を建立、浄土真宗寺院として、現住職正見師まで十二世、法灯

御正忌外本願派の恒例行事を執り行なう外、寺としての特別の行事はない。

安正寺 腹赤

山号 真證山

宗派 浄土真宗大谷派

本尊 阿弥陀如来立像

開山 正保二年



安正寺

現住職 隈部寿春師

由緒

隈部家は、南朝の忠臣菊池家の三家老の一つであつて、菊池家没落後も、菊池・山鹿地方に勢力を保持していたが、隈部親永・親泰父子は、佐々成政との戦、いわゆる「国衆一揆」に破れ、隈部家は滅亡四散したが、残つた一族末の「明裕」は仏門に入り、山下村（岱明町）安養寺で修業、後に下沖洲に安正寺を創立した。明裕に子供がなく養子を迎えたが、その後実子が出来たので、正保二年（一六四五）養子明存を上沖洲に分家させ、真證山安正寺として大谷派、下沖洲（岱明町）が孤島山安正寺で西本願寺派にしたという。以前は当寺を上の寺、下沖洲孤島山が下の寺と呼ばれていた。

たというが、寛政四年（一七九二）雲仙崩れの天津波の被害を受けて、現在地に再建されたものである。上  
沖洲字狐島うしづまに、寺屋敷という地名があるから、当寺の元の寺跡ではなからうか。

当寺十一世慈雲の長男慈明は、本山の要職の外、大学の教授なども歴任した碩学であった。  
寺宝として、宗祖絵伝四幅がある。

### 行事

御正忌 春秋彼岸会

留守番電話を利用しての、電話法話

### 歴世住職

開基―明裕 二世―明存 三世―恵海 四世―恵存 五世―慈教 六世―慈般 七世―恵教 八世―恵明  
九世―法潭 十世―法剣 十一世―慈雲 十二世―（代理住職）橋本俊明（南関町西京寺住職）  
十三世―現住職 隈部寿春師

### 光正寺 宮崎

山号 法庄山

宗派 浄土真宗本願寺派

本尊 阿弥陀如来

開山 明暦三年

由緒

『玉名郡誌』によれば

当庵由緒之儀は、往古 禪宗清源寺と申す寺跡において、玉名郡長洲町西光寺隱居宗仁と申す僧、慶安四年（筆書註記（一六五二）三月当所に転居仕其後二男宗善を以て一代住居相願候處 明暦三年（一六五七）、四月玉名郡宮崎出目村へ一代住居藩より被差許候 猶今般永代庵室に被差許候也

とあるように、当寺の在る場所は、昔の清源寺跡の一隅で、東隣の中央神社は、清源寺の鎮守神といわれ、神社の軒瓦には卍の紋がついている。神社の御神像には、尊容爰仍清源納□の文字があり（神社編参照）

云い伝えの通り清源寺跡に間違いのないものと思われる。

当寺の境内に、同形の五輪の塔の地輪が二個ある。（信仰石造物編参照）鎌倉時代末期の正和四年（一三一五）に、沙弥全□によって建立されたものである。

旧清源寺の創立年代はわからないが、五輪塔が建てられてから六七〇年余、光正寺が創建になってから三三四年の昭和五六年、本堂が改築され、木の香も新しい本堂での、門徒の法悦が偲ばれる。

行事

御正忌 一月

彼岸会 三月、九月



光正寺本堂



光 智 寺

永代経供養

盆供養

歴世の住職

開基―宗仁 二世―宗善 三世―宗因 四世―宗益 五世―宗雲 六世―恵旭 七世―海東 八世―諦道  
九世―正之 十世―現住職 法康之師  
寺伝では、現住職が十三世になられるというが、夭折や住職の時代の長短にもよるのであろう。

光智寺 長洲新町

山号 龍雲山

宗派 浄土真宗

本導 阿弥陀如来

開山 昭和十六年

由緒

当寺はもと、玉名市伊倉の光専寺に出張所であったが、先代純雄が、荒尾市府本の、松福山光智寺の寺籍及寺号を得て、昭和十六年現在地に、龍雲山光智寺を創立した。

当寺の寺伝によれば、府本の松福山光智寺は、長和元年（一

〇一二〇 宿嚴和尚の開基といふから、もとは密教の寺院と思われる。宝治年間（一二四七―四八）小代氏の再建とも伝えるが、その後のことは審かつまびらではない。

当寺には、府本の松福山からの寺宝、勢至菩薩像がある。――勢至菩薩は觀世音菩薩とともに、阿弥陀如来の脇待で、觀世音の慈悲に対して、智恵の象徴であるところから、光智寺の名称が生れたとのことである。

行事

御正忌

春秋彼岸会

盆供養

歴世住職

先住職―純雄 現住職―荒木泰慈師

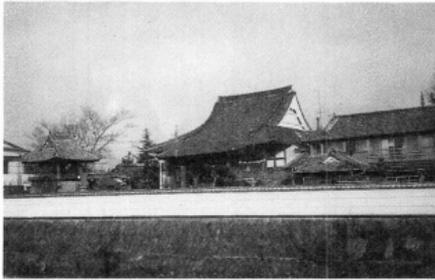
西光寺 長洲上東町

山号 龍泉山

宗派 浄土真宗本願寺派

本尊 阿弥陀如来

開山 慶安二年



西光寺

## 由緒

同名の寺、熊本の慈雲山西光寺の八世、良海の子宗仁が、慶安二年、通寺（説教所）として建てたのが始まりという。

熊本の西光寺は、明応年間（一四九二—一五〇〇）に了宗という僧が、山鹿郡片保田（現山鹿市片保田）に建てたのが始まりで、永正五年（一五〇八）西光寺の寺号を得て、三世了親が加藤清正の命を受けて、熊本に移したというが、一説には玉名郡千田（現鹿本郡鹿央町千田）に地藏堂があり、これが西光寺跡ともいう（『肥後国誌』より）

当寺五世恵覚の世代、寛保三年（一七四三）五月、本堂に落雷して本堂は猛火に包まれ、火煙の中、住職恵覚は死を決し、本尊阿弥陀如来像、開山影像、高僧絵像等を救出し終ると同時に、棟焼落ちて堂宇一同烏有に帰すと。当寺の落雷縁由記にも見ゆると書いてある。今本堂に安置されている。本尊阿弥陀如来像等は、当時の猛火の中から救出されたもので、当西光寺の寺宝である。

現本堂は文化七年（一八一〇）に再建されたものである。

なお先住職西住憲正師は、終戦後の混乱の中で、長洲町長を務められた人である。戦後の嘉永川の拡張により、寺域が狭くなっている。

## 行事

## 修正会

## 報恩講

春秋彼岸会

盆供養

歴世住職

開基—宗仁 二世—宗善 三世—宗泰 四世—寿湛 五世—惠覚 六世—慧愍 七世—大愚 八世—宗顯  
九世—大現 十世—憲正 十一世 現住職 西住康行師

三宝寺 長洲上本町

山号 泉隣山

宗派 浄土真宗本願寺派

本尊 阿弥陀如来

由緒

三宝寺は、もと一部村（荒尾市一部）の禪宗の寺院といわれているが、天文の末頃龍造寺の兵火に焼滅した。その後文禄三年（一五六〇）再建されたが、元禄の頃長洲の地へ再々建されたといわれ、その間に禪宗から浄土真宗へ改宗したものと思われる。

荒尾市一部の大園、旧三宝寺跡には祠堂があり、本尊薬師如来の外、阿弥陀如来、毘沙門天、天神の木像が安置され、天神の座裏に、文禄三年一月、奉納三宝寺の墨書があるから、これで天文の兵火の後、三宝寺が再建されたことがわかる。

長洲に移転後の三宝寺は、天明の大火の外再三の町火に罹災し、本尊を除いて寺堂、記録、過去帳外、寺宝が悉く焼失のため、由緒沿革はわからないという。

当寺の言い伝えによれば、先祖は佐々木高綱の出で、合志郡（菊池郡の一部）で合志姓を名乗り、その子孫が野原に来て、仏門に帰依したが、明治になって長尾に改名したとのことである。

現本堂は罹災七十余年後の建立といわれ、初め東向きであったのを、南向きに建て直され、十五世利剣によって再び東向きに改められた。

当寺とは直接関係はないが、旧三宝寺の梵鐘のことはあまり知られていない。旧三宝寺の梵鐘のことは、荒尾の福島作蔵氏が、佐賀で三宝寺の銘のある拓本を貼った屏風びんぶを発見され、天文年間に龍造寺勢が佐賀へ持ち去った。三宝寺の鐘であることが判ったもので、口経六〇種位の鐘という。この鐘には原銘と二度の追銘がある。

原銘 奉造鑄

肥後国浄光寺洪鐘事

右志者為四恩法界也

延慶三年庚戌十一月二治成也

錢十萬文大施主永藏氏女

草壁為末

大工 平吉近

浄光寺は荒尾市蔵満の松木園まつぎとんにあつた古刹で、宗派は不明。その創立は鎌倉時代またはそれ以前かも知れないといわれる。鐘の鑄造奉納は延慶三年（一一三一〇）で鎌倉末である。

次に第一次追銘は

奉寄進鐘一口三宝寺

南無薬師御前

右志者为奉祈现当二世

願主玉名郡一部村

原之対馬藤原種満同女

天文十五年丙午六月吉日 敬白

大檀那 一部助四郎

藤原久資

住持高賢

これは天文十五年（一五四六）鐘が旧三宝寺へ移された時の追銘で、この頃旧三宝寺が建立されたと思われる。小代氏の一族藤原種満即ち小代種満しよまん及其の女、一部助四郎等によって奉納された梵鐘も、天文二十二年進攻してきた龍造寺勢に、寺は焼かれ、鐘は奪い去られて、佐賀県佐賀郡川副町南里に現在する正定寺に奉納される。これが第二次追銘で次の通りである。

種字「バ」肥前国正定寺洪鐘

住持證譽

願主南里有加為現当

天文二十二年癸丑六月吉日

このようにして浄光寺の鐘は三宝寺へ移り、龍造寺勢により佐賀に持去られたが、昭和十七年十一月、軍へ供出された。

この梵鐘拓本集成の発見により、不図はかぞも三宝寺の起源が知れたのである。

行事

御正忌その他本願寺派恒例行事

歴世住職

火災による記録焼失のため十二世まで不明

十三世―龍津 十四世―大穎 十五世―利剣 十六世―現在職 長尾利生師

正福寺 大字清源寺

山号 大恩山

宗派 浄土真宗本願寺派

本尊 阿弥陀如来

開山 慶長十六年

## 由緒

当寺の由緒は、当寺縁由（十世住職仁寿の書）という文書が残されている。

## 当寺縁由

夫当席宝の基本を尋ねれば往古は天台宗にて、高瀬町清源寺 旧頃、開基肥国際（隆）清源大居士御免地の一字二有此候処、菊地筑前守武尚公御代御寄進により、中村今之助高瀬江移転仕、右清源寺旧跡には、大恩山正福寺と申一字建立に相成、御本尊地藏菩薩を安置いたし、数年堂守仕候処、其後慶長年中の頃、加藤清正公の家来、中島八右衛門と申もの剃髪いたし、法名を安慶と改む、中島の時の同性山鹿在佐無田村二有之今の長善寺之也。此八右衛門慶長六年の頃清正公御直毫の一札を拜領いたし則其論書云

宛行所領為替地爾今矢津田村之内を以五十石合志郡杉水村之内を以五十石合百石遣候全合所契可抽忠勤之状如件

慶長六年十月十七日 清正公御判

中島八右衛門どのへ

右の八右衛門剃髪の後、熊本明專寺を建立いたし其の後当地に來り、右の大恩山地藏堂を造立、浄土真宗に改宗いたし、白石村西福寺の末席に相成五ヶ寺の役二入り法勤いたし数年を経候内、明專寺と西福寺の本末争有之、一向相分らず候時、宝永年中の頃御本山端房下方に相成 明專寺は正福寺了照を直下に付西福寺は御本山直下に相定、双方伏意無之御取計に相成二付 中頃明專寺の下に相成候、其角□端房の書状別紙に委曲候間今略 亦当寺も、安慶、了慶、了喜、了念、了照と相續いたし、了照代に寺号、七高租

等之御影像申受其御免書に西福寺明専寺は無之 只端房直下にて相職し、夫より了善、恵秀、恵雲、良素、当代にて十代相続いたし、良素代御国一統席是廢立の時、不浅心配いたし漸く願付候に付、今に退職無く相続代々仕置くべくに付記。

## 大恩山正福寺本尊

## 地藏菩薩

肥後に入国した加藤清正は、治水、干拓に力を入れたが、長洲町では古塘、菜切塘、平原塘、塩屋塘、行末塘が残っている。その中の一つ平原塩屋塘を築堤し、堤防以東の宮崎川流域の美田を作りあげたのが、中島八右衛門で、用水は焼石堤（現荒尾市赤田池）を築いて確保したと言ひ伝える。中島八右衛門はこの外、天草の陣でも清正を助ける手柄をたてたとの説もある。

その後加藤家は改易になり、ある時は大寺の間にあつて心配苦勞もあつたようである。歴世の住職には傑出した僧もあつたが、十世仁寿は、幼時に父を喪ない、年端もゆかない頃から、熊本明専寺で修業。刻苦勉勵、若年にして教導試補の資格を得て、帰寺の際には既に三人の弟子を連れていたという。それが竹林館の始まりで、竹林館には遠く広島県などからも修業に集つた人もある。

明治六年九月十六日（旧八月十五日）本堂から出火全焼したが、直に再建され、竹林館は続けられた。この火事で名物であつた肥後椿「清源寺長楽」（おきらく）は焼失したとの事である。

熊本の明専寺は、真宗西派京師興正寺内端坊（房）末である。（『肥後国誌』より）

## 行事



信定寺

信定寺  
永方



正福寺

御正忌

春秋彼岸会

盆供養

永代経

歴世住職

開基—安慶 二世—了慶 三世—了善 四世—了念 五世—

了照 六世—了善 七世—惠秀 八世—惠雲 九世—良素

十三世—誠一 十四世 現住 中島正澄師

十世—仁寿 十一世—道円 十二世—止観

山号 靈芝山

宗派 浄土真宗

本尊 阿弥陀如来

開山 天正十九年

由緒

境内にある墓地の角塔婆や寺伝によれば、遠祖は歌聖といわれる紀貫之で、貫之の後裔大野国隆が、建久四年（一一九三）

大野別符（現岱明町と玉名市の一部）の地頭職に補任され、二男国親（角塔婆では国秀）は築地（現玉名市築地）に居住して築地を名乗った。（中世編大野国隆の項参照）

天正年間（一五七三—一九二）大野氏、小代氏の間は数度の戦があり、天正十年（一五八二）焼石原、金山原の戦で、大野方は敗れ、後全滅した。（中世編、焼石原、金山原の戦、参照）この戦で、清尚の子藏之巫は肥前にのがれ、後永方に来住したが、藏之巫の一人子五郎兵衛は、元龜二年（一五七二）仏門に入っており、禅念と号していた。この禅念が信定寺の初代である。信定寺と号していたか否かは分からないが、寺は禅念以前から在ったもので、境内墓地の角塔婆はそれを物語る。文明十六年（一四八四）に建てられている。この角塔婆については、別節信仰石造物の項を参照されたい。

当寺の九世礼讓は、天保七年に没しているが、肥後八僧の一人にかぞえられる学僧であったといわれる。十一世慈雲は、明治九年に築地であった姓を迦統と改め、十二世憲孝の明治四十三年、本尊を残して、本堂その他が全焼している。

## 行事

御正忌

春秋彼岸会

盆供養

永代経

歴世住職



清 正 寺

開基―禪念 二世―善海 三世―善西 四世―惠雲 五世―惠南 六世―峰旭 七世―碩道 八世―觀照  
九世―礼讓 十世―慈顯 十一世―慈雲 十二世―憲孝 十三世―憲道 十四世 現任職迦統公明師

清正寺 大明神

山号 永運山

宗派 日蓮宗

本尊 一塔兩尊合掌印 曼荼羅

開山 明治五年

由緒

開基泰喜院日助上人は信仰心厚く、妻女の病氣平癒を清正公に祈願して、数年間本妙寺へ裸足で日参して、祈願成就後、清正公ゆかりの地に、日蓮宗寺院を建立し、清正公堂を建て、報恩感謝の修業を積み、正法弘通、広宣流布に努力された。二世泰順の後を継いだ現住職は、池上本門寺で修業十年、京都本山本法寺の、故富田義將権大僧正に師事して、求道に精進、権僧正に任ぜられている。

境内に安置されている石造浄行菩薩は、「法華経従地湧出品」に説かれている地湧四菩薩の一つという。祖師日蓮上人の描かれた曼荼羅にその名

がみられ、上行菩薩、帝釈天、鬼子母神、十羅刹女などとともに、日蓮宗において特に信仰される仏である。

行事

初御命日 一月十八日

春秋彼岸日 三月 十八日

丑の日祈祷 七月 丑の日

盆供養 八月 十八日

御祖師御会式 十月 十八日

関運祈願祭 毎月 一日

信行会 毎月 十日

鬼子母神祈願 毎月 十八日

清正公御命日 毎月 二十三日

歴世住職

開基―泰喜日助上人 二世―泰順日悟上人 三世―現住職 菊川泰淵上人

清台寺

長洲下東町

山号

海雲山

宗派 浄土真宗本願寺派

本尊 阿弥陀如来

開山 元禄元年

由緒

元は浄土宗の古寺跡というが、古寺名、年代等は不明である。

当寺の開基覚元は、大字清源寺の立徳寺と先祖は同じで、細川家の家臣中津海肥前守であるという。肥前守の孫祐存は、熊本の浄光寺（宝永六年丹後寺と改む）を継いたが、その一子覚元は高瀬の西光寺に入り、

同寺の八代住職となり、本山から玉名郡布教を命ぜられて天和四年（一六八四）本尊奉戴、元禄元年（一六八八）現在地に清台寺を創立した。

肥後に明増ありと、他国にまでも知られた明増藤満は、当寺四世の住職である。明増は、越中の明教院増鎔に師事して、西海法龍の名を授けられ、国学にも通じた僧であつた、当時の西本願寺を揺がしたといわれる。三業感乱さんごうらんの論争に、相手派を論破して、西国に論敵なしといわれた名僧である。三業感乱さんごうらんとは、西本願寺学林主流において、十八世紀中頃から三業婦命説が勢力をもってきたが、三業婦命説とは、身は合掌敬礼、口に阿弥陀仏に助け給えと念仏、心にこれを念ずる、身口意を揃えて、弥陀に救いも求めなければならぬという説で、学林六代能化功存に始まり、七代智洞に



清台寺

至って正統教学の立場に立ったのであるが、寛政九年（一七九七）質問書が提出されて以来、批判が次第に強まり紛争となったものである。紛争は畿内各地・美濃・安芸などで続発し、とくに美濃では、享和二年（一八〇二）数千人が蜂起した。（大桑斉著・寺檀の思想・教育社）

この中であって明増は、学林派の先鋒となって奮闘した。

また寺内に訪導閣という塾を開き、安心論を説いて幾多の門弟を育てた。

当寺は細川藩士で六五〇石の知行取、松尾家の菩提寺で、本堂の北側に、騎翁松尾偉太郎の墓がある。松尾偉太郎は細川公の馬術師範で、江戸の愛宕神社の石段を、騎乗のまま駈上がり、曲垣平九郎の再来、日本一と讃えられ、新塘の井樋を騎乗して飛越すなど、よく人の知るところであったが、今は語る人も少ない。

#### 行事

浄土真宗本願寺派恒例行事を勤むる。

#### 歴世住職

開基―覚元 二世―自休 三世―観超喜元 四世―明増藤満 五世―志勇 六世―遊蘭 七世―又玄 八

世―興仁 九世―尊義

十世―現住職 清住明文師

#### 善證寺

長洲宮ノ町

#### 宗派

浄土真宗大谷派



善 證 寺

本尊 阿弥陀如来

開山 昭和十三年

由緒

当寺の長洲での歴史は浅い。現住職の父親止は少年期から仏門に帰依して諸寺を廻り、念仏に専念したが、後玉名の光浄寺に入り、住職の代理を勤める傍ら、昭和十三年、光浄寺の長洲出張所を設立して布教につとめ、下益城郡に於て廢寺の憂目に会おうとしていた善證寺の名跡を継いで、孚齊塾跡の地に現善證寺を建立した。昭和二十七年、本山より許可があり法人設立。

孚齊塾は小山信胤の学塾で小山塾とも呼ばれ、慶応元年（一八六三）に設立され、明治八年の学制成立とともに閉鎖されたが、長洲における幾多の先覚者を輩出した塾である。

行事

御正忌 春秋彼岸会その他大谷派恒例の行事を勤める。

歴世住職

開基―親止 二世―現住職 福田覚了師

長光寺 長洲上宝町



長光寺

山号

起龍山

宗派

浄土真宗本願寺派

本尊

阿弥陀如来

開山

元禄三年

由緒

開基利円は当長洲の人で、早くから真宗門に帰依して、熊本西光寺で剃髪、宗門に入り、元禄三年（一六九〇）郷里長洲に帰り、三間町に一字を建て、仏教弘法に専念したというが、まだその頃は長光寺の名称はなかったようである、元禄十五年、本尊阿弥陀如来を拜受して、布教に努めたという。

二世利海の時、元文六年（一七四二）正月、七高祖の影像などとともに長光寺の寺号御免の許可があったが、後寺堂は焼失したといわれる。

三世智応は荒尾市牛水に移って、布教に挺身していたが、たまたま長洲町西光寺に招請されて、寺内に僧坊を建てて、そこに移り参仏したが、安永六年（一七七七）台風のため僧坊は倒壊した。

七世洗心は、明治十二年、現在地上宝町に寺堂を建立して、本山末長光寺として独立した。

八世一乗はそれまでの山辺姓を、本田姓に改称した。



日 感 寺

土地の老人の話として伝わるものに、徳川の初頃この地に刑場があり、死者を弔う一字が建立されていたともいう。

歴世住職

開基―利円 二世―利海 三世―智應 四世―聞慶 五世―円海 六世  
 一聞誓 七世―洗心 八世―一乗 九世―為男 十世―淳清 十一世―現  
 住職 本田安生師

日感寺

長洲出町

山号

有明山

宗派

日蓮宗

本尊

一塔両尊合掌印

開山

明治十九年

由緒

日蓮宗は、法華経を唯一の根本原理として、人類平和、仏国土建設を願い、安国論を唱えた日蓮に起り、さまざまな弾圧と迫害を克服して拡法発展して今日に到っている。

当寺の起りは、円應院日感上人によると伝えられる。寺名は同上人の名に因むもので、永くその名を留め、そのため、付けられたとのことである。この地の信仰心の厚い人達が集まり、妙唱会を結成、堂宇を建立して、



立 徳 寺

明治十九年、尼僧本精院妙順法尼を開基とする。

通称高畑の法華寺ほうけつと呼び親しまれ、善男善女の尊崇を受け、南無妙法蓮華經のお題目を高唱しては、祖師の教えに人々の心を開き、煩惱ぼんのうを払い、心を鎮め、信仰の道へ導くために精進してこられた。

寺宝

身延山日薩の書画

日慎の書画

祖師折伏像（元禄年間の作）

歴世住職

開山―円應院日感上人（岩永義騰師） 開基―小篠妙順法尼 二世―  
堤 妙恵法尼 三世―小堀義隨上人 四世―杉本義寛上人 五世―高田前  
敬上人 六世―古賀本誠上人 七世―現住職 塩田義健上人

立徳寺 清源寺

山号 臨涛山

宗派 浄土真宗本願寺派

本尊 阿弥陀如来

開山 寛文年間

## 由緒

寺伝によれば、寛永九年（一六三二）肥後に入国した細川家の家臣、中津海肥前守は、熊本の観音坂の地に、丹後寺という一字を建立した。中津海肥前守には孫が二人あり、兄が丹後寺を継ぎ、弟智教は当地に来て、浄土宗の寺跡を継ぎ草庵を結んで、浄土真宗の布教に励んだのが始まりという。

寛政四年の大津波により、旧記、過去帳等流失したといわれるが、本堂はその後再建されたとの話である。当寺の覚書によれば、本願寺からの下文に、寛文十年七月九日、木像尊形の許可があったという。

『肥後国誌』によれば、丹後等は初め浄光寺と号していたが、宝永六年（一七〇九）丹後寺と改めている。本堂内陣に、九曜の金紋入りの位牌が二基あり、その一基には、靈雲院殿前拾遺兼越州大守桃谷義蟠大居士。別の一基には、隆徳院殿兼越州守郭然義因大居士 と書いてあるが、ともに肥後熊本の藩主で、細川忠利からかぞえて、四代宣紀（靈雲院殿）五代宗孝（隆徳院殿）の位牌であり、当寺の住職が供養したものと思われる。

## 行事

御正忌報恩講

春秋彼岸会

盆供養

永代経

仏教婦人会法話

## 歴世住職

開基―智乗 二世―智教 三世―天領 四世―諦思 五世―念道 六世―若松 七世―獨暢 八世―白巖  
九世―深遠 十世―顕證 十一世―現住職 中津海春子師

## 第三節 祠 堂

長洲町には、幾多の観音堂、地藏堂その他の祠堂がある。敗戦後一時は顧みる人も少なかったが、今では祠堂や石像にも、香花が手向けられて、もとの信仰が甦ったように思われる。

観音さん、正しい仏名は観世音菩薩。又は観自在菩薩とも呼ばれ、多数の仏の中で、釈迦如来、阿弥陀如来と同じく、人々に親しまれ尊崇される仏である。

観世音菩薩の尊像は、宝冠に阿弥陀如来の化仏を頂き蓮華を持つ。宝冠に化仏がない場合には、必ず蓮華を持っておられる（特別の場合を除く）。この尊像が聖観世音（略して聖観音）で、外に、十一面、千手千眼・如意輪・馬頭・不空絹索の五変化観音を合わせて、六観音（天台宗）というが、真言宗では、不空絹索観音の代りに准胝観音を入れて六観音とする。また全部を合せて七観音ともいう。

観世音菩薩は、早くから大乘經典に現れる仏で、浄土教典では、阿弥陀如来の脇侍であり、法華經の普門品においては、あらゆる功德をのべるが、信者をすべての危難災害から救う現世利益の仏である。

長洲町の祠堂等の尊像は、古い尊像も多いと思われるが、その多くは補修や莊嚴彩色の際、印相、持物、像形まで改変されて、観音像といっても、果して観音さまかと疑われる尊像もある。

地藏菩薩は、釈迦仏涅槃後、弥勒菩薩が如来になって兜卒天とくすてんから下生するまでの、五十六億七千万年の無仏の間、衆生済度の菩薩であり、また阿弥陀仏の分身ともいわれる。

地藏菩薩は、死後浄土への成仏を約束する阿弥陀仏や、現在兜卒天で修業中で、将来如来になって、娑婆世界に下生するという弥勒菩薩と異なり、今の娑婆世界で、苦惱に沈む非力な衆生を救済する仏である。

地藏は菩薩でありながら、その姿は他の菩薩のような、宝冠瓔珞ほうくわんりょうらくなどつけず、頭髮を刺った比丘形であるのは、外は出家の姿、内に菩薩を秘する姿といわれる。

正しい願いは「そのまま叶う」といわれる珠「如意宝珠」を持つ延命地藏、錫杖と宝珠を持つ遊行地藏、念珠や経箱を持ったり、施無畏せむい、与願の印をなす尊像もある。

地藏尊は、現世利益も説くが、更に死んだ者の罪障を除いて解脱げだつへ導くという。六道（地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上）に迷う衆生を、それぞれの世界に赴き解脱（極楽）へ導くといわれる。また安産、子育て地藏や賽河原の地藏尊はよく人の知るところであり、交通事故発生地点に、石造地藏尊が安置されているのは、地藏信仰が現在に生きている証拠であろう。

## 1、長洲地区

### 観音堂 下東町

祠堂 間口3m 奥行四・五m

・聖観音座像 木像 頭円光背 右手施無畏 左手持蓮華れんげ 像高三六cm 蓮華座及須弥壇しゆみだん高十五cm  
外に天部像と思われる小像がある。



観音寺 下東町

この祠堂は、元の正善寺の寺域にあるという。

『肥後国誌』によれば、高良山正善寺は禪曹洞宗の寺院で、永禄年間（一五八五―一六九）の建立。小代氏から寺領を与えられていたが、小代氏の衰微とともに頽廢たひげした。その上正保年中（一六四四―四七）火災にあい焼失したが、延宝年中（一六七三―一八〇）宝泉という僧が再興し、この寺の墓地に、寛政の大津波の被害者を葬った所として知られる。

嘉永川の開削で、寺域も狭くなりながら、明治初年までであったというが、話を知る人も少ない。この観音堂はその中の一堂であろう。

境内石造物

- ・石塔（その一） 供養塔 花こう岩 円柱 塔身一・一m 台座 反蓮華座、高二五 cm

火災の被害と思われる、上部は剝落はくらくして刻字が読めないが、下部の刻字

享保六年<sup>⑤</sup>七月一日

浄誓 积宗忍

积尼妙安 积妙深

辰七月藏 宝永六年午七月日

宝永六年（一七〇九）享保六年（一七二一）それぞれ死亡の年であろう

から、その後に建てられた供養塔であろう。

・石塔（その二）この石塔も供養塔と同一のものであるが、主銘文の方の剝落がはげしい。

#### 写一部塔

享保十六辛〇年八月日造立之\*

經典書写の供養塔である。經典を書写することにより、心の安らぎを得て、亡者への供養の目的を果たし功徳を得られるものである。また裏面に、

願以此功徳 普及於一切

我等与衆生 皆共成仏道

と刻つてある。これは回向文で、供養の最後に誦む文句であるので、經文一部書写供養して石塔を建てた。最後の回向文と思われる。

#### 阿弥陀堂 上東町

祠堂 間口二・五 m 奥行二・五 m

・石造阿弥陀如来立像 砂岩 上品下生印 像高一・八 m 風化剝落がひどいが、造作は立派である。

・阿弥陀如来座像 木像 上品下生印

像高四二 cm 蓮華座及須弥壇高一九 cm 他の仏像と共に、向って左上段の棚上に安置

・十一面觀音座像、木像 像高一五 cm 岩座高九 cm

・小仏像 尊名不詳 像高二五 cm



阿弥陀堂 上東町

・石塔（笠付）砂岩 角蓮華座付 石塔高六八cm 全高一・三m  
 ○○上東町 右側の文字は判読できない。

このお祭は四月八日で、むかし祭の日には、釈迦涅槃図と、閻魔大王を中心を描かれた地獄変相図の大軸を掛け並べて参詣人に拜ませているのだが、掛軸の傷みがひどく、修理に出した後は、祭の時も毎年は出さなくなり、今は隣の松岡せつさん方に納めてある。長洲町では貴重な文化遺産である。

一 m 釈迦涅槃図 縦一・四五m 横一・九m 繪面 縦一・七m 横一・三

地獄変相図 縦二・〇五m 横一・六二m 繪面 縦一・六m 横一・

四五m

の大幅である。落款は、涅槃図にはないが変相図に、一掃発直とある。両幅とも同一人の筆に成るものと思われるが、惜しいことに、表装の修理の際、繪面に手を加えた跡がある。

加藤神社 新山

祠堂 間口一・二m 奥行九・四cm 切妻流造

・清正公 木像 座像高二七cm

・鳥居 凝灰岩 明神形 奉獻 大正六年六月二十三日 松原町中



虚空蔵堂 建浜

寛政五年（一七九三）六月二十三日、河野東庵という人の勧請と伝えられる。  
祭日は六月二十三日、以前は町内のお祭で夜灯などもあったというが、今は立山さん一軒で祀るとの話である。横の小祠は何も祀っていない。

金毘羅宮 西荒神町

祠堂 間口九〇cm 奥行九三cm 切妻流造

コンクリート基壇 高一・三m

安政三年 松尾氏の勧請によるものと聞く。松尾氏は当時、六百五十石の知行取りであったが、海で働く人達の安全と、豊漁祈願のため建立されたと伝えられる。航送船道路開通のため現在地へ移転したものである。

## 2 清里地区

虚空蔵堂 建浜字立山

祠堂 間口五m 奥行四m

虚空蔵菩薩座像 木像 五智宝冠 頭円光背 持蓮華 像高三〇cm、蓮華座は、框座、反花、敷茄子 蓮弁、高一八cm

虚空蔵菩薩は実相無相の真実の智慧を、無尽蔵に持っておられるので、その名があるといわれる。福德、智慧の仏といわれ、僧空海や日蓮が、虚空蔵求聞持法を修したことは有名である。

建浜の野畑さん宅にある、虚空蔵菩薩堂記録には、元長洲町長であった寺田喜次郎氏の話記録したものと思われ、宝暦年間（一七五一―一六三）飢饉に見舞われた時、吾々の先祖が難洪の暮しの中で、心をそろえ身を抛って、御堂を建て、三悪道、地獄宛らの生活をたてなおすべく、虚空蔵菩薩を安置したものである。という意味のことが書いてある。

記録の通りこの祠堂は、宝暦年間に創立されたものであろうが、それは再建ではなかったか。『国郡一統志』の高浜の所に高厳院、虚空蔵、阿弥陀と書いてあるので、寛文年間には虚空蔵堂があったものと思われる。虚空蔵菩薩は、普通左手に、鉤（仏の武器の一種）を持つが、この像は右手に未開敷蓮華（蕾蓮華）を持つておられる。

この虚空蔵さんの祭りは、一月十三日と九月十三日に行われるが、昔は九月の祭りでは「冬瓜の酢あえ」が肴で、一月十三日は「大根なまず」と「うどん」がご馳走で、村中の祭りであったが、今は近所の人達が集まり祭りをする。

#### 祠堂の奉納石造物

・石灯籠 一基 凝灰岩 高一・二m 宝珠はなく、笠上に、五輪塔の火輪をのせる。  
灯籠には、文化五〇……の文字だけ読める。

#### 阿弥陀堂 建浜字浜浦

祠堂 間口三m 奥行五m

・阿弥陀如来坐像 木像 思惟形 通肩 手印上生形、像高三六cm 須弥壇上蓮華座高一四cm



阿弥陀堂 浜浦

地元の人の話では、寛政の大津波で、流れ着いた仏像というが、あり得る話である。仏像が流れてきた話はよくあることで、所によれば石仏が流れてきた話もある。この仏像については、立山の虚空蔵尊と同じく『国郡一統志』に載せてあるが、初めからこの地に在ったのではなく、他所から移動したもので、お堂の建っている所は浜浦の墓地の跡であり、その改葬碑が横に建ててある。

梅田天満宮裏の観音堂

祠堂 鉄骨造 間口、奥行共三・八m、高さ二・一三mの処に祀段があり、四体の仏像を安置する、向って右より

・薬師如来座像 木像 右手施無畏印 左手薬壺 頭円光背 像高二四cm

岩座上蓮華座まで高さ二〇cm

・聖観音座像 木像 施無畏与願印 宝冠に化仏はない。(後補の仏師の過失であろうか) 像高三五cm 岩

座上蓮華座迄 高さ二二cm

・十一面観音座像 木像 像高三八cm 岩座上蓮華座迄 高さ一九cm

・阿弥陀如来立像 木像 上品下生印 像高三八cm 蓮華座は受座 敷茄子 蓮弁 高さ一八cm

右四体の仏像の中で、薬師如来像は後補の手の加え方が少なく、外の仏像は補修莊嚴の際に変わったものと思われる。

この諸仏の祠堂は明和四年 梅田村庄屋紋右衛門の残した文書に

薬師堂 萱葺 社地 一畝六歩

観音堂 萱葺 社地 一畝十二歩

十一面観音堂 萱葺 社地 空地

と書残されているが、各祠堂が老朽したので、祠堂を再建して仏像を収容したとの話である。

観音菩薩は現世利益の仏で、衆生の優苦救助の願いを聞くと、直ちにお救い下さるといわれているが、この観音さまは「いぼ」を癒して下さるそうで、いぼに悩む人のお詣りが多いと聞く。

『肥後国誌』に「梅田村龍蔵寺跡。宗旨年代不分明、本尊観音一堂二安ズ」とあるのでこの辺りに龍蔵寺が在ったものと思われる。また阿弥陀堂とも書くので、四体の尊像は龍蔵寺に關係のある仏達であったのではなからうか。

### 3 六栄地区

いづもり堂 赤田

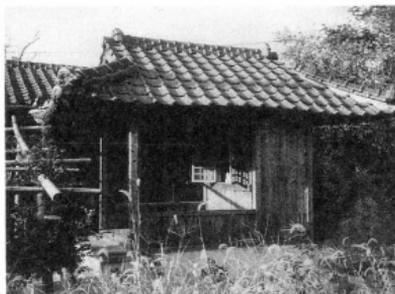
祠堂 間口二m奥行三m

事代主神 倉稲魂神（稲荷）の木像を祀る

赤田の宮崎川の合流地点に、いづもりさんの森があるが、以前は大きな木もあり、もっと茂っていたが、町道開通のため場所が狭くなり、大木もなくなっている。ここに事代主神が在したというが、赤田に家が殖え始め、汚水が流れるようになったので、大正の初頃上流三〇〇mの地に祠堂を建て、稲荷神を併祀したが、



薬師堂 宮崎



赤田いづもり堂

堂が老朽したので、昭和五十四年現在地公民館横に移転改築したものである。いづもりさんの森の事代神は、慶安二年、一先宮創建の際に、一先宮に併祀されたのではないかと思われる。その後、立木を依代よりしろとしていづもりさんを祀っていたのであろう。

薬師堂 宮崎

祠堂 間口二m 奥行二m

・薬師如来座像 木像 持薬壺 像高二七cm 蓮華座高一二cm 蓮華座裏に墨書がある。

天保十二年丑〇〇〇〇

起仏体一尊 中島源兵衛

庄屋 孫右衛門

頭百姓 吉助

同両 和平

長洲新町徑

行年五十八歳 戸泉金助作

『肥後国誌』に「宮崎村通禪寺跡、一堂」薬師仏ヲ安ズ」とある『国郡一統志』にも薬師とあるので、通善寺の縁（ゆかり）の一堂で古くからあ



観音堂 宮崎

つたものと考えられる。蓮華座の墨書は、仏像を新しく彫造したか、再彩色した時のものであろう。

堂の裏に五輪塔の空風水輪等の残欠を祀っている。古老の話によれば前方の堀には、丸石（水輪）や屋根形の石（火輪）等が大分落ち込んでいるという。

祭りは近所の人達が集まり、お茶飲みをするぐらいである。

観音堂 宮崎

祠堂 間口二m 奥行四m

・聖観音立像 木像 持蓮華（蓮華失） 頭円光背 像高四七cm 蓮華座高

一七cm

・如来形座像 木像 秘印 頭円光背 像高二二cm 蓮華座高九・五cm

この観音像の蓮華座裏にも、薬師堂の蓮華座裏と同一の墨書がある。『国郡一統志』には宮崎、観音と書  
くし、『肥後国誌』にも「鎮徳寺跡一堂「観音ヲ安置ス」とあるので、この辺あたりに鎮徳寺があったものであ  
らう。

長洲から高瀬への昔の往還が、お堂の前を通っているので、昔は往来の人の良い休み場であったであろう  
が、今は年寄達の良い憩の場であり、子供達の遊びの場である。

一月十八日、近所の人が集り観音さん参りをする。



観音堂 鷺巣



鷺巣観音堂の阿弥陀如来

宮崎にはこれらの古寺跡の外に、広福寺跡がある。阿弥陀堂の跡と云われる所に、城戸新一氏が、廣福寺跡の石碑を建立、供養しておられる。廣福寺は天台宗であったと『肥後国誌』にある。

観音堂 鷺巣

祠堂 間口二m、奥行五m

・阿弥陀如来座像 木像 上品上生印 像高二四cm 蓮華座 敷茄子 華盤 高一四cm

村の人達は観音堂と呼び、観音さまを祀るといわれているが、現在の尊像は阿弥陀如来である。頭部に螺髮らっぽうこそないが、肉髻にくげいも正しく、印相も上品上生の阿弥陀仏の定印であるが金箔その他の塗りが落ち木肌で納衣等の彫は摩滅している。

いつ頃の勧請かわからないが、鷺巣の先祖達の持仏堂として祀られたのであろう。

この観音？（村人の言う）さまは、安産の観音として敬まわれ、他所からの参詣も多かったが、今は村人のお参りも少ないと、近所の老人の言葉である。祭りも先年までは、十月十八日に村中で座祭りをしていたが、今では各人でお参りしている。

・奉納石灯籠 凝灰岩、高一・五m

奉寄進 鷲巢 服部氏

観音堂 高田平

祠堂 二四平方m 内宝段四平方m

・聖観音座像 木像 持蓮華 像高二八cm 蓮華座、高一二cm

明治末から大正初年頃の勧請と聞くだけで、外は何もわからない。

祭りは、各戸一年回りで奉仕する。

阿弥陀堂 向野

祠堂 間口四m 実行二m

・阿弥陀如来立像 木像 上品下生印 頭光背 像高五七cm 華華座そくばな反花 高一五cm

村人の話では、この阿弥陀像が、昔この地にあった光鎮寺の本尊という。もとは黄金の阿弥陀仏が本尊であったが、盗難にあい、現在の阿弥陀像になったといわれる。

このお堂の前、道をへだてた山本さん方を寺・寺屋敷と呼ぶ、寺屋敷は光鎮寺跡のことという。

尊像の納衣その他は彫も立派で、江戸初期までの作と考証されているが、頭部と両手は後年の補作と思われる。

堂内に阿弥陀仏を陰刻した、自然石の板碑がある。頭部は折れて失われている。この板碑は、光鎮寺、七社宮の年代の証左になるものとして貴重である。(板碑は信仰石造物参照)

観音堂 折地

祠堂 開口共二・四m 鉄骨建、厨子<sup>ずし</sup> 間口四二cm 奥行四八cm 高一二五cm

・十一面観世音立像 木像 持蓮華 頭円光背 像高七七cm 蓮華座高一七cm

勸請年代不明、大正六年に再建されたといわれるが、安置された十一面観音像は、未開敷蓮華を持つ立像で、宝冠に化仏を戴き、十一面の立派な尊容<sup>そんよう</sup>で後補の跡も見られない。

今の鉄骨の祠堂は、昭和四八年の改築である。

祠堂敷地内石造物

・御手洗 凝灰岩

奉納 昭和九年九月 奉納者氏名

・石碑 凝灰岩 高二・四m



折地観音堂の十一面観音

崇武 (碑文)

露西亜征討は帝国自衛の為世界平和の為人道維持の為己むべからざる義戦なり開戦以来海に陸に連戦連勝世界無敵を誇りたる露国の暴慢を挫き<sup>も</sup>旭旗は治く萬国敬仰の所となる。此千載一遇の秋に際し吾等は少年期を過ぎ壯年期に入る因て記念の為此の碑を建つ時に明治三十八年一月なり

建立者 十三人の氏名を刻る。



観音堂 下平原

観音堂 赤崎

祠堂 間口二m 奥行三m 鉄骨建

観世音座像 木像 持蓮華(蓮華失) 頭光背像高一八cm 岩座上蓮華座

高八cm

小像ながらまとまった感じの尊容である。聖観音と思われるが、勧請年

代はわからない。

4 腹赤地区

観音堂 下平原

祠堂 間口五・五m 奥行四m

・聖観音立像 木像 持蓮華、頭円光背、像高三六cm 蓮華座高一三cm

・石造観音座像 船底光背形、浮彫、台座共一石造、全高四五cm 台座に刻文

明治二十六年 玉名郡大字清源寺村

荒木繁胤 六十六才 府本ヨリ転居

勧請年代及由緒を知る人はいない。この観音堂の西一帯の水田は、むかし塩田であったところで、堂の南北一帯の地中から、土地の人がいう「ごうねつ」(石炭の焚殻で鉱物化したもの)が出る。この辺に塩焚きの釜屋が並んでいた跡といわれる。

九月十七日に、観音さん祭りが行われる。下平原を上と下に分けて、座元は籤で決め、上と下で交互に座

元を勤める。

観音堂 清源寺 揚

祠堂 間口三・二m 奥行四m

内陣の宝殿 間口一・四m 奥行四七cm

宝殿に四体の仏像を安置する 左より

- ・不動明王立像 木像 炎光背 像高四〇cm 岩座共光背までの高さ六〇cm
- ・阿弥陀如来座像 木像 上品下生印 像高三〇cm 台座蓮華座高一六cm
- ・聖観音像 木像 岩座に半跏はんかし思惟しゆい像 船形光背付、手は施無畏与願印、宝冠に化仏はない。像高五〇cm、光背までの全高六〇cm
- ・天部像 裸形で右手に刀を持つ 木像 岩座迄全高五〇cm



清源寺揚観音堂

宝殿内に、その外二体の古小像がある。一体は毘沙門天である。

宝殿中央右の観音像は、宝冠に化仏はなく持物の蓮華もないので、形の上では観音像とは思われないが、古老の話によれば「隣家に落雷、火災の際祠堂も類焼、頭部、胸部、手等に焼損を受けられた」と聞くので、後補の節に、手印が変り持ち物もなくなったのであろう。また天

部像は、天部像としか表現できない尊像であるが、宝殿内の毘沙門天の古小像の代りに、新彫して祀りかえたのであろうか。それならば毘沙門天。観音菩薩、不動明王と古式の観音三尊の様式で、後で阿弥陀如来を加えたものと思われる。『国郡一統志』に、清源寺、地藏、観音とある観音は、この観音のことであろう。

内陣宝殿の墨書

奉寄進宮殿 清源寺庄屋 善三郎

安永三甲午藏 八月吉祥日

荒尾手永口組頭中 惣百姓中

大工 大女 伊平太 左三次

観音の台座裏に

奉彩色之時、文久二年戊五月

世話人 太兵衛

所百姓 金次 外五人（文字不明）

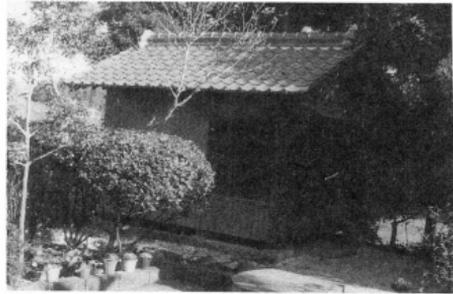
この外に大正年間にも、各像の彩色がなされている。石造奉納物は、

石灯籠 一对 凝灰岩

奉納 大正八年九月建設

奉納者 二女姓名

地藏堂 清源寺 大女



清源寺大女地藏堂

祠堂 間口三 m 奥行四 m

・地藏菩薩立像 木像 右手錫杖 左手宝珠像高二〇 cm、蓮華座高一〇 cm）  
錫杖、宝珠を持つ遊行地藏であるが、昭和二十六年に新しく彫造されたものである。

この地藏堂の由緒は古く、近くの正福寺の文書に、紀国隆の建立の寺が高瀬に移った後、そのあとに建てられたお堂という。

この地藏さんは、むかしから子供好きで、子供達に水浴させられたり、泥を塗られたりして「仏さんを粗末にするな」と子供達を叱った老人が、その夜夢の中で鶴に乗った地藏さんから戒いじめを受けたなどと話が残っている。今では、近所の年寄達の憩いの場であり、遊びの場である。

地藏堂 清源寺 天満宮前

祠堂 間口二 m 奥行三 m

・地藏菩薩立像、木像、持錫杖、宝珠、頭門光背、像高四二 cm、蓮華座高五 cm

清源寺天満宮の鳥居横にあり。遊行地藏尊である。最近再彩色の時。天明三年（一七八三）九月二十四日造像、と書いた紙が尊像の裏下から見付かったという。毎年九月二十四日に、地藏さん組の座祭りがある。

若宮宮わかみやぐう 腹赤 大堀堤塘

祠堂 間口二・八 m 奥行三・七 m



若宮宮



宮前の地藏堂 清源寺

祭神 仁徳天皇を祀る

腹赤小学校の東北の溜池、大堀の堤の塘にあるが、祭神、仁徳天皇は、應神天皇の皇子、大鷦鷯命おほすさぎのみことである。應神天皇即八幡宮の子宮であるから、若宮と名乗られるという。

村の古老の話によると、いつの頃からか、ここ大堀の堤に、河童かわこが住みついて、塩浜（塩田）に行き帰りの若者をつかまえては、相撲を取ろうとつきまとうようになり、河童が負ければ勝つまで勝負を挑むので、困った村人がこの若宮さんを勧請したところ、河童は出なくなったという。

若宮（仁徳天皇）さんと、河童との因果関係はわからない。四月二十日、区長、区役員や水路管理者が集まり、神前で御祓の後、御幣を各池、水路等に立てる。水難除けのためである。

観音堂（阿弥陀堂） 腹赤北口

祠堂 間口三 m 奥行四 m

・阿弥陀如来立像 木像 上品下生印 光背は除いて横に置く



阿弥陀像後姿



阿弥陀堂

像高五八cm 肩幅一八cm 蓮華座高一一cm

・十一面観音座像 木像 持蓮華（蓮華失）像高二〇cm 蓮華座高一一cm  
近所の人は観音堂というが、一般には阿弥陀堂と呼ぶ。立像の阿弥陀尊を正面に安置してある。この阿弥陀尊は、立花宗茂の正室、闇千代夫人の念持仏であつたとの説もある。

金箔が落ち、下地塗りも剥落して木肌はだが見えているが、この仏像を見て奇異の感に打たれるのは、背中に人の手首形を彫込んであることである。一時腹赤の安正寺に預けてあつたと聞く。



阿弥陀如来と観世音菩薩

十一面観音像は、一時薬師如来ではないかといわれていたが、持物の蓮華は失われて無い。阿弥陀像より古いと思われる。

元徳の地藏尊 腹赤

祠堂 間口、奥行とも、一・七mの木造小祠に安置 石造地藏尊座像 船底光背形 浮彫 合掌印、頭部欠失 像高二八cm

宝暦十一年 □□十四日

宝暦十一年は、西暦一七六一年で、今（昭和六二年）より、二二六年も以前のことである。

命日は四月十四日、元徳の人達が集り、供養の祭りをする。

祠内は平素、掃除がゆきとどき、お花が新しい。

放牛地藏 上沖洲

祠堂 間口二m 奥行三m

・石造地藏菩薩立像 船底光背形（上部欠失）浮彫 持宝珠 像高五一cm

尊像横の光背部に左の刻字がある。

（上部欠失）六体 享保十五年四月十二日

熊本 他力願主 放牛

放牛は、熊本の古大工町に住んでいた。鍛冶職の子で、親孝行な人であった。父は大酒飲みで、ある年の正月酒の上の間違いから、大矢野源左衛門という侍に無礼討にされた。父の死を悲しみ無情を感じて、父の



放牛地藏



放牛地藏堂

菩提を弔うため仏門に入り、放牛と名乗り、発願して十年間に百体の仏像建立に取組み、享保七年から享保十七年までに「一〇七体の石仏を建立した。その七十六体目の地藏尊が享保十五年（一七三〇）四月十二日に造立された。それがこの地藏尊である。

長洲町指定文化財である。

地藏堂（腹赤新町十二石神社境内）

祠堂 間口一・七五m、奥行二・二五m

・石造地藏菩薩立像 船底光背形、浮彫、持宝珠、像高五六cm 蓮華座共全高八四cm

尊像横の光背に、□年 十月吉 等の刻字が読まれるが、他はわからない。大分古い尊像のようである。衣紋の彫りなど入念な作で、むかしは見事なものであったと思われる。

石造地藏尊の右側に

・木像地藏尊立像、遊行姿 像高二二cmがある

地藏堂 腹赤新町東

祠堂 間口一・八m 奥行二・三m

・石造地藏尊座像 船底光背形 浮彫 持念珠 明治四十三年戊五月下旬  
 県道と旧長洲往還との分岐点にある地藏堂である。台風で台座より落ちて、上体が欠損したのを補修してある。

毎月二十四は東組だけで、地藏祭をするそうで、祠堂は近年の建立である。

#### 第四節 石祠・石像

石祠とは、仏像や神像を安置する石製の屋根のある石堂である。石祠は、台石、室部、屋根の三つの部分からなり、室部には石の戸が有るが、無いものもある。屋根の形により、入母屋造、切妻造、寄棟造、唐破風軒造、春日造などに分類されるが、神社建築が基調になっている。

長洲地区には、恵比須神の石祠が多い。恵比須は恵比須、夷、蛭子、戎、とも書くが、ともに事代主命ともいう。風折烏帽子かりまぬきに狩衣かじぬぎ、指貫さしぬきを着て釣竿を持ち鯛を脇にかかえた姿が普通ではあるが、男女二神を祀る所もある。

商売繁昌の神、福の神、耕作の神としても祀られるが、元来漁業の神で大漁をもたらす神として、漁業に携わる人達の信仰は厚い。

中世に始まったといわれる七福神信仰とは、大黒天、毘沙門天、弁財天の仏教天部の仏達と、福祿寿、寿老人、布袋ほでなどの中国の高僧や道教の道士たちの中に、我が国の神としては恵比須一神が加わっている。

恵比須神の祭は、一月十日の初戎に始まるが、長洲では旧十月二十日に行われる。



惠比須神 西新町



新町惠比須神

長洲地区の石祠・石像

石祠

新町の惠比須神

石祠 間口六七cm、奥行三五cm 入母屋造 軒高五二cm、

凝灰岩、創立年代不明

木像 二体（老朽）と幣を祀る。

この惠比須神は商売繁昌の神で、むかしは旧十月二十日町  
内中で、盛大な祭りが行われていたが、今では形ばかりの祭りになった。

石祠の世話をしておられる川副さん方には、むかし奉納された幕が保存さ  
れている。

西新町の惠比須神

石祠 間口一m 奥行四三cm 寄棟唐破風軒造、軒高六三cm

祠内 自然石と幣を祀る。

明治の初頃、南隣の酒屋で、漁師たちの大漁祝の最中に、惠比須神勧請  
の話が起こり、建立されたものという。

上磯町の惠比須神 龍宮さん

惠比須さん



恵比須神 中磯町



恵比須神 龍宮祠

勸請年は不明であるが、石室の横に、世話人八人の氏名と船揚場連中と刻ってある。  
下今町の恵比須神

石祠 間口五五cm、奥行五〇cm 入母屋造軒下六二cm

石祠 間口五〇cm 奥行四五cm 入母屋唐破風軒 軒高五五cm 明治廿七年十月廿日と刻む

・石造恵比須神 持鯛 像高四三cm

龍宮さん

石祠 間口四五cm 奥行五三cm 入母屋唐破風軒、軒高六

〇cm<sup>2</sup>

・石造尊像 高サ四三cm

持宝珠らしい尊像は風化している。龍宮さんとは、海洋を主宰し給う神で、上津綿津見神、中津綿津見神、底津綿津見神を祀るといふ。共に海上安全の神である。

中磯町の恵比須神

石祠 間口五二cm 奥行五五cm、入母屋唐破風軒 軒高五

八cm

・神像 石像で鯛を持つ 像高台石まで四五cm



惠比須神 下本町



惠比須神 下今町

・神像、木像、像高台共三五cm

この御神像は、老朽虫食がひどいようである。

この惠比須神の由緒は古く、元和元年（一六一五）の勸請と聞く（角岡喜志夫氏談）

昔は下今町の角にあったが現在地へ移転の際、石祠、基壇  
共新造した。今では、角岡喜志夫氏一人で祀っておられる。

下本町の惠比須神

石祠 間口 奥行共四六cm 入母屋唐破風軒、軒高四九cm

・神像 石造惠比須神、像高台座四二cm

下本町惠比須氏子中

改築昭和三十五年九月吉日建之

世話人 十三人の氏名が刻んである。

以前は表通りにあつたが、昭和三十五年九月、長洲魚市場  
の近くに移転改築されたものである。

西荒神の惠比須神

石祠 間口六〇cm 奥行四六cm 寄棟造軒高六〇cm

・神像 石体惠比須神二体前後に並ぶ、後神像高五〇cm 前  
神像像三五cm 外に猿田彦と彫った自然石



漁待さん 中町



恵比須神 中町

航送船道路開通のため、ここへ移転されたものと聞く。祠堂金毘羅宮と、石像遊行地藏尊が同所にある。

中町の恵比須神 川端

石祠 間口七六cm 奥行四三cm 入母屋唐破風軒

・神像 木像男女神像

ここでは、漁待さんと同じく、男女二神の恵比須神である。むかしは、表通りにあつて、個人で祀っていたが、道路拡張のため移転したといわれる。

漁待さん 中町

石祠 間口六一cm 奥行五〇cm 入母屋唐破風軒、軒高六一cm

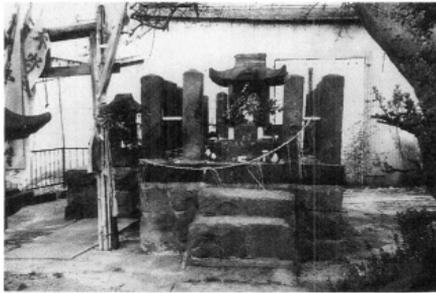
神像、男女各一体の木像神

漁の神様といわれるが、恵比須神であろう、祭りの日には神前で火を焚く行事があつたという。勧請の年代不明

金毘羅神 下磯町

石祠 間口九七cm 奥行八〇cm 入母屋唐破風軒 軒下一八cm 基壇高二・三m

金毘羅大権現を祀る。海上安全、海難守護、豊漁等の祈願



源神社 東荒神町



金比羅宮 下磯町

のため、勸請されたものであろう。石灯笼の竿石と思われる石片に、宝暦九□□曆（一七五九）十一月吉日の刻字も見える。

鳥居記念碑、高一・四九m 幅五七cm

風化のため、多少の人名が読み取れるだけであるが、佐賀

県小城郡砥川村の字が見える。

記念碑 高廿二・四五cm 碑面は風化、字は見えない。

源神社 東荒神

石祠 間口六四cm 奥行四二cm 入母屋唐破風軒、軒高五〇cm

石祠内には、自然石、幣、石造小仏頭を祀る。石祠に左の記刻がある。

明治三十八年九月十三日建之

発起人八人の氏名と石工の氏名を刻む。

町の人は、「げんざくさん」と呼び、源三位頼朝を祀るといだが、頼朝ならば右大将であり源三位であれば源頼政のことであろう。頼政ならば「鶴」という妖怪を退治した人であるから、頼政を祀って町内の魔物や悪疫の追放を祈ったものであろうか。頼政鶴退治については、平家物語に詳しく書かれている。



三宝荒神社 下東町

この源神社は、元西荒神との境界にあつたが、傍に松の木があり、牛馬を繫ぐ<sup>つなぐ</sup>ので、糞尿等で汚されて畏れ多いと、現在地に明治三十八年に移されたといわれる。祭りは十月十七日で、東荒神町が毎年当屋をきめて、座祭がある。

稻荷神社 (源神社の隣)

石祠 間口二七cm 奥行二七cm 入母屋唐破風軒、軒高四四cm

石祠内には自然石を祀る。

白鬚さんと親しまれ信仰されている。

三宝荒神社 下東町

石祠 間口九一cm 奥行六一cm 三ツ棟入母屋造唐破風軒、軒高六九cm 基壇上石屏 高サ四五cm

石祠内 自然石三個を祀る

三宝荒神とは、神仏習合の神であり、仏、法、僧、三宝の守護と、神仏を信仰し正しい行ないをする浄業者を助け、悪人を罰し穢<sup>けが</sup>れを忌む神である。

宝冠を戴き、三ツの顔と六ツの手を持った三面六臂で、忿怒相またわ如来相を表すという。その如来相、忿怒相から、如来荒神、鹿乱荒神、忿怒荒神の三神がある。(国語大辞典)  
怒るときは、人の福德を奪い、障り、祟りをなし、不浄を

嫌う神である。神道では迦具土神と呼ぶ。

火は不浄を焼き払い、清浄にするという信仰から、古来竈の神として台所に祀られ、不浄を嫌うところから井戸の神にも祀られた。

この神の勧請年代は不明であるが、石祠には、明治八年己亥五月十七日と刻記してある。  
 ・鳥居 明神形 凝灰岩 竪額、三宝大荒神社

明治三十年有三年子旧九月三日

下東町氏子中



観音祠 出町

三宝荒神社の祭は五月十七日十月十七日である。

古塘の観音さん 出町

間口二・一 m 奥行二 m の木造瓦葺の祠の中にある。

石祠 間口六五 cm 奥行七三 cm 寄棟唐破風軒（蛇の目の紋入）軒高七

二 cm

・石造観世音菩薩座像 丸彫 像高三九 cm 蓮華座高一五 cm

観音堂の世話をしている森下さんの話によると、昔からの言い伝えに、

観音様はここに流れつかれたものという。

石祠の軒の蛇の目から考えると、古塘を築堤された、清正公の遺徳を偲んで、勧請されたものではなからうか。



七夕地藏尊 出町

この観音さんの祭りは、一月十八日と八月十八日で、昔は八月十八日の夜を、古塘の夜灯<sup>よど</sup>と云って、露店が並び夜は近所の若者で賑った。

石像

七夕地藏 出町

間口一・五m 奥行二mの祠に安置スル

・石造地藏尊立像、丸彫、左持宝珠、右後補の施無畏印（元は持錫杖の遊行地藏？）

像高一・一七m 蓮華座高二二cm 台座四五cm

この地藏尊が「七夕地藏と呼ばれるのは、命日が七月七日で七夕の日であるからか、外の理由はわからない。元は本町の表通りに安置されていたが、道路拡張で裏へ移され、熊本中央信用金庫長洲支店建設のためまたこの地に移された地藏尊である。尊像は花こう岩である。

西荒神の地藏尊

間口 奥行とも一・二mの祠に安置

・石造地藏菩薩立像、丸彫 花こう岩 左持宝珠、右手失（持錫杖の遊行地藏と思われる。）像高八六cm

蓮華座高二〇cm 台石逆蓮華座共高四一cm 台石に左の文字を刻む

三界萬霊



地蔵祠 上今町



地蔵尊と金毘羅祠(後方)西荒神町

大浜町 圓供

地蔵尊の奥に船底光背形の一尊(高さ五〇cm)と、外に石仏一尊があるが、多分地蔵尊と思われるが仏名不詳。

命日は八月二十四日、この地蔵尊も航送船道路開通の際、ここに移動になったものである。金毘羅宮、恵比須神も一ヶ所にある。

上今町の地蔵尊

木造祠堂 間口奥行共九〇cm 基壇石垣高さ一二四cm、に安置する三体の地蔵尊である。

- ・石造地蔵尊立像(前) 丸彫、左宝珠、右手失 頭部後補 像高六五cm 蓮華座高一四cm
- ・石造地蔵尊立像(左後) 丸彫 合掌印 像高五二cm 蓮華座高一四cm
- ・石造地蔵尊立像(右後) 丸彫 持宝珠 像高四七cm 蓮華座台石高一九cm 右後の尊は砂岩で風化がひどい。

この三体の地蔵尊は、嘉永川や道路の拡張で度々移転して、その中の一体は破損がひどく、代りの新尊を祀って(左後)破損の旧尊像は、基壇の中に入れてあるという。

上宝町の地藏尊

・石造地藏尊立像 丸彫 持宝珠 像高五〇cm 尊像の傷みが目につく。台石の砂岩は風化が進んでいる。命日は四のつく都合のよい日に心ばかりのことをする。

二、清里地区の石祠 石像

石祠

稲荷神石祠 梅田 寺田昭之氏宅横

石祠 間口五〇cm 奥行四五cm 入母屋唐破風軒 軒高五一cm

稲荷大明神

明和九辰二月吉日

以上の刻字が、石室の奥壁にあるだけである。話によればむかしは、この石祠の横が道路であったという。明和九年は十月十六日から安永元年になる年で西紀一七七二年である。

石像

駅通りの地藏尊

間口一三〇cm 奥行七二cm の木造祠に安置

・石造地藏尊座像 船底光背形、浮彫、持宝珠 像高三七cm 蓮華座高九cm

横に地藏尊台石を祀る 台石高五〇cm 台石に

三界萬靈 宝曆癸申年十月吉日

干支の中に癸申はないので宝曆二年か三年かわからない。(西紀一七五二—三)

台石の横に、破損した宝塔の塔身が寝かせてある。

高瀬への往還から梅田への三又路で、塞の神の役目もあつたのではなからうか。

浜浦の地藏尊(ううきんどの地藏さん)

間口 奥行共九〇cmの木造小祠に安置する

●石造地藏尊座像 船底光背形 浮彫、像高三一cm 全高(台石迄五六cm) 台石に天保——十月—当村女

中と刻む

元は祠堂横の、通称本家屋敷、または加藤清正の蛇の目屋敷と呼ばれる石垣の中に安置されていた。すぐ



地蔵尊 浜浦

前が馬洗場(川入タンボ)で、夏になると子供達が、地藏尊を抱え出しては、洗ってやつたり、水中に沈めたりしては遊んだそうで、大人が子供たちを叱ると崇られるいう。子供好きの地藏尊である。

命日は八月二十四日、むかしは子供達が、「こまかばつてでけんよか」と唄い、地藏尊を抱えて回り、夜になると夜灯で賑った。「ううきんどの夜灯」である。

### 立山の地藏尊

間口、奥行各九五cmの木造小祠に安置

・石造地藏尊座像 船底光背形、浮彫、秘印像高二七cm 光背台座共一石、高五〇cm

この地藏尊の命日は、八月二十五日である。むかしの地藏祭の日には、立山の小学生たちが、この地藏尊を交代で抱いては「こまかばってん でけんよか」と、囃し回することは浜浦と同じであったが、ここでは、夜になると、子供達の自作の花火で楽しんだが、大正の中頃、製作中の花火が爆発して、幼ない命が失われる傷ましい事故が起き、その行事は止めになった。

いっちょ目の地藏尊 梅田

・石造地藏尊座像 丸彫 持宝珠 像高三四cm 頭部は後補

この地藏尊は、中山栄氏宅の後、コンクリート塀を区切って安置されている。中山氏の母堂、中山テキさん（明治三〇年生れ）が幼い頃、年寄りに聞かされた話に、昔ここには「いっちょ目（一ツ目）が出て人を威かすので、地藏さんを祀ったら、『いっちょ目』は出なくなったので、『いっちょよ目の地藏さんと呼ぶ』と教えて下さった。

ちちろの地藏尊 梅田

ブロック壁 間口一・五m 奥行一・二m高さ七〇cmに、コンクリートの平屋根の中に 地藏尊五体が安置されている。

・石造地藏尊立像 丸彫 頭部失 持宝珠 像高四四cm

- 石造地藏尊立像 丸彫 持宝珠 像高五七cm
- 石造地藏尊立像 丸彫 持宝珠 像高三八cm
- 石造地藏尊座像 丸彫 持宝珠
- 石造地藏尊立像 丸彫 横に寝せてある

後列の中の尊像が、元からここ安置されていた地藏尊で、他の四体は村内の他の場所から、移されたこの話である。

前記中山テキさんの話によると、ここの地藏尊は「ちちろの地藏さん」というそうで、夜ここを通ると「ちちろ」が足に巻付くので、地藏さんを祀った。それでむかしはちちろの地藏さんと、呼んでいたとの話である。ちちろとは、「ちちろこ」、又は「つちろこ」とも呼び、俵などを編む時に使う道具で、小縄を巻いて交互に取交して俵等を編んでゆくものである。

二宮八幡宮前の地藏尊 二体

- 石造地藏尊座像 船底光背形 淨彫 秘印、頭部失 像高四一cm 台石まで一石造り
  - 石造地藏尊立像 丸彫 持宝珠錫杖の遊行姿 頭部失 像高(肩まで)六一cm
- この二体は、県道から二宮八幡宮への参道、石段の南側土手にある。露座の地藏尊である。両像とも頭部がないのは残念である。記名も記年もないが、彫は立派である。

三、六栄地区の石祠 石像

石祠

上方うへがたの地藏尊 永方

石祠 間口一一五 cm 奥行七五 cm 寄棟造軒高七二 cm

・石造地藏尊立像 丸彫 持宝珠 延命地藏 頭部後補 像高五七 cm

・石造地藏尊立像 丸彫 持宝珠 延命地藏像高五九 cm 蓮華座高一二二 cm

年代等の記年記名もなく、勤請年代は不明である。むかし永方には「永方名物島の観音、上方地藏さん」と唄があったというから、この地藏尊も案外人気があり、それだけ信仰されていたのであろう。

場所は昔の長洲往還から、塩屋で分かれた野原への道と、葛輪こまを通って菰屋への道の分岐点であり、道しるべと塞の神の役目まで、背負っておられたのであろう。

ガラんさん 向野

石祠 間口五五 cm 奥行四三 cm 入母屋造 軒高六二 cm

基壇高一二〇 cm

石祠内に自然石を祀る

大正十三年四月五日 発起人 ガラん組、と石祠左側外に

刻む



地藏尊 永方



ガランさん 向野

今は亡い老婆から近所の人が聞いた話によると、昔ここは寺小屋であったが、明治の学制発布によって向野小学校が出来たので、師匠と呼ばれた先生は熊本へ移転された。後で向野小学校は永方小学校と合同して、ガランさんのあるこの地に六栄小学校が出来たが、やがて現在の地に移転した。その後突然、寺小屋の師匠が来て、此の地に仏様の夢を見たからと、小祠を建てられたが、それが古くなったので、大正十三

年に石祠と建替えたといわれる。

祭は五月四日、昔は筍飯の御馳走であったという。十二軒が祭組

若宮宮 赤崎古城下

石祠 間口三〇cm 奥行二八cm 入母屋唐破風軒 高五六cm 基壇高七四cm

大正八年五月二十五日 赤崎氏子中

・祭神 仁徳天皇

この石祠の傍の行末川で、子供の水難事故があったので、その供養と後に水難がないように建てられたものである。

四月二十五日に村の座祭りがある。

水神祠 高田平 大堤（狐谷）

- 石造地藏尊座像 船底光背形 浮彫 持念珠 像高四九 cm
- 石祠 間口六一 cm、奥行三三 cm 寄棟造 軒高七三 cm
- 行末の地藏尊 折地バス停横



水神祠 高田平



若宮さん 赤崎

石祠 間口五〇 cm 奥行四〇 cm 寄棟唐破風軒 軒高三五 cm 大正四年五月 宮崎進 三区ヨリ寄附

狐谷大堤は、天保七年に完成したもので、その時の荒尾手永の惣庄屋は、上益城郡甲佐の人で木原寿八郎であった。

この池の水で、赤崎 折地 腹赤三村の水田が潤されて早魃に泣くこともなくなった。広大な水田を潤す大変な水量だから、水難を恐れて水神を祀ったものと思われる。

加藤神社 行末塘

石祠 間口五七 cm 奥行四五 cm 入母屋

唐破風軒 軒高一 cm 基壇高五〇 cm

- 神像 石造清正公座像 像高二七 cm

行末の堤防（県道）は、清正公の築堤と言伝える。その威徳を偲び偉業を後世に伝えるために建立されたものであろう。祭りは七月二十三日。近所の人達が集まって行う。



地藏尊 塩屋



加藤神社 行末塘

三界萬靈

文政三庚辰歲

一月□□□□

氏講中

年代その他何もわからない。

石像

塩屋の地藏尊

産交塩屋バス停

木造小祠 間口一・五m 奥行一・六mの中に二体安置

・石造地藏尊立像 丸彫 持宝珠 頭部後補 像高五九cmの

延命地藏尊

・石造地藏尊立像 丸彫 持宝珠錫杖 頭部後補 像高六

〇cmの遊行地藏

石灯笼一对(一基は倒壊)にも 年代、奉納者の氏名もな

く 何もわからない。この地藏尊は、むかしは道路の反対側

にあったという話である。命日は一月十四日 近所の人が集

まり地藏さん籠こまりをする。

地藏尊

葛輪米井氏宅

・石造地藏尊座像 船底光背形 持宝珠 浮彫 全高四五cm



地蔵尊 葛輪

此の尊像は、米井氏宅の裏の三又路にあったのが、道路改修等により場所がなくなり、米井氏が引取り庭に安置されたものである。文政三年は西暦一八二〇年である。

向野アバウト前の地蔵尊

- ・石造地藏尊座像 船底光背形 浮彫 持経箱 像高二六cm 全高四八cm

以上が、農免道路の開通等で、三〇m程南へ移転している。昔は向野村の塞の神の役目もあつたであろう。年

代不明

古城団地の地蔵尊

- ・石造地藏尊立像 丸彫 持宝珠 頭部失 像高三四cm

団地開発以前は、上の方の小藪中の石祠にあつたが、今は団地公園内に、新造の地蔵尊と並んで安置されている。材質は天草砂岩、明治初期までの造像と思われる。石祠は新造地蔵尊の基壇に埋められた由である。

赤崎の地蔵尊

間口 奥行共二mの木造小祠に安置する。

- ・石造地藏尊立像 丸彫 合掌印 像高六〇cm 全高一二七cm

奉寄造 享保二十年三月 赤崎村中

と台石側面に刻まれているが正面の文字不明である。台石と尊像及び蓮華座の石質が違うので、年代に違いがあるかも知れない。

命日は四月二十四日、現在は何もしない。

折地松尾の地藏尊

間口一・二m 奥行一米の小祠に安置

・石造地藏尊座像 丸彫 持宝珠 像高四七cm 全高九〇cm

台座石横に……折地村————十三——とだけ読める。十三とは何か。もし年数であれば、十三年まである年号は天保、文化、宝暦、享保があり、果して何年前に勧請されたものであろうか。

近所の人に聞けば、風邪をひいた人、咳が止まらない人の参詣が多く、命日は四のつく日に年一回、近所の人が集まり、供養のお茶飲みをする。

また面白いことに、この尊像は、体は地藏尊で首から上は観音様らしい。聞けば頭がなかったので、誰かが他所から持ってきて、据えたとのことである。

四、腹赤地区の石祠 石像

石祠

新塘の若宮さん

石祠 間口七九cm 奥行六四cm 入母屋造軒高六七cm



新塘 若宮さん

• 祭神 仁徳天皇 祭日四月二十四日

昔この祭は、下平原の入口に露店が出て、子供達の楽しみの一つであった。

この祭の御祓を受けた御幣は、(水難封じのために) 村内の溜池、川、水路等に立てられる。

この石祠は、腹赤新町の富豪、松村家の子供が、ここで溺死したので、供養と水難除けに、明治の初めに建てられたという。

現在、前に消防署の分署がある。

寺下の恵比須神 清源寺

石祠 間口八二cm 奥行六五cm 入母屋唐破風軒 軒高八五cm

• 祭神 男神像二体 女神像持宝珠

御即位御大典記念

大正四年九月二十日建設 恵比須町氏子中建設者二十一人の氏名を台石に刻んである。

清源寺を縦貫して、この石祠前を通る県道は、大正二年に開通したというが、将来の繁栄を願ってか、恵比須町としたのも面白い。

古庄屋敷屋敷神 腹赤

高さ一m余の石垣基壇の上に 石祠三棟と石造不動明王を

安置する。

・石祠 間口六〇cm 奥行五〇cm 入母屋造 祭神 稻荷大明神

安政二年八月十四日

・石祠 間口四一cm 奥行一九cm 入母屋造 幣を祀る。奉納者 二氏名

・石祠 間口二四cm 奥行一九cm 入母屋唐破風軒 自然石を祀る 昭和十四年六月 奉納者氏名

・石造不動明王立像 像高四五cm 炎光背高サ七〇cm 建設者 氏名

中世からの土地の豪族であったという古庄氏の、屋敷跡といわれる高台の一隅、藪の中にあるが、石祠の北方は開田され、前方低地と共に藪に覆われて、下方には壕らしい跡も見られる。低地の一隅には、長洲町指定文化財の板碑「御腰の石」がある。

名石宮陸社跡 腹赤深田浦

石祠 間口 奥行共に四七cm 入母屋唐破風軒 基壇高サ一・四m

祠内に 御幣 自然石を祀る

昭和十一年十月二十八日建之 発起人三人の氏名を刻む

鳥居 明神形 昭和二十七年四月吉日

石柱 凝灰岩 高一・三m 一辺二五cm角

名石宮一千年記念碑

承平二年八月御出現発祥之地



陸社跡

昭和三年四月一日  
ここが名石宮発祥の地といわれる所である。

陸社の伝承は、神社の部「名石神社」を参照のこと。

名石神社の五十年毎の、御幸祭には、この地に御輿の渡御がある。

新川の若宮さん 上沖洲

石祠 間口四七cm 奥行三六cm 入母屋唐破風軒

・祭神 仁徳天皇

新川の港を守り、水難除けのため建立されたものという。古老の話には、「七・八十年前、この港で子供が水死したので、若宮さんを勧請したためにそれ以後子供の水難はない」とのことである。石祠の台石に、発起人その他十七人の氏名を刻んである。

石像

上の地蔵尊 かみ 平原神社前

間口一・二m 奥行一・二m・小祠に安置

・石造地藏尊座像 船底光背形 浮彫 持宝珠 像高四五cm

全高六〇cm

・石造地藏尊立像 船底光背形 浮彫 持宝珠 像高三五cm

台石高三〇cm

・石造弁財天立像 船底光背頭円光 浮彫 持宝珠 像高二九cm（観世音ともいう）  
 三体の石像の内、中央の尊像が一番古いと思われるが、台石に、三界萬霊とだけ刻記があり、年代その外は不明である。

隣家に火事があり後で見たら、一体の尊像が、火事の反対の方を向いておられたとの話もある。命日は正月と十月の二十四日、近所の人達が集り、供養をする。

外目の地藏尊 平原

四体あり、北から順番に

- ・石造地藏尊立像 丸彫 持宝珠 右手失 頭部後補 像高六七cm 台石高五七cm
  - ・石造地藏尊立像 丸彫 持宝珠錫杖 像高四六cm 台石高六〇cm 頭部後補
- 次の二体は近年の建立である。



若宮さん 新川

一番北側の尊像の台石に、三界萬霊 二番目の台石に、玉世界、当村氏子中 明治廿二年子二月吉日と刻み込まれている。この地藏尊の敷地には、戦時中まで大きな古榎ふるえがあった。その盛上った走根の間に、二体並んで安置してあったが、戦時中榎が枯れ伐採された後、そのまま同所に安置され、その後二体が勧請されたものである。命日は九月四日であったが、近年九月の四日に近い日曜日になった。



外目の地藏尊 平原

北の端の尊像は、寛政四年（一七九二）の大津波の際、この近くに住んでいた、郷士の堀部九右衛門という人が溺死して、椋に引掛かっていたので、その供養と津波の被害者の供養のために、椋の根に建立されたといわれている。

この堀部九右衛門は、当時の文化人で、寛政の津波の記録「両肥大変録」の著者と昵懇（じゅうこん）の間柄で、両肥大変録に次のように書いてある。

前略、平原村死人四十人 怪我人十人 流家三十五軒 流馬十疋 田畑塩浜等損処多し 此村内に堀部九右衛門と云在宅土有 自身より下人まで不残死す二男一人残る。此主人誂名を春秋庵具港と言へり。去年の後の月に彼の宅にて対座し其の夜の句に

来る汐に追ふつ別れつ後の月（以下略）

寛政の津波での死亡者は、日立造船清源寺独身寮の南西「五ツ墓」に埋められたという。

昔この地藏尊（椋のあった時代）には、柳の枝を編んだ胸掛が、よく掛けてあった。歯痛の時、柳の枝を二〇cmぐらいに切そろえ、自分の年令に一本加えて紐で編み、地藏さんの首にかけ、歯痛が止るようお願いすれば、歯痛が治るといっているので、時には二枚も三枚もかけてあった。

下の地藏尊 下平原清源寺境

間口一・二m 奥行一・八mの小祠に安置

石造地藏尊立像 丸彫 合掌印 像高五〇cm 台石高七三cm 台石に三界萬靈と刻む

建立年代不明 地藏の前面はむかし塩田であつた所、明治末の製塩禁止で、塩田を耕作地とするため、各個人が荷車で後方崩崎の赤土を運んだそうだが、この地藏尊は、浜干（塩作り）の辛さや、戦争のようだったという赤土運び、水田となった後の稲作の水踏（水車）作業、日立造船その他企業の進出、道路の交通地獄と六道輪廻とも思われる有様を具に見てこられ、人々の心を和らげてこられたものであろう。

むかえの地藏尊 清源寺竹本店裏

間口、奥行 八〇cmの木造小祠の中に安置

・石造地藏尊座像 丸彫 持宝珠の延命地藏尊 像高三五cm

建立年代不明。旧道の高瀬長洲の往還に面して、沖洲への別れ道であつたと聞く。掃除はゆきとどき、お花がいつもきれいである。

## 第五節 信仰石造物

仏教の発展とともに、寺堂が建ち、その境内その他に、石造の多宝塔や各種の供養塔が建てられたが、時代の推移とともに寺堂は廃れ、各種の石造物だけが野外の木陰や、草に埋れて、里人の信仰対象となったものもあるが、土や埃にまみれて顧りみられなくなり、果ては道普請の材料となる場合も多かった。

しかし、これらの石造物は、その地方における信仰、文化等、歴史の物的証拠である。

吾が長洲町には、これから記述する信仰石造物がある。



明德塔 下宝町

光正寺境内五輪塔地輪 宮崎 光正寺

一辺五二・五cmの正方形 高三六cm 同形二個 凝灰岩

四面に梵字 **𑖀** **𑖁** **𑖂** **𑖃** の四文字を葉研彫に彫りつけ、片方の **𑖃** の字の右上に、**𑖄** 和四年乙卯四月十日、左下に沙弥全 **𑖅** と彫ってある。これは五輪塔の地輪である。

信仰石造物の中で一番知られている五輪塔は、仏教の宇宙観を表現したものといわれ、空風火水地を形としたものといわれる。この五輪塔の東西南北のそれぞれの面は、東方が發心門、南方が修行門、西方が菩提門 北方が涅槃門という この空風火水地各部には 大日如來の真言である。 **𑖆** **𑖇** **𑖈** **𑖉** **𑖊** **𑖋** (以上東面發心門) を彫る遺品が多い。

近世以降、空風火水地と東面又は四面に、漢字で彫ってあるものもあり、また、「南無阿弥陀仏」や「妙法蓮華經」の文字を各部に彫るものもあるといわれるが、この地輪のように、四面にそれぞれの梵字を彫ることもある。

この二個の地輪は同形、梵字や葉研彫の様式まで同一であるので、双塔で夫婦の供養塔ではないかといわれている。

□和四年乙卯とは、正和四年(一三一五)で鎌倉末期、沙弥とは剃髪しても妻帯して、在家の生活をする者であり、下部が欠失して「全」のみで分らないが、これ程の五輪塔の双塔を供養する人であるから、多分土地の豪族と想像される。

ここの五輪塔の地輪は、長洲町で一番古い信仰石造遺物であり、この地に在ったといわれる、清源寺を解明する上からも大切な石造物である。

明徳塔 長洲下宝町

前幅横幅共七八cm、高サ一米余の基壇の上に、台石二段高サ二七cm、水輪と思われる石 経二〇cm、その上に欠損のある円形の石高サ二二cm

長洲町指定文化財である。明徳五輪塔との呼び方もあるが、五輪塔をなしてはいない。もとは宝塔ではなかったかと思われる。風化欠損して読みにくいが、台石の上部四面に刻字がある。詳細は中世の項参照のこと。

六地藏石幢 長洲下宝町（明徳塔と同所）

龍部<sup>がん</sup>高四八cm 中台はなく 竿石は不正形八角高サ一・六四m 周囲二・八米 笠上に請花 擬宝珠はな

い。

長洲町指定文化財の一つであり、また六地藏としては、長洲町唯一のものである。

六地藏とは、六道（地獄 餓鬼 修羅 畜生 人間 天上）

に苦しむ一切の衆生を済度するため、六体地藏尊が、それぞれの世界へ赴かれる姿ともいわれる。六体の地藏菩薩の持物、手印等、各々違うのもそのためとされる。



六地藏石幢 下宝町

六地藏は三叉路または墓地の入口などに安置され、道行く人や墓参者の手向が多い。亡者が六道輪廻の苦界に呻吟しているのを、現存者の供養によって救済しようとするもので、庶民信仰の著しいものである。

この六地藏幢の笠の裏側（下）の、東北の隅から北、西、東にかけて、

享保八稔 正月吉日 長洲町中 庄屋久兵衛

と刻んである。庄屋の久兵衛という人を中心に、長洲町の人達が建てたものである。

享保八年は西暦一七三三年である。

信定寺角塔婆 永方信定寺境内墓地

碑高一・四m 前後面三八cm 横面三三cm

碑面 東面

講衆名多数 講習全施主

○刻字風化不 遠求之転円満妙果

鮮名 省略 預修七部全得善因

文明龍集甲辰十六年暢月日謹立

南面

千百億化身釈迦牟尼仏

西面



信定寺角塔婆 永方

法号釈姓大信俗名築地蔵之巫之墓

當来下生弥勒尊仏

文禄二年癸巳年三月二十五日没

この碑石は、東面、南面と、北面の當来下生弥勒尊仏、の文字だけが最初の刻字で、文明十六年（一四八四）十一月に建立されたものである。東面上部の○は、中に種子（梵字）を朱か墨で書いたのが、多年の歳月で消失したと思われる、その下にこの石塔を建てた人達（講衆施主）多数の名が刻んであるが、風化のため刻字が不鮮明である。その下に、講習（衆）全施主、遠求転円満妙集、預修七部全得善因と刻む。

預修とは逆修と同じで、自分の死後の供養を自分がすること、供養の功德が全部自分に返るといふ。刻字の意味は、「塔婆建立の全施主は、塔婆建立を善因として、没後の成仏が約束される、」ということと思われる。

我祖貫行裔山城八幡宮別當紀清賢子国隆天徳中下于

當国領大野住于山田高岡應和中葉根木宮国隆勸請也

国隆二男築地蔵人国秀裔清尚俗名兵□於金山原戦死

其子築地蔵之巫逃于肥前後帰住于當地蔵之巫者我

父也

慶長九年甲辰二月 釈禪念記之

北面



御腰掛の石板碑

南面 千百億化身釈迦牟尼仏は、信仰する釈迦仏は身を千百億に化身して衆生を救われるという。  
 北面の当来下生弥勒尊仏とは、釈迦仏が涅槃に入ってから、五十六億七千万年の後、此の世に必ず下生される仏、弥勒菩薩のことで、現在兜卒天の内院で、天人のために説法しておられる弥勒菩薩が、如来になって人間世界に下生して、衆生をお救い下さるといふ弥勒下生信仰である。

当来下生弥勒尊仏の左右に刻まれている。法号釈姓大信俗名築地蔵之亟墓と文禄二癸巳年三月二十五日没は追刻である。この塔婆を、文禄二年（一五九三）に死亡した当寺の先祖築地蔵之亟の墓としたもので、これが第一の追刻である。

西面、我祖貫行に始まり、慶長九甲辰年二月釈禪念記之 まで全部第二の追刻である。  
 この刻文は当寺の先祖のことを記したもので、詳細は中世の 大野氏の項参照のこと。

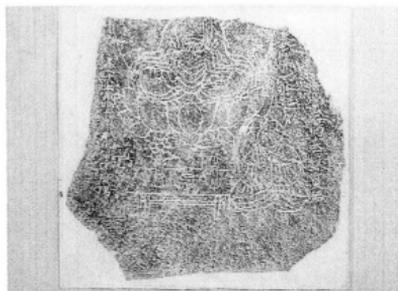
御腰の石板碑 腹赤 古庄屋敷

碑高九四cm 碑幅 頭部三九cm 脚部九九・五cmの不整三角形 安山岩 自然石

碑面中央に右向持錫杖の地藏尊立像を線刻し 右端に在銘  
 千時享禄二乙丑天八月彼岸如意日

仏師周養

像下の小円相中の人名らしい刻字は 風化して読めないが  
 施主名であろう。結（講）衆多数と思われる。逆修の字は読



阿弥陀堂板碑



阿弥陀堂板碑縮図

めるが、他は風化が甚しく少数の字が読めるだけである。  
 長洲町指定文化財であり、傍に五輪塔の残欠が三・四組分積み重ねてある。

仏師周養その他。この碑については、中世の項参照のこと。

阿弥陀堂板碑 向野七社宮前

自然石 碑高五二・四cm 幅五四cm 安山岩

木像阿弥陀尊像の横に置かれているが、碑石の上部が欠損して、線刻された尊像の肩以上が失われている。

碑面に陰刻の図像は、蓮華座上に結跏扶座する、上品上生印の阿弥陀仏で、仏前に「花香灯」の三具足を供え、その傍に僧形の人物が刻まれている、図像を挟んで

当庵開基行尊大徳

養石仏一鉢逆修

不明  
 □ □

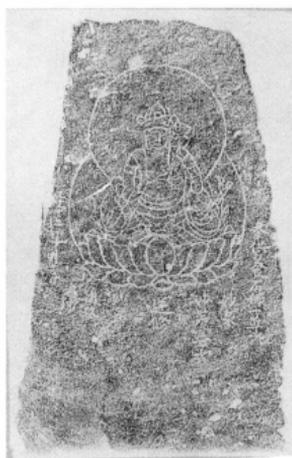
妙範

天文十五年丙午十月吉日 仏師周陽

と刻記されているが、上部の欠失が惜しまれる。養石仏一鉢の、養の字



観音板碑の縮図



観音板碑 赤崎

の上に「奉供」とあったと考えれば、「奉供養石仏一躰逆修」で、僧形合掌の人物は刻字からみて、開基行尊という僧であろう。それで阿弥陀仏と開基行尊の像を掲げて、合せ供養するとともに、□□と妙範両人の逆修の祈願もしたものと思われる。

天文十五年（一五四六）といえば、地頭職小代氏は豊後の大友氏の麾下で奮闘中で、後七年もすれば、肥前の龍造寺氏の進攻が始まるのであるが、その頃当地の住民や豪族は、光鎮寺、七社宮等の神仏に帰依して、こうした祈願をしたものであろう。

天文十五年に開基の供養をすることで、光鎮寺の創建は天文以前、永正頃まで溯ぼるのではなからうか。

また『国郡一統志』に、光鎮寺とあるから、光鎮寺は寛文年間以後、江戸時代の中期頃まであったものと思われる。

地藏堂の観音板碑と一字一石塔並に石造 地藏尊

赤崎

碑高六四 cm 幅上部二四 cm 下部三二 cm 安山岩 自然石

図像は蓮華座上の聖観音像を二重円光の中に描く、像下に銘文がある。

奉供養石仏一尊

妙泉

妙芳善女

逆修

妙貞

道玖

不明



地蔵堂と一字一石塔

天文十五年丙午十月吉日

この板碑は、赤崎と向野の境にある。間口一・七m 奥行一・九mの祠に石造地藏尊とともに安置してある。

造立供養年月が、向野の板碑と同一で、供養者は女が多い。作者銘はな  
いが刻蹟からみて、向野の板碑と全く同手と思われ、周養（陽）の作と考  
證されている。

土地の人はフシアン寺の観音さんと呼ぶが、フシアン寺とは、どんな字  
を書くのか分らないが、光鎮寺の塔頭（たとう）（庵）ではなかったかと思われる。

・ 一字一石塔

塔高六〇cm

台座台石高二三cm

八角で一辺一二・五cm



葛輪の宝塔と石祠

普門品一字一石塔

為大願成就建立

折地住 宮崎彦九郎

一字一石塔とは、小石一つに一字づつ経文を書いて供養し、その石を全部土に埋め、その上に石塔を建てたものである。

普門品は、妙法蓮華經（法華經）の中の経文で、觀世音菩薩の功德を、経文に表したものである。

この石塔は祠堂の東方数mの所にあるが、周囲の開田以前は、祠堂の後の竹藪の中に在ったのを、開田時に

現在地に移したという。

祠堂内石像

石像地藏尊座像 持宝珠 像高三三三 cm

地藏尊の横に自然石を祀る

この小祠は、現在地の西側一〇mの所に在り、隅の方に大きな松の木があり静かな所であつたが、周囲の開田の際、現在地へ移され、松の木は松食虫で枯れて切られたという。

葛輪の宝塔 葛輪 徳永一二氏宅前

塔身高四五 cm 首高七 cm 笠高二三 cm 露盤・相輪失・五輪塔の空・風輪を載せる。

塔身には枠の中に、種子(梵字) **𑖀𑖳𑖞𑖻** (多宝如来) と **𑖀𑖳𑖞𑖻** (釈迦如来) を薬研彫りに彫つてあるが、**𑖀𑖳𑖞𑖻**の方は削られたのか、梵字もだいぶ消えかけ、塔身も少し変形している。

宝塔は多宝塔ともいわれ、法華経の見宝塔品から出たものという。釈迦如来が靈鷲山で法華経を説いた時、地下から忽然と宝塔が湧出して、塔の中から多宝如来が、釈迦如来の説法を讃嘆して、釈迦如来を塔中に招き入れ、併座したとある。

この宝塔は室町時代のものと考證されているが、年代も供養者の名もない。

宝塔の横に石祠があり、石像を安置する。

・石祠 間口五五cm 奥行二一cm 入母屋唐破風軒 軒高六〇cm

安置する石仏は、船底光背形(上部欠失)尊体が風化して、尊名は判断しにくい。他に五輪塔の火輪空風輪等の残欠がある。

『肥後国誌』に、永方村には福専寺跡、宗旨不分明一堂に観音を安ず、観音堂、阿弥陀堂、地藏堂と書いてある。この福専寺が、葛輪のこの一帯にあつたと思われる。

阿弥陀堂は「あみださん」の愛称で呼ばれていたが、現在は跡に公民館が建つている。本尊の阿弥陀如来像は、公民館に安置されているが、もう仏の役目を了えられたように、形もさだかでなく内刳も無慙に、唯の木塊に過ぎないようであるが、上品下生(施無畏与願印)らしい形だけは残っている。蓮華座は後作。

観音堂は、公民館から水田を隔てた、南方やや東寄り永方からの入口あたりにあつたと聞かすが今はなく、観音像だけは、永方の宮野久子さんが祀っておられる。



折地天満宮板碑



いぼ石さん板碑 名石宮

観音像は 木像 頭円光背 座像 像高蓮華座まで三六cm 右手持蓮華左手与願印の聖観音で、彩色が剝落しかけているが、室町時代の作と考證されている。

地藏堂については、知る人はいない。

公民館に阿弥陀仏と並んで、合掌印の聖観音像があるが、大正以降の作という。

いぼ石さん板碑 上沖洲名石宮境内

基壇 間口三m 奥行三m 高七八cm の上にブロック塀高一mの中央

に祀る

碑高六〇cm 幅四〇cm 碑面上部に○を陰刻 逆修碑で、妙杏善尼、道

林善門、妙林善尼と、三人の名を陰刻して

弘治三年四月三日建立とあったが今は上部二一三字を残して、コンクリートで固めてある

享祿三年（一五三〇）深田浦の陸社の火災後二七年の、弘治三年（一五五七）に板碑が建てられているから、海を渡つての参拝、碑の建立であったと思われる。

現在は「いぼ」を治して下さるとの信仰から、いぼ石さん

と敬まわれている。

折地天満宮の板碑

天満宮社殿東側碑高七五cm 幅下部三八cm 安山岩

○当知此意心逆修一翁俊禪師寿位

上部の円の直径は一三cm、円内に種子しゅじ(梵字)はなく、碑の建立年月も見当らない。



ぼたもちさん

ぼたもちさん 腹赤小野四郎山

基壇 高九三cm 直径二・四mの円形を厚味二六cmの切石  
で築き、中に土を詰めて楚石を置き その上に四ツ足の台  
石 台石の上に 墓石

高九〇cm 下幅六〇cm 上幅五二cm の正面に

光照院殿泉誉良清大姉靈儀

慶長七年壬寅十月十七日

と彫り 墓石の上に 下部直径二五cm 上部直径六二cmの

半球形の石を置き 上に直径一m 厚味三六cmの丸石を載せてある。

その形から、「ぼたもちさん」と呼ぶのであろう。珍しい墓石である。無縫塔の一種であろうか。

これは、筑後下三郡柳川城主 立花宗茂の奥方 閨きん(吟) 千代夫人の墓石である。

長洲町指定文化財の一つであるが、この墓石の詳細な説明は 近世の項を参照のこと

### 腹赤宝篋印塔 腹赤天満宮境内

塔高 二・五m

長洲町唯一の宝篋印塔である。一度倒壊したのを、積み直したものと思われる。

我が国では、平安末期から鎌倉時代になって石造宝篋印塔が盛に造立されるようになった。末法思想の拡がりにつれて、人心は動揺して、死後成仏を得たいと、造仏、写経、さらに造塔による善根功德の業が盛んであった。数ある石造の造塔形式の中でも、仏教の万物構成の要素である。地、水、火、風、空をかたどる五輪塔が一般的であったが、宝篋印塔なども多く建造された。

宝篋印塔も、平安・鎌倉時代から、江戸時代末期まで、時代により所により、姿・形なども変わってくるが、江戸中期以降の肥後形の宝篋印塔は、下から順に、格狭間のついた基壇（当所のは格狭間なく二段式）その上に願主などを彫る基楚、その上に台座、台座の上に塔身がある。塔身には願文を彫り、宝篋印陀羅經を書いた経文を入れたり、という宝篋印陀羅經の梵字を彫る。塔身の上に敷茄子、蓮華座と重なり、蓮華座の上に塔心が載る。塔心の四方には四仏の梵字（ここでは金剛界四仏）を彫る。塔心の上に角飾りの付いた笠石、その上に露盤、相輪となるのであるが、こゝでは相輪が失なわれている。

塔心の金剛界四仏の梵字も、東方に（阿閼如来）南方（宝生如来）西方（無量寿如来）北方（不空成就如来）であるが、この塔心はが北方をが南方を向く。

この宝篋印塔には塔身がないが、壊れた塔身と思われる石片が、塔の北側に寄せられている。破片には、



石造仁王像



宝篋印塔

世話人その他の人名十八人を刻み  
天保六年<sup>ひつじ</sup>未二月吉日と記刻する。

天下泰、能於此 香一花 生死 一時消滅 生浄土 禮拜  
供養などの文字と、宝篋印陀羅尼の種子も読みとれる。

基礎には

五穀成就 本願主 萬五良

奉納大乘報典経旦朝回国 のわ

国家安穩 くに

協願主 熊本 太吉

この宝篋印塔は、本願主萬五郎・のわ・くにの三人が回国巡礼して、無事に帰国。天保六年（一八三五）に建立されたものと思われる。しかも神社に建てたということとは、寺は浄土真宗の寺院だけで、建てられなかったのと、神仏混淆の時代であったからと思われる。また人名の後半は追刻のようである。

石造仁王像 清源寺天満宮境内

阿吽両像共 像高二・一五m 肩幅八五cm

奉寄進 昭和十一年三月建之



流死供養塔 上沖洲新川

外に発起人及び賛同者二十七人の姓名を刻む

仁王さん、または金剛力士ともいわれるが、口を開いた阿形を「密迹金剛」みつせきんごう、口を閉じた吽形を「那羅延金剛」ならえんごうとよばれるが、本来は一体の像の分身だといわれる。

筋肉隆々とした上半身を裸出して、手に金剛杵を持った忿怒形で、仏法を守護する仏神であったが、神仏混淆の時代には神社の楼門前等に建てられた。玉名市繁根木八幡、伊倉南八幡、梅林天満宮などの石造仁王像がそれである。それが明治初年の神仏判然令（廃仏毀釈）によって、神社内の石造仁王像などは、取除かれた所が多かったと聞くが、こゝでは昭和十一年の造立であるから、時の流れということが感じられる。

仁王像は健康の象徴とされ、口中で咬んだ紙片を、仁王像に投げつけて、自分の患部に相当する所に貼り付くと、願が叶うという俗信もあるが、ここではなされていない。健康を象徴するためか、大きな草鞋わらじを奉納してある所も見うける。

流死供養塔 上沖洲新川

塔高一・二五m 幅三三cm角

南無妙法蓮華經 流死供養塔

維時文化五戊辰歳四月朔日

京都 菱屋佐七

この供養塔は、旧石造井樋橋の途中に建てられていたが、橋が架替えられた時、現在地へ移されたものという。



松尾家碑 四王子境内

この碑により、新川の港が一八〇年以前から交易の場であったことがわかる。積出した荷は勿論「塩」であつたろうが、積んで来た品は薪炭の外何であつたろうか。

この港が繁栄していたことは、名石神社に安政五年（一八五八）奉納の狛犬にも、明神丸、吉祥丸など読みとれるだけでも七隻の船名のある奉納者のあることと、思い合わせて、製塩に従事する人が多かつたことがわかる。

また明治十年の西南の役の際、この港に上陸した鎮台の将兵が、この港、新川を「死川」にダブらせて落胆したという話が残っている。

## 第六節 記念碑・頌徳碑・其の他の碑石

### 松尾家碑

所在地 長洲四王子神社境内

碑高 一・八五 m 幅六八 cm 自然石

碑文

宝曆九年 府下義倉事於 邦内也長洲方徴土木邑人次右衛

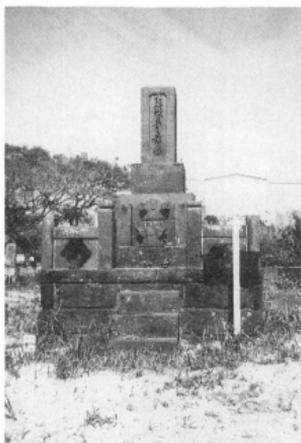
門松尾氏豎私倉助其役 府善其意蜀益免産靈四王子祠堂地

一區七畝之稅蓋以次右衛門父又左衛門嘗有告乞蜀益稅安神

也銘曰



暴風遭難溺死者の碑 新山墓地



古墳改葬碑 新山墓地

惟父齋志 子能遂思  
四靈安享 五福如期  
松尾氏のことについては、近世編松尾氏の項を参照されたい。  
草埜雲 書  
松尾常成立

碑文の上に、梅鉢の紋形が浮彫りにしてある。

#### 古墳改葬碑

所在地 長洲町新山墓地

碑全高 三・七二m 碑石高サ一・二五m 前幅 四八cm

横幅 四五cm

長洲町指定文化財。

寛政四年（一七五二）閏四月朔日の大津波の被害者は、長

洲町下二丁目の墓地に埋葬した（寛政の津波は近世の項参照）が、その後、明治四十五年、現新山墓地に移転改葬され、昭和十四年に、磯田大吉、メイ夫妻が私財を投じて、この碑を建立されたものである。（詳しくは近世編 近代編参照されたい）

#### 暴風遭難溺死者之碑

所在地 長洲町新山墓地



救援隊遭難碑 新山墓地

碑石 石積式六角 高三・七五 m 碑石底部一辺六一 cm  
 台石 六角 一辺一・一七 m 高サ 五五 cm  
 基壇 六角 一辺一・七二 m 高サ 一 m  
 敷地 七八平方 m

暴風遭難溺死者之碑 と彫り、基壇上部横に、町別に遭難者三二人の氏名を刻んである。

長洲町指定文化財で、明治二十六年十月十四日の長洲漁民遭難者の供養碑である。(詳細は近代編参照されたい)

敷地内に、碑移転説明碑がある。また移転前の場所に、月田道脉選并書、自然石の遭難供養碑が残っている。

#### 救援隊遭難碑

所在地 長洲新山墓地

碑高 一・五 m 自然石、基壇 高サ一・九 m 全高三・八五 m

長洲町指定文化財。

明治二十八年旧六月二日、出漁中に突風が吹き荒れたので、救助隊が出たが、力及ばず漁民とともに殉死した。(碑文及び解説は、近代編参照されたい)



安東清人記念碑田王子宮

安東清人記念碑

所在地 四王子神社境内

碑高 一・八七m 幅 一・三m 自然石

碑文

安東清人君記念碑（以上篆書）

君諱清人安東氏世仕細川家父俊文為藩物頭母内田氏君以安政元年四月六日生於肥後国玉名郡長洲年甫十歲能誦春秋及

び長入藩時習館就竹添木下諸氏修經學明治元年撰為居寮生三年擧貢進生入東京大学南校修獨逸語後開成學校給費生八年官命留學於獨逸国入晋来保大学專攻鉞山學不幸患肺十年九月婦朝十三年病稍間出仕文部省無機任權少書記官敍正七位攝官立學校務局副長之職十八年進少書記官敍從六位此歲病再發乞婦鄉養生然夫不候之年明治十九年九月十七日遂歿享年三十三先是君娶大島氏先歿無子弟真人收遺骸葬於長洲先塋之側君為人質直寡文臨遺言吾死勿為樹碑蓋深惡諛墓之毀也友人為有募記念勸學費者然子等與君為同窓之友親最善痛悼不能措特相議建石銘曰

學成名著 同人稱質 造花如才 不假之年

哀惜之餘 建碑以伝 遺言在耳 不遑顧焉

二品大勲位能久親王家額

一正三位勲二等子爵品川弥二郎撰

高橋健三書

裏面には 義損金者氏名として二七人の氏名と、天草郡下浦の碑を彫った人の氏名が彫つてある。  
郷土人に、その将来を囑望されながら夭折した、安東清人の記念碑である。安東清人については、近代編  
明治の章、安東清人の項を参照されたい。

碑文上部の題字（篆書）は、北白川宮能久親王の筆になるものであり、碑文は品川弥二郎の撰になるものである。

安東清人の墓は、正善寺墓地（現長洲小学校附近）にあったが、後で新山墓地に移され、この碑石も、元の正善寺境内から、四王子神社境内へ移されたものという。

## 新塘復旧記念碑

所在地 大明神 洲崎神社西新塘

碑高 二・四 m 幅七〇 cm 自然石 台石高四三 cm 基壇高サ二 m 余（円筒形）

碑文 新塘修復改造碑文

夫玉名郡岱西沿有明海有一町三村在日長洲腹赤清里六榮也從來保育於田畑則以新堤久矣從今參百年前封加藤氏以肥後国而至於細川氏之時將為得設墾田則以所使新堤築者也則延長壹千貳百拾余間約面積貳百拾五町步余用之以農業而年々歲々其業至於盛大所謂新堤其物之恩澤也而物換星移為廢藩置県則至其修復悉為地方負担也時大正八年八月種颶風襲來怒濤狂瀾隔於破壞不幸貳拾有九所加之長壹百八拾余間也其損害多々也故為復活計画憤然県且郡吏與士民決干議遂以仰於県庁得補助資猶向内務大藏兩省為得巨額之資得起債認可故

振興干修復改造之大工事則從大正九年四月乃至同年末月告竣工之曉焉此為功績也虽県官且郡吏之出於至誠抑亦地方士民之至誠憤勵之結果也依為紀念之建碑焉

銘日 五風十雨 千田千畝 滿穗穰々

更生利用 子孫百世 天祿永琿

大正九年庚申初冬

松尾常瀨 撰

松隈龜太郎 題字

松田五郎 書

工事設計者 土木管區庁 泉野正次

玉名郡書記 田尻喜三郎

大正三年八月二十五日に台風襲來。新塘も所々決壊し、清源寺では西の塘が破壊して、田畑に被害を蒙むり流家の災難もあつた。

大正八年八月十六日台風で、二、三〇〇m余の新塘が、二九ヶ所一、〇〇〇m余にわたり決壊切断され、その被害は甚大なものであつた。(新塘の塘長については多少の異がある)

この新塘復旧工事には、熊本県や玉名郡役所の助力、また内務省、大藏省に補助及び出資を仰いだ、不足の分は多大な起債により、その費用に充てたのである。

修復工事は、突貫作業で進められ、大正九年末には竣工し、この碑が建てられたのである。

その後新塘掛の地主は、起債の元利の返済に苦しんだという。

### 松崎先生頌徳碑

所在地 長洲小学校内

碑高 二・三 m 幅(最大) 一 m 自然石 台石 四〇 cm 基壇高サ 一・三 m  
碑文

### 松崎先生頌徳碑

嗚呼我が長洲町民敬仰の中心をなくす徳教の上に偉大なる感化を与えられつゝ、あつた松崎亀次郎先生には囊に病の故を以て教職を退かれ専ら静養に努められしも遂に其の効なく大正十二年十月十三日六十五歳を以て没せられた。



耕地整理記念碑

顧みれば先生の始めに長洲校に職を奉ぜられしは遠く明治十六年五月であつて爾來四十年その間において他校に転ぜられたが三十余年の長年月身に積る老を忘れて一意長洲町育英の事に盡された其恩徳と功績とを考え之を謝するの辞にも窮する程である。

思えば現今本町民の中にて直接間接に先生の教を受けないものは殆どなく言はば先生は実に我が長洲町の恩人である。されは茲に先生の薫陶を受けし数ある子弟で先生の恩徳を永遠に頌すべく本碑を建立したのである。



満田先生頌徳碑

幸にして本碑が将来子弟教養の為ともならば之亦先生の余徳の然らしむところである。

大正十三年四月 門下生一同

碑は長洲小学校の正門から進んで左側、榎の大樹の下に建っている。

碑石には上から、

松崎先生頌徳碑、と大書し、下方に縦三四cm、横五三cmに、碑文が二一行に刻んである。

耕地整理記念碑

所在地 長洲中央公民館東南角

碑高 一・五m 幅(最大) 七五cm 自然石 台石高サ 四五cm 基壇高サ 一・二m

碑面

耕地整理記念碑

台石に

明治四十二年 八月三十一日認可

創立委員発起者その他 十八人の氏名を刻記してある。

満田先生頌徳碑

所在地 長洲駅通梅田三叉路南側

碑高 二・三m 幅(最大) 六〇cm 自然石 台石上下

段高サ 五九cm



関忠之允の墓碑

碑文

満田先生頌德碑

高浜尋常小学校訓導兼校長満田武男先生之門生等建碑而頌  
先生德爰經營之成焉蓋先生熊本県土族而住当村梅田才学豊  
富家計亦裕也明治七年被舉奉職於本校尔来孜孜膺毓英之任  
奮勉從事者二十有八年干茲門下生数実一千人矣亦可不謂成  
哉此之世齷齪利禄維徼輾轉变其位者真懸隔不啻霄壤也碑遠

負小代山近臨有明海而其れ高矣其海深矣是可以視先生之大德鴻恩耶茲祝先生之健康併祈其子孫之多謹刻の  
石時方盛春櫻花争發天真爛漫亦如以表門生諸子之赤誠詩云教育兒童極小心言言語語總推忱先生恩德人如問  
遡漠有明海萬尋  
飯島員俊識

明治三十四年四月七碑建設

駅通りから梅田への三叉路の南側にあるが、行き交う車の埃にまみれて、気付かずに通り過ぎる人が多い。  
満田武男先生は、明治七年（一八七四）以来自宅で、子弟の教育に当って居たが、明治十年に、高浜・梅  
田合同の、高梅小学校ができ、主任として教職に当り、明治三十五年の小学校令に基き、高浜尋常小学校の  
校長になり、同三十六年に長洲女子尋常小学校に転任された。

関忠之允の墓碑

所在地 腹赤新町 関家墓地



古川弥藤次頌徳碑 沖洲

墓碑 全高二・三八m 笠石上に擬宝珠（欠損）

関忠之允惟忠之墓

萬延元稔申八月十四日終

惣庄屋として、幾多の事蹟を残した。関忠之允の永眠の標である。

関忠之允の、出自、事蹟その他については近世編、関忠之

允の項参照されたい。

関家は、明治末になって、腹赤新町から、宮崎の地へ居住を変えられた。

### 古川弥藤次頌徳碑

所在地 上沖洲 古川邸前十字路口

碑高 一・七m 幅（最大）六四cm 自然石

台石高サ 二〇cm 基壇石垣高サ 一・一三m

碑文

頌徳

古川弥藤次先生長洲町馬場泉氏の二男にして弘化四年二月四日誕生せらる萬延元年古川弥七氏の養子嗣となられたり幼にして小山先生の門に入て漢学を修めらる明治元年四月当藩主より皇城守護兵を命ぜられ翌五月奥州征伐の軍に従はせられたり師は慶應年間より村内子弟を集められ懇切に教育せられしゆゑ小学校

令公布後引続き上沖洲小学校教員を奉ぜらる町村制実施に際し腹赤村助役になられ三十三年同村長の名譽を擔はる門人等一同師の高徳を永延に記する為めこゝにこの碑を建てることゝなせり

裏面

大正三年五月建設

發起人 四七人 この内には、男女、他市町村の在住者もふくまれている。(裏面)

古川弥藤次は、本町で唯一人の戊辰の役の体験者で、奥羽征討の軍にも参加された人である。その後碑文にもあるとおり、腹赤村助役、同村長等も歴任された人である。

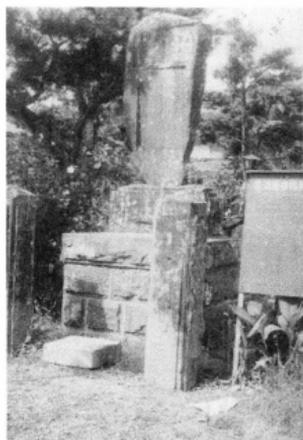
### 岡村とく子頌徳碑

所在地 腹赤新町県道沿

碑高 一・七m 幅 七八cm 自然石 台石高 四五cm 基壇 石垣高 一m余

### 頌徳

岡村と久子刀自は奉公の念最も厚く夙に愛国婦人会の趣旨に賛し東奔西走して會員の勧誘に努む偶日露戦役起るや婦人報国の機到れりとなし一身を捧げて軍事後援に奉仕す殊に出征の將士を長洲駅頭に送迎して士気を鼓舞さるること三百餘回傷病兵を衛戍病院に訪れて其の勞を犒ふこと亦二十餘回更に多大の私財を贈りては軍人遺族慰藉に努め出征



岡村とく子頌徳碑

軍人をして後顧の憂なからしむる等其の至慈到らざるなし戦後其の功により金杯一個を賜はる大正十三年七月十八日年六十九歳を以て逝去郷黨慈母を失うが如く之を惜む今日日露戦役三十年記念に際し日清日露の戦役に従ひたる軍人にして刀自の恩顧を蒙りたる者及愛国婦人会員其の他有志相計り頌徳碑を建設して刀自の恩に報ひ且其の偉徳を後世に遺さんとす  
冀くは後人永へに之を仰ぎ見んことを

昭和十年四月建設 在郷軍人有志一同

#### 安達謙藏書

岡村とく子は、腹赤新町で、岡村一族の岡村喜加久の夫人で、前熊本女子大学学長の、岡村一郎氏の祖母に当たる人である。愛国の念厚く行動的な人であったという。

#### 耕地整理記念碑

所在地 清源寺前塘十字路

碑高 一・七四 m 幅(最大) 八二 cm 自然石台石高サ 三〇 cm 基壇石垣高サ一・一五 m

#### 記念

清源寺耕地整理地域ハ往古一面ノ碧海タリ安政四年新地ヲ築キテ塩田トナシ萬延文久ノ頃経幾多改良ヲ加ヘ生産年額貳萬參千餘石ヲ算スルニ至レリ明治參拾八年官業塩專賣ノ実施トナリ越エテ同四拾四年製塩業ノ禁止トナリ共ニ一朝ニシテ荒蕪の悲運ニ際会セリ是ニ於テ整地ノ議起リ村長田代休馬組合長西岡安太郎及役員等の斡旋ニ因リ萬難ヲ排シテ遂ニ企業ノ議成リ地主百九名一致協力シテ大正貳年參月工ヲ起シ總面

積參拾六町餘歩ヲ得九月換地ヲ了へ同參年甫メテ稲ノ穰々タルヲ見ルニ至レリ則チ刻シテ以後昆ニ記念ス—云爾

大正八年參月

台石に、組合長役員十六人の氏名を記刻。

この塩田跡の耕地整理には幾多の困難があつた。第一に水田の用水である。夏の降雨の少ない当地としては、新しい水田の用水の余裕はなく、幾度となく繰返された陳情により、遠く菊池川の迫間用水はさまを利用することになったが、「稲が枯死寸前になつても水が来ないこともあり、耕作者一同が鋤、鎌を持って押掛けるという一揆まがいのこともあつた」と、清源寺の作本好司氏は語っておられる。その他開田に必要な客土等、苦勞の連続であつたという。

古老の話では、大正三年の秋には、稲の収穫の喜びを味わつたのであるが、前塘以西の、遠見下、塘添等の地は、八月二十五日の台風高潮の被害が大きく、流家の災難に見舞われ、収穫は皆無であつたという。

#### 姫ヶ浦の記念碑

所在地 大字清源寺字浜口

高さ一・三六mの基壇の上に二基の記念碑が並び建つ。

南側

碑高 二・三八m 前幅 七〇cm 横幅 五六cm 台石高



耕地整理記念碑清源寺前塘

北側

碑高 二・一 m 前幅六七浬 横幅六・三 cm

碑面

日露

戦役 記念林

愛国婦人会長 公爵夫人 岩倉久子書

台石に

愛国婦人会 腹赤 鍋 六栄三個村

会員四百六十名



日露戦没記念碑（姫ヶ浦）

サ四三 cm 台石共全部花こう岩

碑面 正面

日露戦役記念碑

海軍大將東郷平八郎書

側面

表記併松林造

玉名郡腹赤村

明治三十九年十月建設

台石高サ四三 cm 碑石台石共花こう岩

建設発起人 幹事 六人の女性の氏名を記刻する。

建てられた当時は、廣々とした白砂の上であったが、海水の浸蝕のために、幾度か場所を変え、当時植えられた松も、申し訳程度に残っている。

一本木記念碑

所在地 清源寺一本木

碑高 一・三m 幅(最大) 四五cm 自然石 基壇 自然石積石、高サ九〇cm

碑文

景行天皇 一本木

御上陸地

畏くも人皇第十二代景行天皇には一天萬乗の尊き御身を以つて御親ら熊襲を征せられ還御の御船を<sup>廣</sup>□<sub>赤</sub>の

地に泊せられ給う

然して此の地に御上陸□<sup>廣</sup>の供御をきこし召されしに其の後に一本のタブの大樹生じたりと伝えて一本木という。

このほまれを永く伝えて俤ばん為茲に皇紀二千六百年を迎うるに当記念として之を建つ。

昭和十五年二月十一日

大女地藏組



一本木記念碑



宮原喜次郎頌徳碑

昭和十五年、紀元二千六百年記念に建てられたもので、昔、この碑の東の台地に、タブの大樹があったといい、一本木の地名が残っている。

宮原喜次郎頌徳碑

所在地 向野宮原春衛氏邸

碑高 一・九七m 幅 六三cm 花こう岩自然石 台石高

四五cm 基壇高一・〇五m

碑文

頌徳碑

君宮原氏称喜次郎父源平母硯川氏也叙勲六等質朴直温厚而訥言行敬□夙以経謹犠牲性干□桑業□大正年間為創□村且郡産業団体則奮勵以□至□其功績也依団体——（以上推読推書・以下風化のため判読出来ず）

□□□□ □□□□ 天降福祿 家有餘慶

松尾常照撰

昭和三年三月吉日 向野産業組合

向野産業組合は、明治三十三年法律第三四号により公布せられた。「産業組合法」により結成せられたもので、現在の長洲町農業協同組合の一前身である。宮原氏は家業が代々獣医であったので、六栄、腹赤の人々から「伯楽<sup>はくらく</sup>さん」と親しまれた人で、向野産業組合をまとめあげ、推されてその組合長になり、その発展



石井実彰德碑

に盡力された功により、勲六等に叙されている。  
氏の父君源平氏は、六栄小学校の前身、向永小学校が出来る以前、家業獣医の傍ら、向野学校の教師として、郷童の指導に当られ、氏の教えを受けた人達により、生前にその墓碑が建てられている。

### 石井実彰德碑

所在地 鷺巢 石井秀行氏邸

碑高 一・六四 m 幅(最大) 五〇 cm 花こう岩 自然石 岩石高サ二四 cm 基壇石垣高サ八八 cm

碑文

彰德

石井実君者明治二十三年□月生六栄村鷺巢區長□歷任帝国鉄道院召為各地郵便局自昭和元年二月至十年二月就任向野産業組合長理事其間十年如一日刻苦經營整理□務使向野組合済有終之美君資性温厚当事剛直堅如鉄石雖□□幾多難関□□如流及六栄村聯合産組新設選而負専務之重任被挙学務委員村会議員等貢獻社会不尠茲組合相談君之功德永垂竹帛会爾

昭和十三年三月吉日 向野産業組合

向野産業組合が成立して、宮原喜次郎氏が組合長となり、幾多の難関を突破して、発展させた陰の功労者

であり、宮原氏の股肱として働いた人が石井実氏である。向野産業組合の発展後、六栄村聯合産業組合が出来、初代の組合長になられ、農業組合の基礎を築かれた人で、勲六等の叙勲に輝やく人でもある。

